

『吾輩は猫である』対訳(刘振瀛訳)
「から」「ので」を用いる日本語原文とその中国語対訳

注:分類欄に記載されている記号は次の意味を表す。
A=「原因・理由を表すもの」、B=「接続機能を持つもの」、C=「無標」

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
6		仕方がない*から*とにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。	3		出于无奈,我*只好*朝着那明亮似乎又挺暖和的地方爬去。	B	B-9
7		いやこれは駄目だと思った*から*眼をねぶって運を天に任せました。	3		我以为这下完了,*只好*紧闭双目,听天由命。	B	B-9
8		これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかった*から*已を得んのである。	4		这倒不是说我喜欢主人,而是*因为*没有人搭理我*而*不得已如此罢了。	A	A-53
8		吾輩は仕方がない*から*、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。	4		我万般无奈,*只好*尽量呆在收留我的主人身旁。	B	B-9
10		我儘で思い出した*から*一寸吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。	5		提到任性,倒*使*我想起我家主人由于这种任性吃了苦头的故事。	B	B-5
12		外に悪口の言い様を知らないのだ*から*仕方がないが、	8		除此外,他不懂得其它的骂法,*所以*只好随他骂了。	A	A-36
12		眼らしい所さえ見えない*から*目猫だか寐ている猫だか判然しないのである。	7		但是连个像眼睛的地方都看不出,根本无法判断这是瞎猫还是睡猫了。	C	C
12		最早一分も猶予が出来ぬ仕儀となった*から*不得已失敬して両足を前へ存分のして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸をした。	8		已经到了一分钟也忍不了的地步。不得已,我只好对不起了,便把两腿使劲向前一伸,把头用力向下一低,打了一个大呵欠。	C	C
12		尤もこれは寐ている所を写生したのだ*から*無理もないが、	7		当然,他画的是我大睡方酣时的姿态,情有可原,	C	C
12		どうぞ主人の予定は打ち壊したのだ*から*序に裏へ行って用を足そうと思つてのそのそ這い出した。	8		反正主人的计划已经让我打破了,不如趁机到后边去解决我的小急吧。我慢慢腾腾地走去。	C	C
13		然し挨拶をしないと険呑だと思つた*から*「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平気を装つて冷然と答えた。	9		我想如果不和它寒暄几句,将是很危险的,*于是*我竭力装得若无其事的样子,冷冷地回答道:“在下是只猫儿,还没有名字。”	A	A-38
13		大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが何しろその声の底に犬をも挫しぐべき力が籠つている*ので*吾輩は少なからず恐れを抱いた。	9		作为大王来说,这样用词不太文雅,可是在那声音深处,*使*人感到有一种足以挫猛犬的力量,使我颇为惶恐。	B	B-5
14		然し車屋だけに強いばかりでちつとも教育がない*から*あまり誰も交際しない。	10		但是正因为它是车夫家的,便处处逞强好胜,毫无教养,*所以*谁都不大和它来往。	A	A-36
15	「君などは年が年である*から*大分とつただろう」		11	“像你这样年富力强,一定捉过很多老鼠。”		C	C
15		けれども事實は事實で詐る訳には行かない*から*、吾輩は「実はとらうとらうと思つてまだ捕らない」	11		不过,事实总是事实,撒不得谎的。*于是*我回答说:“其实我老早就想捉老鼠啦,只是还没有捉到过。”	A	A-38
15		吾輩は彼と近付になってから直ぐこの呼吸を飲み込んだ*から*この場合にもなまじい己れを弁護して益々形勢をわるくするのも愚である、	11		我和它接近后,立即掌握了这个诀窍,*所以*面临这种场合,如果硬要为自己辩解,那就会使形势变得益发对自己不利,自然是划不来。	A	A-36
16	「…君はあまり鼠を捕るのが名人で鼠ばかり食うものだ*から*そんなに肥つて色つやが善いのだろう」		12	“你真是一个捕鼠‘名人’,尽吃老鼠,*所以*才这样肥胖,这样有光泽的吧。”		A	A-36
16	「…交番じゃ誰が捕つたか分らねえ*から*そのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。…」		12	警察当然不知道是谁捉到的,反正每只老鼠给五分钱奖励。		C	C
16		吾輩は少々気味が悪くなった*から*善い加減にその場を胡魔化して家へ帰つた。	12		我看到这般情景有点害怕,*就*随便应付了几句赶紧回家了。	B	B-1
17		料理屋の酒を飲んだり待合へ這入る*から*通人となり得るといふ論が立つなら、吾輩も一廉の水彩画家になり得る理窟だ。	13		只要到酒馆喝酒,或涉足一下“待合”*就*可称为嫖妓老手,那么我也可以算得上水彩画家了。	B	B-1
18	「いや時々冗談を言う人が真に受ける*ので*大に滑稽的美感を挑撥するのは面白い。…」		14	“哪里!我经常开个玩笑,人们就把它当真,玩笑可以挑起很大的滑稽美感,真有意思!”		C	C
20		吾輩は御馳走も食わない*から*別段肥りもしないが	16		我不吃美味佳肴,*所以*也没发胖。	A	A-36
20		欲をいっても際限がない*から*生涯この教師の家で無名の猫で終る積りだ	16		要说欲望,那是无穷无尽。我已下决心一辈子呆在这个教室里,作个无名的猫儿,了结此生吧。	C	C
20		吾輩は新年来多少有名になった*ので*、猫ながら一寸鼻が高く感ぜられるのは難有い。	17		新年以来,我多少有了点名气,作为一只猫儿也有一点扬眉吐气了,真是可喜可贺。	C	C
21		然し人間というものは到底吾輩猫属の言語を解し得る位に天の恵に浴しておらん動物である*から*、残念ながらそのままにして置いた。	18		但是人类毕竟是不懂我们猫族语言的动物,他们没有受过老天的这份恩宠,*所以*很遗憾只好不去管它了。	A	A-36
21		既に一応感服したものだ*から*、もうやめにするかと思うとやはり横から見たり、堅から見たりしている。	17		本来已经欣赏了一番,本该作罢,可是他仍然横过来竖过去看个不停。	C	C
21		主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬ*ので*、先つきから苦心をしたものと見える。	17		但却弄不清画上的动物是个啥东西,*所以*费尽心思一直在琢磨哩。	A	A-36
22		空ばかり見ているものだ*から*、吾等の性質は無論相貌の末を識別する事すら到底出来ぬのは気の毒だ。	18		可是据说*由于*人的眼睛只能是向上看,只知道仰望天空,*所以*不要说了解性格,就连识别我们相貌这类事也都无法做到,真是可怜得很。	A	A-18

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
22		況んや實際をいうと彼等が自ら信じている如くえらくも何ともないのだ*から*猶更むずかしい。	19		而且说句老实话,他们并不像他们自信的那样伟大,◆所以◆就无法做到。	A	A-36
22		又況んや同情に乏しい吾輩の主人の如きは、相互を残りになく解するというのが愛の第一義であるということすら分らない男なのだ*から*仕方がない。	19		更何况我那缺乏同情心的主人,就连相互了解才是爱的基础也不懂得,◆就◆更无法了解我们了。	B	B-1
22		達観しない證據には現に吾輩の肖像が目の前にあるのに少しも悟った様子もなく今年に征露の第二年目だ*から*大方熊の画だろうなどと気の知れぬことをいって済しているのもわかる。	19		其实并非如此,明明我的肖像摆在他的眼前,可他一点也没有觉察出来,却说什么“今年是和俄国开战的第二年,大概画的是北极熊吧”,竟然说出这等令人费解的话而毫不脸红,足见他并没有远见卓识。	C	C
23		吾輩は肴屋の梅公がくる時の外は出ない事に極めているのだ*から*、平気で、もとの如く主人の膝に座っておった。	20		除了鱼铺一个叫梅公的伙计送鱼来之外,我是决不迎出去的,◆所以◆我依旧不动声色地坐在主人的膝上。	A	A-36
24	「...。実は去年の暮から大に活動しているものです*から*出よう出ようと思っても、ついこの方角へ足が向かないので」		20	“。。。我从去年年底一直忙得不可开交,总想来看看您,可总没机会到这一带来。”		C	C
25		どっちにしたって明治の歴史に関係する程な人物でもないのだ*から*構わない。	21		不管是哪种揣测,横竖他不是与明治历史有关的人物,◆所以◆都无关紧要。	A	A-36
25	「どうも好い天気ですな、御閑なら御一所に散歩でもしましうか、旅順が落ちた*ので*市中は大変な景色ですよ」		22	“今天天气可真好啊,您要有空闲,我陪您去散散步吧。旅顺打了下来,街上可热闹啦。”		C	C
26		主人の服装には師走も正月もない。ふだん着も余所ゆきもない。出るときは懐手をしてぶらりと出る。外に着る物が無い*から*か、有っても面倒だから着換ええないのか、吾輩には分らぬ。	22		主人穿衣服无所谓腊月与正月,也不分什么平时装与出门装。一说出门,摆出双手,轻松自在地抬腿就走。我不知道这到底是◆因为◆没有另外的衣服可换呢,还是有衣服懒得换。	A	A-1
26		主人の服装には師走も正月もない。ふだん着も余所ゆきもない。出るときは懐手をしてぶらりと出る。外に着る物が無い*から*か、有っても面倒だから着換ええないのか、吾輩には分らぬ。	22		主人穿衣服无所谓腊月与正月,也不分什么平时装与出门装。一说出门,摆出双手,轻松自在地抬腿就走。我不知道这到底是因为没有另外的衣服可换呢,还是有衣服懒得换。	C	C
26		いつもの様に砂糖を分配してくれるものがない*ので*、大きい方がやがて壺の中から一匙の砂糖をすくい出して自分の皿の上へあげた。	23		◆因为◆没有人像平常那样给她们分白糖,那个大点的孩子很快从糖罐里用糖匙舀了一匙糖,倒在自己的碟子里。	A	A-1
27	「でもあなた澱粉質のものには大変功能があるそうです*から*、召し上ったらいいいでしょう」		23	“怎么你。。。。。人家说这对淀粉食物很管用的,◆还是◆吃了好啊”		B	B-10
27		吾輩の言う事などは通じないのだ*から*、気の毒ながら御櫃の上から黙って見物していた。	23		可惜我说的话她们听不懂,◆所以◆很遗憾,我只好坐在盛饭的桶上默不作声地欣赏这幕活	A	A-36
28		こんなときに後からくっついて行って膝の上へ乗ると、大変な目に逢わされる*から*、そつと庭から廻って書斎の縁側へ上って障子の隙から覗いて見ると、主人はエビクテタスとか云う人の本を抜いて見ておった。	24		这种时候,如果我紧跟在主人的后边,坐在他的膝上,就会大吃苦头,◆所以◆我从院子绕过去,爬到书斋前的廊子里,从纸窗的间隙往里偷偷一瞧,主人正摊开爱比克泰德写的书在读哩。	A	A-36
28		人間はこう自惚れている*から*困る。	25		糟糕的是,人总是这样自高自大。	C	C
29		但しその声は旅鴉の如く皺枯れておったので、切角の風采も大に下落した様に感ぜられた*から*所謂源ちゃんなるものの如何なる人なるかを振り向いて見るも面倒になって、懐手のまま御成道へ出た。	25		不过她那声音嘶哑得和乌鸦叫一样,◆使◆她那风流俊俏的姿态大为减色。我懒得回头去看所谓小源哥究竟是何许人,便甩着双手径直来到“御成路”。	C	C
29		我等猫属に至ると行住坐臥、行尿送尿悉く真正の日記である*から*、別段そんな面倒な手数を、己れの真面目を保存するには及ばぬと思う。	25		至于我们猫族,我认为行住坐卧、拉屎撒尿,就是我们的真实日记,没有必要费那么多手脚把自己的真实面貌一一保存下来。	C	C
29		但しその声は旅鴉の如く皺枯れておった*ので*、切角の風采も大に下落した様に感ぜられた*から*所謂源ちゃんなるものの如何なる人なるかを振り向いて見るも面倒になって、懐手のまま御成道へ出た。	25		不过她那声音嘶哑得和乌鸦叫一样,◆使◆她那风流俊俏的姿态大为减色。我懒得回头去看所谓小源哥究竟是何许人,便甩着双手径直来到“御成路”。	B	B-5
30		美学者の迷亭がこの体を見て、産氣のついた男じゃあるまいし止すがいいと冷かした*から*この頃は廃してしまつた。	27		美学家迷亭看到这个情况,调侃我说:“你一个男子汉,又不是要临产,做什么横膈膜运动,还是算了吧。”◆于是◆这些天我便停了下来。	A	A-38
30		先達て〇〇は朝飯を廃すると胃がよくなると云うた*から*二三日朝飯をやめて見たがぐうぐう鳴るばかりで功能はない。	26		前几天某某说:“如果不吃饭胃病就会好。”我试着停吃了二,三天早饭,结果只是腹中咕咕作响,毫无效果。	C	C
30		坂本竜馬の様な豪傑でも時々治療をうけたと云う*から*早速上根岸まで出掛けて揉ましてみた。	26		就连坂本龙马那样的豪杰,也时常接受这种治疗。”经他这么◆一◆说,我立即上根岸,让他们给按摩了一次。	C	C
30		後で身体が綿のようになって昏睡病にかかった様な心持がした*ので*、一度で閉口してやめた。	27		治疗后浑身疲软,就像得了昏睡病一样。领教这一次后,我再也不去了。	C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
31		然し自分が胃病で苦しんでいる際だ*から*、何とかかんとか弁解をして自分の面目を保とうと思った者と見えて、	27		但◆由于◆他正为胃病而苦恼着,为保存面子,千方百计地进行了辩解。	A	A-15
31		「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だったぜ」とあたかもカーライルが胃弱だ*から*自分の胃弱も名誉であると云った様な、見当違いの挨拶をした。	27		他说道:“你的说法新颖倒是新颖,不过你要知道卡莱尔也是患胃病的呀。”这是牛唇不对马嘴的回答,那意思就好像是说:“◆即便◆卡莱尔都是胃病患者,◆那◆”	A	A-39
31		C先生は蕎麦を食ったらよかろうと云う*から*、早速かけどもりをかわるがわる食ったが、これは腹が下るばかりで何等の機能もなかった。	27		C先生说:“你多吃些荞麦可能会好些。”我◆就◆不断地轮换着吃打团面和汤面,结果弄得我不断腹泻,却丝毫不见功效。	B	B-1
31		その上日記の上で胃病をこんなに心配している癖に、表面は大に瘦我慢をする*から*可笑しい。	27		而且,他在日记里明明对他的胃病表示极度担心,表面上却硬充好汉,实在好笑。	C	C
31		すると友人は「カーライルが胃弱だって、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極め付けた*ので*主人は黙然としていた。	28		于是朋友反驳说:“即便卡莱尔患胃病,可患胃病的人却不一定能成为卡莱尔嘛。”一句话说得主人哑口无言。	C	C
32		バルザックは兼ねて自分の苦心している名を目付けようという考えだ*から*往來へ出ると何もしないで店先の看板ばかり見て歩いている。	28		但巴尔扎克却想利用这个机会发现一个他反复求索而不可得的名字。◆所以◆他到了街上,别的什么也不顾,一路上只顾着那些店铺的招牌。	A	A-36
32		ところへ友人が遊びに来た*ので*一所に散歩に出掛た。	28		正在这时,一个朋友来玩,两人一起出去散步。	C	C
33		だから今雑煮が食いたくなっても決して贅沢の結果ではない、何でも食える時に置いて置くという考から、主人の食い剩した雑煮がもしや台所に残ってはいはずまいかと思出した*から*である。	29		所以我现在想吃年糕,决不是出于讲究吃,我只是想不管是什么,能吃到口就赶快吃。◆于是◆我就想起主人吃剩下的那块年糕可能还放在厨房里。	A	A-38
33		この位力を込めて食い付いたのだ*から*、大抵なものなら噛み切れる訳だが、	30		像我这样用足力气去咬,按理说一般的東西都应该咬断的。	C	C
34		要するに振り損の、立て損の、膝かし損であると気が付いた*から*やめにした。	31		想来,我的尾巴和耳朵与年糕毫不相干,不过是白摇尾巴,白竖耳朵,又白白地放下而已,醒悟这一点,我◆便◆停了下来。	B	B-2
34		餅がくっ付いてる*ので*毫も愉快を感じない。	30		可年糕仍然粘在嘴巴上,◆所以◆一点也不觉得高兴。	A	A-36
35		倒れかかる度に後足で調子をとらなくてはならぬ*から*、一つ所に居る訳にも行かんで台所中あちら、こちらと飛んで廻る。	31		每次要跌倒时,就得用后腿维持平衡,◆因而◆无法站在一个地方。于是我在厨房里到处蹦跳。	A	A-35
35		前足の運動が猛烈な*ので*稍ともすると中心を失って倒れかかる。	31		◆由于◆两条前腿要猛烈活动,往往失去重心,几乎跌倒。	A	A-15
35		倒れかかる度に後足で調子をとらなくてはならぬ*から*、一つ所に居る訳にも行かんで*ので*台所中あちら、こちらと飛んで廻る。	31		每次要跌倒时,就得用后腿维持平衡,因而无法站在一个地方。◆于是◆我在厨房里到处蹦跳。	A	A-38
35		漸く笑いがやみそうになったら、五つになる女の子が「御かあ様、猫も随分ね」といった*ので*狂瀾を既倒に何とかするという勢で又大変笑われた。	32		笑声刚要停下来,那个五岁的小女孩说了一句:“妈妈,你看那猫,也真够受呀。”◆于是◆又以所谓挽狂瀾于既倒之势,大家又大笑了我一番。	A	A-38
36		三毛子は正月だ*から*、首輪の新しいのをして行儀よく縁側に坐っている。	32		原来三毛姑娘带着过年的新项圈,正规矩矩地坐在廊子里。	C	C
36		ことよく日の当る所に暖かそうに、品よく控えているものだ*から*、身体は静肅端正の態度を有するにも関らず、天鵞毛を敷く程の滑らかな満身の毛は春の光りを反射して風なきにむらむらと微動する如くに思われる。	33		尤其当她在和煦的阳光下,暖暖和和,文雅大方地坐在那里时,虽然体态端庄静肃,但她那比天鹅绒还要光滑的浑身的毛,在春日阳光的辉映下,即使在无风之中也使人感到它在不停地轻轻颤动。	C	C
36		どうも痛い痛くないのって、餅の中へ堅く食い込んでいる歯を情け容赦もなく引張るのだ*から*堪らない。	32		不是什么痛与不痛的问题,她把我死死嵌进年糕里的牙齿毫不留情地这么一扯,谁受得了呀?	C	C
36		細君は踊は見たいが、殺してまで見る気はない*ので*黙っている。	32		主人的妻子虽也想看我跳舞,但她并不想眼看着我憋死,◆所以◆默不作声。	A	A-36
37		吾輩は前回断つた通りまだ名はないのであるが、教師の家に居るもの*から*三毛子だけは尊敬して先生々々といってくる。	33		我在前面已经声明过,我还没有名字,但◆因为◆住在教师家里,◆所以◆只有这位三毛姑娘尊敬我,总称我“先生”。	A	A-7
37		吾輩も先生と云われて満更悪い気持ちもしない*から*、はいはいと返事をしている。	33		我受她这样称呼,心里当然也满愉快的,◆便◆“嗯”的答应。	B	B-2
37		吾輩が笑うのは鼻の孔を三角にして咽喉仏を震動させて笑うのだ*から*人間にはわからぬ筈である。	34		我们的笑,是把鼻孔弄成三角形,咕噜咕噜地震动喉咙。人自然是不能了解这种笑法的。	C	C
38		「ええ」と仕方がない*から*降参をした。	35		“是啊。”我无可奈何◆只好◆认输。	B	B-9
38		六十二で生きている位だ*から*丈夫と云わねばなるまい。	34		六十二岁还活着,当然应该说是结实。	C	C
39	「あら御師匠さんが呼んでいらっしゃる*から*、私し帰るわ、よくて？」		35	“哟,师傅在叫我哪,我要回去了,行吗?”		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
39		話しをされると面倒だ*から*知らぬ顔をして行き過ぎようとした。	35		如果和它搭上话也怪麻烦的, ◆所以◆我想装作没看见的样子走过去算了。	A	A-36
39		説明して遣りたいが到底分る奴ではない*から*、先ず、一応の挨拶をして出来得る限り早く御免蒙るに若くはないと決心した。	36		我本想给它解释一下, 不过反正这家伙也不懂, ◆于是◆我决意先和它寒暄几句, 然后赶快来个敬而远之。	A	A-38
40		参考の爲め一寸聞いて置きたいが、聞いたって明瞭な答弁は得られぬに極まっている*から*、面と対つたまま無言で立っておつた。	36		我本想再问个究竟以供日后参考, 但即便是问它, 肯定也不会得到明确答复的, ◆所以◆我只好和老黑面面相觑地站着, 场面多少有些尴尬。	A	A-36
41	「…牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだ*から*始末に終えねえ阿魔だ」		37	「…就靠这一斤牛肉向前邻后舍显示她了不起, 真是个难调理的娘儿们!」		C	C
41	「それで面白い趣向がある*から*是非一所に来いと仰しゃるので」		38	「他说他想出一个有趣的主意, 要我务必和他一起去。」		C	C
41		主客の対話は途中からである*から*前後がよく分らんが、	38		◆由于◆我是中途进来的, 一时摸不清主人和客人的对话内容。	A	A-15
41		主人の手あぶりの角を見ると春慶塗りの巻煙草入れと並んで越智東風君を紹介致候水島寒月という名刺がある*ので*この客の名前も、寒月君の友人であるという事も知れた。	37		我看了一下主人眼前的小火盆旁边, 在带有“春庆漆绘”的烟盒一起有一张名片, 上面写着“谨此介绍越智东风君—水岛寒月拜上”的字样, 这◆就◆使我知道了这位客人的姓名, 也明白了他是寒月的朋友。	B	B-1
42	「…ボイは月並という意味が分らんものです*から*妙な顔をして黙っていましたよ」		38	「…服务员没有听懂‘庸俗’这个词眼, 显得迷惑不解的神色, 一声不吭。」		C	C
43	「ええ全く妙なのですが、先生が余り真面目だものです*から*、つい気がつきませんでした」		39	「是啊, 真是怪极啦, ◆由于◆迷亭先生说得十分认真, ◆所以◆我一下子被蒙住啦。」		A	A-18
43	「さあ私も少し可笑しいとは思いましたが如何にも先生が沈着であるし、その上あの通りの西洋通でいらっしゃるし、ことにその時は洋行なすつたものと信じ切っていたものです*から*、私も口を添えてトチメンボーだトチメンボーだとボイに教えてやりました」		40	「这个, 我当时也觉得有些怪, 可迷亭先生是那么不动声色, 加上他又是个西洋通, 尤其是我当时完全相信他当真留过洋, ◆所以◆我还帮着想向服务员说: ‘我们要的是橡面坊、橡面坊。’」		A	A-36
43	「それから、とてもなめくじや蛙は食おうって食えやしない*から*、まあトチメンボー位なところで負けとく事にしようじゃないか君と御相談なさるものです*から*、私はつい何の気なしに、それがいいでしょう、と喋ってしまったので」		39	「后来, 他和我商量说: ‘看来蛤蟆汤啦, 青蛙肉是想吃也吃不到啦, 咱们◆就◆来个橡面坊, 将就将就吧。’我当时心不在焉地回答了一句: ‘那也好。’」		B	B-1
43	「それから、とてもなめくじや蛙は食おうって食えやしない*から*、まあトチメンボー位なところで負けとく事にしようじゃないか君と御相談なさるものです*から*、私はつい何の気なしに、それがいいでしょう、と喋ってしまったので」		39	「后来, 他和我商量说: ‘看来蛤蟆汤啦, 青蛙肉是想吃也吃不到啦, 咱们◆就◆来个橡面坊, 将就将就吧。’我当时心不在焉地回答了一句: ‘那也好。’」		B	B-1
43	「いえそれはほんの冒頭*なので*、本論はこれからなのです」		39	「不, 这不过是个开场白罢了。正戏还在后头呢。」		C	C
44	「するとボイが又出て来て、近頃はトチメンボーの材料が私底で亀屋へ行っても横浜の十五番へ行っても買われせん*から*、当分の間は御生憎様でと気の毒そうに云うと、…」		40	不大工夫, 那服务员又出来了, 表示很大歉意似地说: ‘最近橡面坊的原料缺货, 到龟屋和横浜的十五号外国食品店去买也买不到, ◆所以◆作不成。’		A	A-36
44	「…材料は日本派の俳人だろうと先生が押し返して聞くとボイはへえ左様で、それだもの*から*近頃は横浜へ行っても買われせんので、まことに御気の毒様と云いましたよ」		40	先生故意又问了一句说: ‘材料大概是日本派俳人吧。’那服务员说: ‘是的, ◆所以◆说最近就是到横浜去也弄不到手, 实在对不起。’」		A	A-36
44	「…先生はそりゃ困ったな、切角来たのになあと私の方を御覧になって頼りに切り返さるるので、私も黙っている訳にも参りません*から*、どうも遺憾ですな、遺憾極るですなと調子を合わせたのです」		40	「这真糟糕呀, 好不容易特地跑來吃, 偏偏…’他一边看着我, 一边不断重复这句话, 我也不好一声不响, ◆便◆附和着说: ‘真遗憾呀, 真遗憾。’」		B	B-2
44	「どうせ我々は正月でひまなんだ*から*、少々待って食って行こうじゃないか…」		40	「…反正是新年期间、咱们也无事可做, 那就稍微等些时候, 吃了再走吧。…」		B	B-1
44	「どうせ我々は正月でひまなんだから、少々待って食って行こうじゃないかと云いながらポッケツとから葉巻を出してぶかりぶかり吹かし始られたので、私も仕方ない*から*、懐から日本新聞を出して読み出しました、…」		40	「…反正是新年期间、咱们也无事可做, 那就稍微等些时候, 吃了再走吧。’说着他从口袋里取出雪茄, 一口一口地吸起来, 我没办法, ◆也◆拿出《日本新闻》读起来了。…」		C	C
44	「どうせ我々は正月でひまなんだから、少々待って食って行こうじゃないかと云いながらポッケツとから葉巻を出してぶかりぶかり吹かし始られた*ので*、私も仕方ない*から*、懐から日本新聞を出して読み出しました、…」		40	「…反正是新年期间、咱们也无事可做, 那就稍微等些时候, 吃了再走吧。’说着他从口袋里取出雪茄, 一口一口地吸起来, 我没办法, ◆也◆拿出《日本新闻》读起来了。…」		B	B-3

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
44	「…先生はそりゃ困ったな、切角来たのになあと私の方を御覧になって頻りに切り返さるる*ので*、私も黙っている訳にも参りませんから、どうも遺憾ですな、遺憾極るですなと調子を合わせたのです」		40	「这真糟糕呀，好不容易特地跑來吃，偏偏…」他一边看着我，一边不断重复这句话，我也不好一声不响，◆便◆附和着说：“真遗憾呀，真遗憾。”		C	C
44	「…材料は日本派の俳人だろうと先生が押し返して聞くとボイはへえ左様で、それだものだから近頃は横浜へ行っても買われません*ので*、まことに御気の毒様と云いましたよ」			先生故意又问了一句说：‘材料大概是日本派俳人吧。’那服务员说：‘是的，所以说最近就是到横浜去也弄不到手，实在对不起。’		C	C
44	「…敬服の至りですと云って御別れた様なもの*の実は*の時刻が延びた*ので*大変空腹になって弱りましたよ」		41	“我说：‘实在佩服之至。’然后我们就分手了。不过，我的午饭时间已经耽搁，肚子空空，难受极了。”		C	C
44		アンドレア・デル・サルトに罹ったのは自分一人でない*と云う事を知った*ので*急に愉快になったものと見える。	41		看来，这是◆因为◆他知道上了迷亭の安德利亚，特尔，萨尔德的当的，不只是他一个人，◆所以◆突然高兴起来	A	A-7
45		蔽腕みから惚れられたと自認している人間もある世の中だ*から*この位の誤謬は決して驚くに足らんと撫でらるるがままに済していた。	42		在这个世上，有不少人误把斜视眼当做是送秋波，主人的这点阴差阳错也毫不足怪，◆所以◆我也就心安理得地任凭他抚摸着，	A	A-36
45	「実は今日参りましたのは、少々先生に御願があつて参つた*ので*」		41	“今天来拜访，是有点事情想托您。”		C	C
46	「なにあに、そんなに大変な事もないです、登場の人物は御客と、船頭と、花魁と仲居と遣手と見番だけです*から*」		42	“不，也没有什么大不了的，登场人物不过是嫖客，船老大，粉头，跟妈，鸭儿和忘八这几个角色罢了。”		C	C
46	「色々おりました。花魁が法学士のK君でしたが、口髯を生やして、女の甘ったるいせりふを使かうのです*から*一才妙でした。…」		43	“有各式各样的人，担任粉头的是法学士K君，他留有胡子，学起女人娇声娇气的念白来，可有意思啦。……”		C	C
47	「…つまり身振りがあまり過ぎたのでしよう、今まで耐えていた女学生が一度にわっと笑いだしたものです*から*…」		44	“…大概我的表情太过火了吧，那几个一直忍着笑的女学生，哄地一起大笑起来。”		C	C
47	「…それで腰を折られてから、どうしても後がつづけられない*ので*、とうとうそれぎりで散会しました」		44	本来正搞得起劲的朗读，一下子给打断了，怎么也接不上茬儿，不得不到此散会了。”		C	C
47	「第二回からは、もっと奮発して盛大にやる積もりな*ので*、今日出ましたのも全くその為で、」		44	我打算从下一次起，再把把劲，搞得更盛大一些，今天到府上来，也完全为了这个目的，		C	C
48		今までこんな事に合つた事のない主人にとっては無上の光榮である*から*返事の勢のあるのも無理はない。	45		对于过去从未经历过这种事儿的主人来说，自然是无上光荣，◆所以◆难怪他答应得那么爽快了。	A	A-36
49		迷亭先生の手紙に真面目なのは殆んどない*ので*、この間などは「その後別に恋着せる婦人も無之、いざ方より艶書も参らず、先ず先ず無事に消光罷り在り候間、乍擧り御休心可被下候」と云うのが来た位である。	45		迷亭先生的来信几乎没有一封是正经的，比如，他最近甚至寄来这样一封信，一开始就写什么：“别后，既无眷恋之妇人，亦未从何处寄来情书，使仆得以平安度日，伏维释念可也。”	C	C
52		あまり書き方が真面目だものだ*から*つい仕舞まで本気にして読んでいた。			◆因为◆信写得十分认真，◆所以◆不由得信以为真，一气读完了。	A	A-7
53	「…腹が立った*から*それじゃ見て戴かなくともよう御座いますこれでも大事の猫なんですって…」		49	我生气地说：‘那么您不给看也没关系，这可是我们家最宝贵的猫哪。’		C	C
54	「旧幕時代に無い者に疎な者はない*から*御前も氣をつけなさいといかんよ」		50	“这种旧幕时期没有过的，都不是好东西，你也要当心呀！”		C	C
55	「あんな主人を持っている猫だ*から*、どうせ野良猫さ、今度来たらずし叫いて御遣り」		51	“那只猫◆既◆有那样的主人，准是个野猫，下次来了，你揍它！”		A	A-29
55	「無名氏の作にも随分善いのある*から*中々馬鹿に出来ない。…」		52	“无名氏他的作品也有很好的，不能小瞧。…”		C	C
56	「…君は声が善い*から*中々面白い」		53	你的声音很美，很有意思		C	C
56	「…山陽が馬子の書いた借金の催促状を示して近來の名文は先ずこれでしょうと云つたという話がある*から*、君の審美眼も存外儲かも知れん。…」		52	“山阳先生把马夫写给他的讨帐信拿给那人看，说：‘这可以算得上是近來的好文章喽。’说不定你的审美眼力还满不错哩。”		C	C
57	「…實際うまい*から*訳してみたのさ、…」		53	文章写得很妙嘛，◆所以◆我将它译过来。		A	A-36
57	「…僕も近頃は水彩画をやめた*から*、その代りに文章でもやろうと思つてね」		53	我也是最近不再画水彩画，◆所以◆才想到搞点文章什么的		A	A-36
57	「…只面白い文章だと思つた*から*訳してみたばかりさ」		53	只不过觉得文章极有趣◆才◆将它译了出来罢了		B	B-6
57	「…あの越智東風と云う男は至て正直な男ですが少し變つて居るところがある*ので*あるいは御迷惑かと思つたが、…」		54	这个叫越智东风的，倒是个非常老实的人，不过多少有点怪，我本来怕给您添麻烦，…		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
58	「それが全く文学熟から来たので、こちと読むと遠近と云う成語になる、のみならずその姓名が韻を踏んでいると云うのが得意なんです。それだ*から*東風を音で読むと僕が切角の苦心を人が買ってくれないといつて不平を云うのです」		54	这完全是出于对文学的着迷, 如果念成Kochi, 那么和姓连成一起就成了Ochikochi, 就和成语‘远近’同音, 不但这样, 而且这四个音阶又都合辙押韵, 他对这点非常得意哩。◆所以◆他常发牢骚说: 如果用汉音去读我这个东风,		A	A-36
58	「…さすがが永年教師をして胡魔化しつけているもの*だから*、こんな時には教場の経験を社交上にも応用するのである」		55	不过, 多亏了他当过多年教员懂得如何糊弄人, ◆所以◆在这种情况下, 便把教书时的本领, 应用到社交上来了		A	A-36
58	「…いえこの次はずっと新しい者を撰んで金色夜叉にしましたと云う*から*、君にや何の役が当たるとか聞いていたら私は御官ですといったのさ。…」		55	已经决定搞《金海夜叉》了。我问他: ‘那么, 你担当什么角色?’ 他说: ‘我是阿言姑娘。’		C	C
58	「然しあの男はどこまでも誠実で軽薄なところがない*から*好き。…」		55	不过, 这人很不错, 诚实, 一点也不轻浮,		C	C
58	何でも第二回には知名の文士を招待して大会をやる積りだ*から*、先生にも是非御臨席を願っていたって。		55	据说第二回打算请一些有名的文人开个大会, 他还向我说: ‘务必也请先生光临。’		C	C
58		吾輩は喉呑になった*から少し傍を離れる。	55		我感到挨紧他危险, 赶快离开了一点。	C	C
58	「それが全く文学熟から来た*ので*、こちと読むと遠近と云う成語になる、のみならずその姓名が韻を踏んでいると云うのが得意なんです。…」		54	这完全是出于对文学的着迷, 如果念成Kochi, 那么和姓连成一起就成了Ochikochi, 就和成语‘远近’同音, 不但这样, 而且这四个音阶又都合辙押韵, 他对这点非		C	C
59	「随か暮の二十七日と記憶しているがね。例の東風から参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたい*から*御在宿を願うと云う先き触れがあったので、朝から心待ちに待っていると先生中々来ないやね。…」		56	我记得大概是腊月二十七, 这位东风先生事先给我来了封信, 上面写着: ‘兹拟趋府请教有关文艺上的高见, 务请届时在府稍候’, 于是我从清晨便专候着他来, 可这位老兄却姗姗来迟。		C	C
59	「…昼飯を食ってストーブの前でバリー・ベーンの滑稽物を読んでいるところへ静岡の母から手紙が来た*から*見ると、年寄だけにいつまでも僕を子供の様に思っ		56	我吃完午饭饭在火炉前读了一会儿泊利·倍恩的幽默读物, 这时老母从静岡来了封信, 我打开一看, 老年人嘛, 到什么时候也把我当小孩子看。		C	C
59	「随か暮の二十七日と記憶しているがね。例の東風から参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたい*から*御在宿を願うと云う先き触れがあった*ので*、朝から心待ちに待っていると先生中々来ないやね。…」		56	我记得大概是腊月二十七, 这位东风先生事先给我来了封信, 上面写着: ‘兹拟趋府请教有关文艺上的高见, 务请届时在府稍候’, ◆于是◆我从清晨便专候着他来, 可这位老兄却姗姗来迟。		A	A-38
60	「…すると一日動かさずにおったもの*だから*、胃の具合が妙で苦しい。…」		57	这时, ◆由于◆我一整天也没怎么活动, 胃里十分不舒服。		A	A-15
60	「…その中とうとう晩飯になった*から*、母へ返事も書こうと思つて一寸十二三行かいた。…」		57	这时已经吃过晚饭, 我想给母亲写回信, 写了十二、三行。		C	C
60	「…母の手紙は六尺以上もあるのだが僕にはとてもそんな芸は出来ん*から*、何時でも十行内外で御免蒙る事に極めてあるのさ。…」		57	母亲写的信足足有六尺多长, 我可没有那种本领, 每回总是写个十行左右就完了, 只好请她老人家担待着吧。		C	C
61	「…危ない*から*よそう…」		58	太危险, ◆还是◆算了吧。		B	B-10
62	「…私などは自分でやはり似た様な経験をつい近頃したもので*から*、少しも疑がう気になりません」		59	其实最近我自己也有过相类似的事儿, ◆所以◆我一点儿不怀疑。		A	A-36
62	「…某博士の夫人が私のそばへ来てあなたは○○子さんの御病気を御承知ですかと小声で聞きますので、実はその兩三日前達った時は平常の 通り何所も悪い様には見受けませんでした*から*、私も驚ろいて精しく様子を聞いてみますと、…」		60	谋博士的夫人来到我的身旁, 小声问我说: ‘您知道某某小姐生病了吗?’ 说来, 我两三天前见到那位小姐的时候, 她还和平常一样, 看不出她哪个地方不舒服, ◆所以◆我吃了一惊, 仔细问了情况。		A	A-36
62	「晩餐も済み合奏も済んで四方の話しが出て時刻も大分遅くなった*から*、もう暇乞をして帰ろうかと思つていますと、…」		59	晚餐以毕, 乐器合奏也完了, 大家进入闲谈, 时间已经相当晚, 我想向主人告辞。		C	C
62	「…某博士の夫人が私のそばへ来てあなたは○○子さんの御病気を御承知ですかと小声で聞きます*ので*、実はその兩三日前達った時は平常の 通り何所も悪い様には見受けませんでした*から*、私も驚ろいて精しく様子を聞いてみますと、…」		60	谋博士的夫人来到我的身旁, 小声问我说: ‘您知道某某小姐生病了吗?’ 说来, 我两三天前见到那位小姐的时候, 她还和平常一样, 看不出她哪个地方不舒服, 所以我吃了一惊, 仔细问了情况。		C	C
63	「…何しろ熱が劇しいので脳を犯している*から*、もし睡眠剤が思う様に功を奏しないと危険である……」		60	反正烧得很厉害, 致使头脑昏迷, 如果安眠药不管用, 就有危险。		C	C
63	「冷笑なさつてはいけません、極真面目な話しなんです*から*……」		60	你甭冷笑, 我这可是用极严肃认真的态度来讲的哪。		C	C
63	「…何しろ熱が劇しい*ので*脳を犯しているから。…」		60	反正烧得很厉害, ◆致使◆头脑昏迷。		A	A-54
64	その返事が大きかつたものです*から*静かな水に響いて、		61	◆由于◆我回答的声音太大, 在静静的水面上发出回响。		A	A-15

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
64	〇〇子の声がまた苦しうに、訴えるように、救を求めるように私の耳を刺し通した*ので*、今度は「今直に行きます」と答えて欄干から半身を出して黒い水を眺めました。		61	那位小姐的声音如怨如诉, 穿透我的耳鼓, 似乎在向我求助。◆于是◆我答应了一声‘我这就去’, 便从栏杆上探出半个身子看了看黑黝黝的河水。		A	A-38
65	鯉谷は嫌いだ*から*今日はよそとその日はやめにした。		63	我不爱听《鯉谷》, 今天◆就◆算了。吧。		B	B-1
65	「…門の内て下女と羽根を突いていました*から*病気は全快したものと見えます」		62	她在门里和女仆玩羽毛毽呢, 想必已经痊愈啦。		C	C
65	つい間違つて橋の真中へ飛び下りた*ので*、その時は実に残念でした。		62	其实我弄错了方向, 跳到桥当中去啦。当时觉得遗憾极了。		C	C
66	細君が御歳暮の代りに撰津大掾を聞かしてくれろと云う*から*、連れて行ってやらん事もないが		63	我妻子向我说‘你不用给我买什么岁末的礼物啦, 陪我去听一次摄津大掾的演唱吧’, 我带她去当然未尝不可。		C	C
66	しかし一世一代と云うので大変な大入だ*から*到底突懸けに行つたつて道入れる気遣はない。		63	不过, 据说这个曲子是他这次为告别艺坛登台献艺的最后几出拿手的曲子, 听众肯定要爆满的, 你这样冒冒失失地丢下, 是找不到座		C	C
66	元来ああ云う場所へ行くには茶屋と云うものが在つてそれと交渉して相当の席を予約するのが正当の手續きだ*から*それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、		63	到那种地方去, 先要和‘观剧茶屋’打交道, 让他们给订个较好的座位, 这才是正常的手续。不这样, 脱离常规是不好的。		C	C
66	私は女です*から*そんなむずかしい手續きなんか知りませんが、		63	我是个女人, 不懂得那一类麻烦的手续。		C	C
66	堀川は三味線もので賑やかなばかりで実がない*から*よそと云うと、細君は不平な顔をして引き下がった。		63	《堀川》是以听三弦为主的, 一味地热闹, 不够味, 今天算了, 妻子不满意地退下去了。		C	C
66	私に聞かせるのだ*から*いっしょに行つて下すつても宜いでしょうと手話の談判をする。		63	‘…你也许不喜欢, 不过你为了让我听陪我去一次总还可以吧。’她和我展开了最后的谈判。		C	C
66	大原のお母あさんも、鈴木君代さんも正当の手續きを踏まないで立派に聞いて来たんで*から*、いくらあなたが教師だからって、そう手数のかかる見物をしないで済ましましょう。		63	不过, 大原家的老太太, 铃木家的君代, 都没按什么常规手续, 照样去听了。虽说你是个当教师的, 也用不着费这些事去听曲子嘛。		C	C
67	細君が年に一度の願だ*から*是非叶えてやりたい。		64	我妻子一年当中好不容易才提出这么一个要求, 我是满心想使她如愿以偿的。		C	C
68	早く有為転変、生者必滅の理を呑み込ませようとして少し急ぎ込んだものだ*から*、つい細君の英語を知らないと言ふ事を忘れて、何の気も付かずに使つてしまった訳さ。		65	加上急着想让她早些理解‘有為转变、生者必灭’之理, 一下子忘了她不懂英语这件事儿, 无意中使用了英语。		C	C
68	四時までにはきつと直つて見せる*から*安心していい。		64	四点钟前, 我的病一定会好, 你尽管放心。		C	C
68	そんな横文字なんか誰が知るもんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使つて人にかからうのだ*から*、宜しゅうございませ、どうせ英語なんかは出来ませんから、		65	谁懂得那种蟹行文呀, 你明知人家不懂英文, 却故意用英语来戏弄我, 那好, 随你便, 反正我不懂英语的。		C	C
68	全く妻を愛する至情から出た*ので*、それを妻のように解釈されては僕も立つ瀬がない。		65	完全是出于爱妻的至情, 如果像我那样的理解, 那我简直没脸见人。		C	C
69	細君は水薬を茶碗へ注いで僕の前へ置いてくれた*から*、茶碗を取り上げて飲もうとする、胃の中からはげと云う者が唸鳴して出てくる		66	妻子把药水倒在碗里放在我的面前, 我端起碗来想喝, 胃里突然发出很大的唸鸣声。		C	C
70	「行きたかつたが四時を過ぎちゃ、道入れないと云う細君の意見なんだ*から*仕方ない、やめにしたさ。		67	我倒是真想去, 不过我妻子的意见是, 过四点就买不到票了, ◆所以◆没办法, 只好不去喽。		A	A-36
71	ひっそりして人の気合もしい*から*、泥足のまま椽側へ上つて座蒲団の真中へ寝転んで見るといい心持ちだ。		68	四周静悄悄, 不像有人在家的样子, 我◆于是◆四脚带着泥土, 爬到廊子上, 往坐垫当中一躺, 真是舒服极了。		A	A-38
71	平常は言葉数を使わない*ので*何だか了解しかねる点があるように思われていた。		67	不过他平时不大爱说话, ◆使◆我感到他似乎有些不易捉摸之处。		B	B-5
71	こう考えると急に三人の談話が面白くなつた*ので*、三毛子の様子でも見て来ようかと二絃琴の御師匠さんの庭口へ廻る。		68	想到这里, 我突然对这三个人的谈话不再感兴趣, 我想还是去看看三毛姑娘吧, 于是我来到教授二弦琴的女师傅的庭院门口。		C	C
72	……それから猫背信女の誉の字は崩した方が恰好がいい*から*少し劃を易えたと申しました」		69	还说: ‘猫背信女’的‘誉’字用行书写会更好看些, ◆所以◆稍微把笔划改动了一下。		A	A-36
72	ええ念を押しましたら上等を使った*から*これなら人間の位牌よりも持つと申しておりました。		69	他说用的是上等材料, 比人的牌位还要耐用哩。		C	C
73	死ぬと云う事はどんなものか、まだ経験した事がない*から*好きとも嫌いとも云えないが、		70	死到底是怎么回事儿, 我还没有经历过, ◆所以◆谈不上喜欢还是讨厌。		A	A-36
73	「しかし猫でも坊さんの御経を讀んでもらつたり、戒名をこしらえてもらったのだ*から*心残りはあるまい」		70	虽说她是只猫, 可我总算请了和尚来诵经, 还给她起了个‘戒名’, 这样, 我心里◆也◆就没有什么遗憾的啦。		B	B-3

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
73	先日あまり寒い*ので*火消壺の中へもぐり込んでいたら、下女が吾輩がいるのも知らんて上から蓋をした事があった。		70	不过前些日子曾发生过这样一件事：◆因为◆天气特冷，我钻到“消防桶”里取暖，厨娘阿三不知我在里边，就从上边把盖子盖上		A	A-1
74	「少し短か過ぎたようだった*から*、大変御早うございますねと御尋ねをしたら、月桂寺さんは、ええ利目のあるところをちよいとやっておきました、		70	我也觉得念得太短了，我问和尚：‘您怎么这么快就念完啦？’月桂寺的和尚说：‘是啊，我专拣最管用的一段经文念了一下。		C	C
74	なに猫だ*から*あのくらいで充分浄土へ行かれますとおっしゃったよ」		71	不得事的，她是个猫嘛，有了这一段经文，就满可以超升天界啦		C	C
74	「罪が深いんです*から*、いくらありがたい御経だって浮かべられる事はございませんよ」		71	罪孽那样深重，不管给它念什么宝贵的经文，它也上不了西天。		C	C
74		主人は吾輩の普通一般の猫でないと言う事を知っているものだから*から*吾輩はやはりのらくらしてこの家に起臥している。	71		但◆由于◆主人深知我不是一只凡猫，◆所以◆我仍旧得以悠悠荡荡，生活在这个家里。	A	A-18
74		鼠はまだ取った事がない*ので*、一時は御三から放逐論さえ呈出された事もあったが、	71		我还没有捉过一只老鼠，有一个时期，厨娘阿三甚至提出要把我驱逐出去。	C	C
75		幸い人間に知己が出来た*ので*さほど退屈とも思わぬ。	72		所幸在人类中有了知己，也◆就◆不感到怎样沉寂了。	B	B-1
76	「鼻汁を垂らすのは、ちと酷だから*から*消そう」		73	‘流清鼻涕’这句话也太损啦，抹去吧。		C	C
76		吾輩はどこまでも人間になりすましているのだ*から*、交際をせぬ猫の動作は、どうしてもちよいと筆に上りにくい。	72		◆因为◆我始终以为自己已经是个人了，◆所以◆对不再交往的其它猫儿的行为，也就有点难于形之笔墨啦。	A	A-7
77		肉が付いている*ので*びんと針を立てたごとくに立つ。	74		◆由于◆鼻毛根上带点肉，结果像根针似的笔直地竖在纸上。	A	A-15
77		粘着力が強い*ので*決して飛ばない。	74		◆由于◆粘得很牢，根本吹不动。	A	A-15
78	「香一（？）もあまり唐突だから*から*已めろ」		75	‘一炷香’也太突然，去掉它！		C	C
79		計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想な顔もしてられない*から*、ニヤニヤと愛嬌を振り蒔いて膝の上へ這い上って見た。	76		想不到主人竟命令我来招待迷亭先生，我当然不便以冷漠的态度相对，我向他喵喵地叫了几声，以表示好意，然后爬到他的膝上去。	C	C
80	「どこへ参るにも断わって行った事の無い男です*から*分りかねますが、大方御医者へも行ったんでしょ」		77	不知道呀，他这个人出门从来不说去哪儿，大概是到大夫那儿去了吧		C	C
82	「王様がいくらなら売るといって聞いたら大変な高い事を言うんですって、あまり高いもんだ*から*少し負けないかと云うとその女がいきなり九冊の内の三冊を火にくべて 焚いてしまったそうです」		79	据说那个皇帝问她多少钱才肯卖，结果要的价钱非常之高，◆由于◆那个皇帝嫌贵，◆便◆说能不能少要点价，于是那个女人一下子便把九册中的三册投到火里烧了。		A	A-16
82	「あんなに本を買ってやたらに詰め込むものだから*から*人から少しは学者だとか何とか云われるんですよ。		79	太太苦沙弥那么喜欢买书，胡乱填满脑袋，别人会说他是学者啦或什么的呀。		C	C
82	それを引かせようとする、残ってる三冊も火にくべるかも知れない*ので*、王様はどうとう高い御金を出して焚け余りの三冊を買ったんですって……		79	假如还叫她让价，说不定还会把剩下的三册也投进火里去，这个皇帝终于付出高价把烧剩下的三册买了下来。		C	C
83	「ぜんだってなどは学校から帰ってすぐわきへ出るのに着物を着換えるのが面倒だものだから*から*、あなた外套も脱がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。		80	就拿前些天来说，他从学校回来，马上要到别的地方去，他嫌换衣服麻烦，你猜怎么着？他连外套也不脱，坐在书桌上吃饭，		C	C
84	「まるで犬に芸を仕込む気である*から*残酷だ。		81	这简直和戏弄小狗一般，太残酷啦。		C	C
84	それ以来、坊や辛いのはどこと聞くときつと舌を出す*から*妙だ」		81	从那以后，只要问她：‘宝宝，哪儿辣？’她就伸出舌头来，真有意思哩。		C	C
84		細君は分らんものだから*から*好加減な挨拶をする。	81		主人的妻子听不懂迷亭说什么，◆只好◆含糊地说了一句：	B	B-9
85	「君は首を縊り損くなった男だから*から*傾聴するのが好いが僕なんざあ……」		82	你是上过吊没死成的人，◆所以◆很可以倾听一番，可我…		A	A-36
85	首縊りの力学と云う脱俗超凡な演題なのだ*から*傾聴する価値があるさ」		82	他的演说是‘吊死的力学’这种超凡脱俗的题目，◆所以◆值得好好倾听哩		A	A-36
85	なあに君はひま人だから*から*ちよとどいいやね		82	你也是闲人一个，这不好吗？		C	C
85	「稽古です*から*、御遠慮なく御批評をお願いします」		82	这次是练习，请不要客气地指教		C	C
85	「歌舞伎座で悪寒がするくらいの人間だから*から*聞かれないと云う結論は出さうもないぜ」		82	就是去歌舞伎座发生过寒热的人，也不见得就能得出结论说不		C	C
85		今日は晩に演舌をするという*ので*例になく立派なフロックを着て	82		◆因为◆今天晚上要演讲，◆所以◆例外地穿了一身漂亮的大礼服。	A	A-7
86	「これから本論に這入るところです*から*、少々御辛防をお願いします。		83	下一步就要进入本题啦，请稍安勿躁…		C	C
87	希臘語で本文を朗読しても宜しゅうございますが、ちと街うような気味にもなります*から*やめに致します。		84	我本来可用希腊语朗读一下原文，不过那会有炫耀自己之嫌，◆所以◆就不念啦。		A	A-36
87	「提灯玉と云う玉は見た事がない*から*何とも申されませんが、		85	您所说的球形小灯笼，那种小球我没有看见过，无法作答。		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
88	「それから英国へ移って論じますと、ペオウルフの中に絞首架即ちガルガと申す字が見えます*から*絞罪の刑はこの時代から行われたものに違ないと思われれます。」		86	下边转到英国, 来研究一下在《贝奥武甫》里出现过绞首架, 也就是galga这个词, ◆所以◆我认为绞刑肯定是从这个时候开始的。		A	A-36
88	「何そんな遠慮はいらん*から*、ずんずん略すさ……」		86	哪里, 你大可不必考虑这点, 略去吧! 略去吧!		C	C
88		但しこの大抵と云う度合は兩人が勝手に作ったのだ*から*他人の場合には応用が出来ないかも知れない。	85		不过, 这个所谓大体上所表示的分寸是他们两个人任意定出来的, 也许对别人来说并不适用。	C	C
89	「……これはたしかに医者が計って見たのだ*から*間違はありません」		87	这是医生量过的, 保证不会有错		C	C
89		遠方で起った出来事的事だ*から*吾輩には知れよう訳がない。	87		◆由于◆是远处发生的事儿, 我当然无从知晓。	A	A-15
89	またやり直す*と今度は繩が長過ぎて足が地面へ着いた*ので*やはり死ねなかつたのです。		86	又来第二回, 这次绳子又太长了, 两脚着地, 还是没有死成,		C	C
89		迷亭が無暗に風来坊のような珍語を挟むのと、主人が時々遠慮なく欠伸をする*ので*、ついに中途でやめて帰ってしまった。	87		◆由于◆迷亭中途不断插入一些东拉西扯的怪话, 主人又不时地毫不客气的打哈欠, ◆所以◆寒月不得不中途收兵, 告辞而去。	A	A-18
90	日本人は清廉の君子ばかりだ*から*到底駄目だと云ったんだとき。		88	日本人都是清廉的君子, 肯定不会卖的。		C	C
90	「知らん、近頃は合わん*から*」		87	不知道, 最近我没见着他。		C	C
91	西洋の篤口や掛矢は先生何と翻訳して善いのか習った事が無い*から*弱わらあね		88	他没学过德语中这些词汇, ◆当然◆不知道怎么译才好。		B	B-12
91	早口で無暗に問い掛けるもの*から*少しも要領を得ないのさ		88	那德国人说得非常快, 而且一问就是一大串问题, 根本摸不清他说的是什么		C	C
91	相手が西洋人だ*から*調和を計るためにさいならにしたんだって、		89	对方是西洋人, 为了和德语调和起见, 我才说成“塞伊诺拉”的。		C	C
92		かく著しい鼻だ*から*、この女が物を言うときは口が物を言う*と云わんより、鼻が口をきいてるとしか思われれない。	90		◆由于◆是这样一个具有特色的鼻子, ◆所以◆这个女人说话时, 会使你觉得与其说是她的嘴在说话, 还不如说是鼻子在说话。	A	A-18
94	「実は方々からくれくれと申し込はございますが、こちらの身分もあるものでございます*から*、滅多な所へも片付けられませぬ*ので*……」		92	本来有许多人家都想和我们攀亲, 可我们不能不考虑自家的身分, 不能随便◆就◆许给一个什么人啊。		B	B-1
94	「ほかにもだんだん口が有るんです*から*、無理に貰っていただかないだつて困りやしません」		92	我并没有说要把女儿嫁给他, 还有许多家来求亲, 不把女儿嫁给他也无所谓。		C	C
96	もう隠したつてしようがない*から*白状しようじゃないか」		94	咱们也不用瞒着啦, 还是全部都交代出来吧。		C	C
97	「ええ。引き受けて貰うたつて、ただじゃ出来ませんやね、それやこれやでいろいろ物を使っているんです*から*」		95	是啊, 当然, 我不可能白求她, 我送了她各种东西呢。		C	C
98	「博士になるかならんかは僕等も保証する事が出来ん*から*、ほかの事を聞いていただく事にしよう」		96	能否当上博士, 我们也无法保证, 请你问别的吧。		C	C
98		不幸にしてその意味が鼻子には分らんものだ*から*「へえー」とは云つたが怪訝な顔をしている。	95		不幸的是鼻子听不懂主人说的是什么意思, 她“吓!”了一声, 脸上显出惊讶的神色	C	C
98	悲しい事に力学と云う意味がわからん*ので*落ちつきかねている。		96	可悲的是, 鼻子不懂什么叫力学, ◆所以◆还在心里犯嘀咕。		A	A-36
99	「さあ僕も素人だ*から*よく分らんが、何しろ、寒月君がやるくらいなんだ*から*、研究する価値があると見えますな」		96	这点我也是门外汉, 不太清楚。反正寒月◆既然◆在搞, 看来, 大概有研究价值吧。		A	A-21
99	「あらいやだ、狸だよ。何だつて撰りに撰って狸なんぞかくんでしょね——それでも狸と見える*から*不思議だよ」		97	哎哟, 真恶心死啦! 这不是‘狸精’吗? 为什么别的画, 偏偏要画‘狸精’呢? 可是画得倒是不错, 真怪, 一看就知道是‘狸精’……		C	C
99	「さあ僕も素人だ*から*よく分らんが、」		96	这点我也是门外汉, 不太清楚。……		C	C
99	「何も永く前歯欠成を名乗る訳でもないでしょう*から*御安心なさいよ」		97	请放心吧, 他并没有宣称让牙永远缺下去。		C	C
99	「歯を壊める小遣がない*ので*欠けなりにしておくんですか、または物好きで欠けなりにしておくんですか」		97	◆是因为◆缺镶牙的零用钱, ◆才◆就那样让牙齿缺下去的呢, 还是故意与众不同才缺着的呢?		A	A-55
100	「いえ、もうこれだけ拝見すれば、ほかのは沢山で、そんなに野暮でないだ*と云う事は分りました*から*」		98	不必啦, 我看了这么多, 其它的不看也可以了。我了解啦, 反正寒月先生不是那种粗鲁人就是了。		C	C
100	空に美しい天女が現われ、この世では聞かれぬほどの微妙な音楽を奏し出した*ので*、天文学者は身に沁む寒さも忘れて聞き惚れてしまいました。		98	这时空中出现了一位美丽的仙女, 演奏世上绝对听不到的音乐, 天文学者忘了彻骨的寒冷, 听入了神。		C	C
101	元来御前がこんな黴苔茶な黒木綿の羽織や、つぎだらけの着物を着せておく*から*、あんな女に馬鹿にされるんだ。		100	都是你让我穿这种皱皱巴巴的黑棉布外褂和补丁摺补丁的长袍, ◆所以◆才被那个女人瞧不起。		A	A-36
101	さあ遠慮はいらん*から*、存分御笑いなさい」		99	好啦, 请不必客气, 尽情地笑吧。		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
101	「しかし顔の醜訴などをなさるのは、あまり下等ですわ、誰だって好んであんな鼻を持っている訳でもありません*から*—		99	不过，你们净说人家鼻子的坏话，未免太不文明啦，谁也不是愿意长那样一个鼻子的呀。		C	C
101	あしたから迷亭の着ているような奴を着る*から*出してあげ		100	“…从明天起，我要穿迷亭穿的那种衣服，你给我找出来！”		C	C
102	「静岡に生きてますがね、それがただ生きてるんじや無いです。頭にちょん髷を頂いて生きてるんだ*から*恐縮しまさあ。		100	“住在静岡，不过他可不只是还活着，而且脑袋上还一直顶着个顶髷哪，真让人不能不为之赞叹啊。”		C	C
103	「仕方がない*から*見計らって送ってやった」		101	“有什么办法，◆只好◆估量着做了一套给他寄去。”		B	B-9
103	ちょっと驚ろいた*から*、郵便で問いついたところが老人自身が着ると云う返事が来ました。		101	我有点莫名其妙，写信去问了一下，回信说是老人家自己要穿的。		C	C
103	二十三日に静岡で祝捷会がある*から*それまでに間に合うように、至急調達しろと云う命令なんです。		101	二十三日在静岡有个祝捷会庆，命令我必须在此之前买好寄去。		C	C
103	寒い*から*、もっと寝ていらっしやい		100	太冷了，您在多躺一会儿吧。		C	C
104	「なあに漢学者でさあ、若い時聖堂で朱子学か、何かにこり固まったもの*から*、電氣灯の下で恭しくちょん髷を頂いているんです。仕方がありません」		102	“不，他是位汉学家，年轻的时候，在文庙迷上什么朱子学啦，◆所以◆在今天大发光明的电灯之下，头上还顶着那个顶髷呢，真拿他没办法。”		A	A-36
104	「どうするって仕方がない*から*僕が頂戴して被っていらあ」		102	“以后？有什么办法，◆只好◆由我来拜领了，我带呗。”		B	B-9
104	しばらくして国から小包が届いた*から*、何か礼でもくれた事と思って開けて見たら例の山高帽子さ、		102	可是过了没有多久，从老人家那里寄来了一个包裹，我想大概是给我寄来点什么道谢的东西吧。打开一看，是那顶大礼帽。		C	C
105	ああ云う偉大な鼻を顔の中に安置している女の事だ*から*、滅多な者では寄り付ける訳の者ではない。		103	对方是个将伟大的鼻子安置在面孔上的女人，假如你没有点本领，休想接近她。		C	C
105	あんな偶然童子だ*から*、寒月に援けを与える便宜は勘がう。		103	但他是那样没准性子，能给寒月的帮助恐怕也是不大的。		C	C
105	主人の家で実業家が話頭上った事は一返もない*ので*、主人の飯を食う吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみならず、はなはだ冷淡であった。		103	在主人家里，一次也没有谈论过实业家的事儿，就连受主人豢养的我，对这方面不但毫不沾边，而且事漠不关心。		C	C
108	「しかしこっちの姿を見せちゃあ面白くねえ*から*、声だけ聞かして、勉強の邪魔をした上に、出来るだけじらしてやれて、さっき奥様が言い付けておいでなすったぜ」		106	“不过刚才太太吩咐下来，要是让他看见了咱们可不太好，只让他能听得见声音，使他无法看书，尽量惹他发火就行。”		C	C
108	自分の面あ今戸焼の狸見のような癖に——あれで一人前だと思ってるんだ*から*やれ切れないじゃないか」		106	他也不看看自己那副活像陶瓷狐狸的面孔哩。别看他是个丑八怪，可他自己却认为满过得去呢，真叫人恶恨！		C	C
109	どうもあんな教員がある*から*、ほかのもの、迷惑になって困りますと云ったが、		108	“◆因为◆有这种教员，其他教员也跟着脸上无光，真没有办法。”		A	A-1
109	「津木ピン助や福地キヤゴがいる*から*、頼んでからかわしてやろう」		107	“津木跳助和福地细螺都在那个学校，让他们去捉弄他好啦。”		C	C
109		尻尾を躰る事七度び半にして草臥れた*から*やめにした。	107		我一直在追自己的尾巴，追了七回半，实在太累，◆只好◆作罢。	B	B-9
110	明日ね、行くんだ*から*ね、鶏の三を取っておいておくれ、今までのがあまり汚れました*から*かけ易えました」		108	明天呀，我去，你们给我订个‘勇三’，		C	C
111	「ちょっと用がある*から*嬢を呼んで来いとおっしゃいました」		110	“…我原来戴的太脏，◆所以◆就换上这个了。”		A	A-36
111	「へえ、せんだって御嬢様からいただきました*ので*、結構過ぎて勿体ないと思って行李の中へしまっておきましたが、		109	“老爷太太说，有事请小姐去呢。”		C	C
111	妾には地味過ぎていやだ*から*御前に上げようとおっしゃった、あれでございます」		110	“是，小姐，是以前小姐您送给我的，◆因为◆太漂亮，舍不得戴，一直放在箱子里。”		A	A-1
112		綺麗な家から急に汚ない所へ移った*ので*、何だか日当りの善い山の上から薄黒い洞窟の中へ入り込んだような心持がある。	110		◆由于◆从一座漂亮房子突然挪到肮脏的地方来，我产生了一种仿佛从一座阳光温暖的山顶突然进入一个黑咕隆咚的洞穴里来的感觉。	B	B-1
114	「吾輩は年来美学上の見地からこの鼻について研究した事がございまして*から*、その一斑を披瀝して、御両君の清聴を煩わしたいと思います」		113	“鄙人从美学的角度对这种鼻子进行了研究，我愿意在这儿发表一部分，有烦两位听听。”		C	C
115	「演者自身の局部は回護の恐れがあります*から*、わざと論じません。		114	“对于讲演人自身的局部，很可能有回护之嫌，◆所以◆为了避嫌，有意不去论它……”		A	A-36
115	只二個孔が併んでいる状態と混同なすつては、誤解を生ずるに至るかも知れません*から*、予め御注意をしておきます。		113	不过你们两位如果错误地将我的鼻子只看成是排列着两个鼻孔，就可能产生误解，这点是我事先要提醒各位的。		C	C
115	「いや御不審はごもっともですが論より証拠この通り骨がある*から*仕方がありません。		114	你的怀疑是有道理的，不过现实最能说明问题，骨头就在这里嘛，又有什么法子		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
116	「先生弁じましたは少し講釈師のようで下品です*から*、よしていただきますよ」		114	“先生、您这且表倒是有点像说评书艺人的口吻，未免有伤大雅吧，还是请您收回去的好。”		C	C
117	この式が演説の首脳なんだ*から*これを略しては今までやった甲斐がないのだが——まあ仕方がない。公式は略して結論だけ話そう」		116	“…◆既然◆这样，那◆就◆只好算啦，不谈这个公式了，我就只讲一下结论吧。”		A	A-22
117	君は理学士だ*から*分るだろうと思ったのに、		116	你是理学士，我想你◆总◆会明白的哩——		B	B-15
117	これからは少々物理学上の問題に立ち入ります*ので*、勢御婦人方には御分りにくいかも知れませんが、どうか御辛防をお願いします」		115	但◆由于◆下边将多少涉及到物理学上的问题，对女士们来说，肯定要难懂一些，务请耐心听下去。”		A	A-15
118	寒月君などは、まだ年が御若い*から*金田令嬢の鼻の構造において特別の異状を認められんかも知れませんが、		116	像寒月君年纪还轻，也许不承认金田小姐的鼻子构造会出现异常症状，		C	C
118	かかる遺伝は潜伏期の長いものであります*から*、いつ何時気候の劇変と共に、急に発達して御母堂のそれのごとく、咄嗟の間に膨脹するかも知れません、		116	这种遗传的潜伏期是非常长的，说不定什么时候，一遇上气候剧变，也会突然活动起来，转眼间和她的令堂大人的鼻子一模一样地膨胀起来。		C	C
121		——その金田君が鬚の刺身を食って自分で自分の禿頭をびちゃびちゃ叩く事や、それから顔が低いばかりでなく背が低い*ので*、無暗に高い帽子と高い下駄を穿く事や、それを車夫がおかしがって書生に話す事や、書生がなるほど君の観察は機敏だと感心する事や、——一々数え切れない。	120		这位金田君每次吃生鱼片时，吃得高兴了，总要咄嗟地拍打着他的秃头，而且他不但面孔扁平，身材也矮得很，◆所以◆他总要带高帽子和穿高齿木屐，这点，他的车夫觉得十分可笑，便讲给家里的“书生”听，而那“书生”则把车夫佩服得五体投地，回答说：“难得，难得，你的观察力真是敏锐”	A	A-36
122		金田君は幸い横顔を向けて客と相對している*から*例の平坦な部分は半分かくれて見えぬが、	121		金田君是侧着身軀面向客人，◆所以◆我只能看见他那平坦的半边脸，另半边脸无法看见。	A	A-36
122		悪い事をした覚はない*から*何も隠れる事も、恐れる事もないのだが、	121		我并没有做什么坏事，◆当然◆无需藏藏躲躲或畏懼什么，	B	B-12
122		金田君は堂々たる実業家である*から*固より熊坂長範のように五尺三寸を振り廻す気遣はあるまいが、	121		金田君是个堂堂的实业家，◆当然◆不必担心他会像熊坂长范那样挥舞起五尺三寸长的大刀。	B	B-12
122		ただ胡麻塩色の口髭が好い加減な所から雑雑に茂生している*ので*、あの上に孔が二つあるはずだと結論だけは苦もなく出来る。	121		看到的只是他那黑白交杂，乱蓬蓬的胡子，◆于是◆我毫不费力就得出结论：在那胡须上边，肯定有两个窟窿。	A	A-38
122		しかしその油断の出来ぬところが吾輩にはちょっと面白い*ので*、吾輩がかくまでに金田家の門を出入するの、ただこの危険が冒して見たいばかりかも知れぬ。	121		可是话又说回来啦，正是这种万不可粗心大意之点，对我来说，又是饶有趣味的，我所以这样出入金家之门，说不定正是为了甘冒这种风险的缘故哩。	C	C
124	「いや、まことに言語断で、ああ云うのは必竟世間見ずの我儘から起るのだ*から*、ちつと懲らしめのためにいじめてやるが好かろうと思って、少し当ってやったよ」		123	“嗯，简直是超乎常情，他所以会那样，完全是出于不通世路，狂妄自大，◆所以◆我想最好惩治他一下，我已经打发人去捉弄他了。”		A	A-36
124	——まるで彼等の財産でも捲き上げたような気分です*から*驚きますよ、		123	就好像他们的财产被别人骗去了似的，真◆令◆人吃惊		B	B-7
124	「なるほどそれでは大分答えましたろう、全く本人のためにもなる事です*から*」		123	“对，搞他一下，他大概会老实一些吧，这对他本人也是有好处的嘛。”		C	C
125	「ごもつともで、全く道楽からくる嘘だ*から*困ります」		124	“您说的太对啦，他扯谎完全是为了寻开心，◆所以◆拿他没办法”		A	A-36
125	あれも昔し自炊の仲間でしたがあんまり人を馬鹿にするもので*から*能く喧嘩をしましたよ」		124	他也是我学生时期一同起伙的伙伴，他总是愚弄		C	C
125	——それでも義理は義理でさあ、人のうちへ物を聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりです*から*、後で車夫にビールを一ダース持たせてやったんです。		124	不过，人总得讲点人情嘛，我到人家去打听事儿，当然不能不理不睬地装傻呀，后来我让车夫给他送去了一打啤酒。		C	C
125	しかしあの男のは吐かなくてすむのに矢鱈たらに吐くんだ*から*始末に了えないじゃありませんか。		124	可是，他把本来用不着扯谎的事也胡扯一通，真是拿他毫无办法呀。		C	C
125		もつとも吾輩は椽の下にいる*から*実際叩いたか叩かないか見えようはずがないが、この禿頭の音は近来大分聞馴れている。	124		说实话，我是躲在椽下的，到底他真的敲了还是没敲，我当然不可能看清楚，不过这个敲秃头的声音，我最近已经听得很熟悉了。	C	C
126	「あの苦沙弥と云う変物が、どう云う訳か水島に入れ智慧をする*ので*、あの金田の娘を貰っては行かんなどとほめかすそうだ——なあ鼻うそうだな」		125	“那个怪人苦沙弥，也不知为了什么，竟给水岛寒月出主意，听说他还向水岛暗示说：‘不要娶金田家的女儿，寒月，你可决不能娶呀’。”		C	C
126		いやだんだん事件が面白く発展してくるな、今日はあまり天気が宜い*ので*、来る気もなしに来たのであるが、こう云う好材料を得ようとは全く思い掛けなんだ。	125		看来事情的发展将越来越有意思啦，今天◆由于◆天气上好，偶然来到这儿，没有想到竟会获得这些好材料。	A	A-15

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
127	だんだん聞いて見ると学問も人物も悪くもないようだ*から*、もし当人が勉強して近い内に博士にでもなったらあるいはもう事が出来るかも知れんくらいはそれとなくほめかしても構わん]		126	“。。。不过，经过仔细打听，他好像在学问、人品上还都不坏，◆所以◆你也可以放点风说，如果他本人发奋，在近期能当上博士，那么他也许可以娶上我的女儿。”		A	A-36
127	「それでの、君は学生時代から苦沙弥と同宿をしていて、今ほとにかく、昔は親密な間柄であったそうだ*から*御依頼するのだが		125	“你和苦沙弥学生时期同住在一起，现在暂且不论，据说过去你和他是要好的朋友，◆所以◆我才想托你去见他，…”		A	A-36
127	「ええ全くおっしゃる通り愚な抵抗をするのは本人の損になるばかりで何の益もない事です*から*、善く申し聞きましょう」		126	“是，是，您见的极是。他那种愚蠢的反抗只能自己吃亏，是毫无益处的。◆所以◆让我来跟他好好讲讲吧。”		A	A-36
127	何か怒っているかも知れんが、怒るのは向が悪るい*から*で、		125	他可能在生什么气，但发脾气首先是◆因为◆他自己不好。		A	A-1
127	「それから娘はいろいろと申し込もある事だ*から*、必ず水島にやると極める訳にも行かんが、		126	“还有，我女儿嘛，来求亲的多得很，并不一定非得嫁给水岛不可。。。。”		C	C
127	あの変物の苦沙弥を先生先生と云って苦沙弥の云う事は大抵聞く様子だ*から*困る。		126	“。。。他糟糕的是，竟将那个怪人称做老师、老师，好像什么都听苦沙弥的。。。。”		C	C
127	なにそりゃ何も水島に限る訳では無論ないのだから*苦沙弥が何と云って邪魔をしようと、わしの方は別に差支えませんが……」		126	“。。。话又说回来，我寻找女婿当然并不是非水岛不可，不管苦沙弥怎样来阻碍这门亲事，我这方面是无所谓的。”		C	C
128	「かしこまりました。今日は土曜です*から*これから廻たら、もう帰っておりますよ。」		127	“请放心，今天是星期六，我这◆就◆到他那儿去，他也该回家了吧。”		B	B-1
128	「ああ、どうか、御面倒でも、一つ願いたい。それから実は水島の事も苦沙弥が一番詳しいのだがせんだって妻が行った時は今の始末で碌々聞く事も出来なかった訳だ*から*、君から今一応本人の性行学才等をよく聞いて貰いたいて」		126	“那就麻烦你罗。还有，本来水岛的事儿，苦沙弥是最清楚的，可是前些日子，我太太去过，落得现在这种情况，什么也没有打听出来。这回希望你给打听一下他本人性格、才学各方面的情况。”		C	C
129	「ええあんな汚ないうちは町内に一軒しかない*から*、すぐ分りますよ。」		127	“在这条街上，像他那样肮脏的房子就仅此一家，你会找到的。。。。”		C	C
129		今でもすでに万遍なく擦り切れて、堅横の筋は明かに読まれるくらいだ*から*、毛布と称するのはもはや、借上の沙汰であつて、毛の字は省いて単にットとでも申すのが適当である。	128		即使是现在，由于已经磨损了无数次，早已无法辨认它的经纬线了。◆所以◆再称为毛毯，已不免有冒充之嫌。最确切的说法，应当省去毛字，只称毯子倒还恰当。	A	A-36
129		——何しろ十二三年以前の事だ*から*白の時代はとくに通り越してた今は濃灰色なる変色の時期に遭遇しつつある。	128		可这已经是十二、三年前的事了，白毛毯早已结束了它的白色时代，现在进入变为深灰色的变色时期。	C	C
130		しかしながら煙は固より一所停まるものではない、その性質として上へ上へと立ち登るのだから*主人の眼もこの煙りの髪の毛と纏れ合う奇観を落さなく見ようとすれば、是非共眼を動かさなければならぬ。	129		但是，烟雾不会停留不动，从它的性质说总是要不断上升的。主人的眼睛倘要注视这种烟雾和头发纠缠在一起的奇观，那就必须不断移动他的视线。	C	C
132	「女は鬚に結うと、ここが釣れます*から*誰でも禿げるんですわ」		130	“女人梳高髻，这地方要揪起来，◆所以◆谁都要秃的啊！”		A	A-36
132	「鼻の中の白髪は見えん*から*害はないが、		131	“鼻子上的白毛外边看不见，◆所以◆没什么大不了的。”		A	A-36
132	「自分の頭だ*から*、どうだって宜いんだわ」		130	“◆正因为◆是我自己的脑袋，秃不秃都无所谓嘛。”		A	A-56
133	「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延びるかと思った*から*貴ったのさ」		131	“我当然知道，不过我想你还会长个儿，◆才◆娶你的嘛。”		B	B-6
135	「ついまだ忙がしいものだから*報知もしなかったが、		134	“实在太忙了，也未能通知你，…”		C	C
135		吾輩は鈴木君の不平な顔を拝見するのが面白い*から*滑稽の念を抑えてなるべく何喰わぬ顔をしている。	133		我仰望着铃木君那副表情感到非常有趣，◆于是◆我尽量忍住笑意，作出一副若无其事的样子。	A	A-38
135		しかし忍ばねばならぬだけそれだけ猫に対する憎悪の念は増す訳である*から*、鈴木君は時々吾輩の顔を見ては苦い顔をする。	133		然而，正因为他必须忍受这种局面，所以他对猫儿的憎恨也就更加强烈。铃木君不时地瞋我一眼，每次都显出一副丧丧脸儿。	C	C
136	なにその後時々東京へは出て来る事もあるんだが、つい用事が多いもんだ*から*、いつでも失敬するような訳さ。		134	其实，此后我经常来东京，◆由于◆事情多，◆所以◆每次都失礼啦。		A	A-18
139	あの迷亭君がおったもんだ*から*、そう立ち入った事を聞く訳にも行かなかったので残念だったから、もう一遍僕に行つてよく聞いて来てくれなかつて頼まれたものだからね。		137	◆由于◆那个迷亭也在场，◆所以◆也未能深入寻问，她觉得十分遗憾，所以求我在来一次问个明白。		A	A-18
139	「あんな鼻をつけて来る*から*悪るいや」		137	“这都怪他带着一个那样的鼻子来的呀。”		C	C
139	あの迷亭君がおったもんだから、そう立ち入った事を聞く訳にも行かなかったので残念だ*から*、もう一遍僕に行つてよく聞いて来てくれなかつて頼まれたものだからね。		163	上次只因迷亭在场，不便过细地打听，觉得遗憾，托我再来一次详细问问。		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
139	あの迷亭君がおったもんだから、そう立ち入った事を聞く訳にも行かなかった*ので*残念だったから*、もう一遍僕に行ってよく聞いて来てくれないかって頼まれたものだからね。		137	由于那个迷亭也在场,所以也未能深入寻问,她觉得十分遗憾,所以我我在来一次问个明白。		C	C
140		先日鼻と喧嘩をしたのは鼻が気に食わぬ*から*で鼻の娘には何の罪もない話してある。	138		前些日子和鼻子吵架是◆因为◆他看鼻子不顺眼,但对于鼻子的女儿并无恶感。	A	A-1
140		実業家は嫌いだ*から*、実業家の片割れなる金田某も嫌に相違ないがこれも娘その人とは没交渉の沙汰と云わねばならぬ。	138		◆由于◆他讨厌实业家,◆所以◆对实业家的金田也的确感到厌恶。	A	A-18
141	戸惑いをした糸瓜のようだなんて、時々寒月さんの悪口を云います*から*、よっぽど心の中では思ってるに相違ありませんと		139	她认为她女儿时常说寒月的坏话,说什么是个迷迷糊糊的冬瓜脑袋,这肯定是内心里很爱慕寒月的。”		C	C
141	それを僕がわざわざ出張するくらい両親が気を揉んでるのは本人が寒月君に意がある*から*の事じゃあないか		139	可是她父母为她操心,特地要我出面来向你打听,这难道不足以证明本人是对寒月有意吗?		C	C
141	「その愚な奴が随分世の中にある*から*仕方がない。		139	“这种糊涂的东西在世上还相当的多,有什么办法?…”		C	C
141		主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり思い掛けないものだ*から*、眼を丸くして、返答もせず、鈴木君の顔を、大道易者のように肥と見つめている。	139		主人听了这个奇妙的解释非常惊奇,不由得睁大眼睛,一言不发,只像个街头算卦的,直直地看着铃木君的面孔。	C	C
142		こんなところにまごまごしているとまた呐喊を喰う危険がある*から*、早く話しの歩を進めて、一刻も早く使命を完うする方が万全の策と心付いた。	139		他觉得如果在这种地方来回回打圈子很可能又会遇上主人的突然袭击,◆所以◆决心尽快把话茬往前引,早一点完成使命才是万全之策。	A	A-36
142		今度は主人にも納得が出来たらしい*ので*ようやく安心したが、	139		这回看得出来,主人似乎也心服了,这样他◆才◆放下心来。	B	B-6
144	「相変らず口が悪悪い。しかし冗談は冗談として、ああ云う株は持っていて損はないよ、年々高くなるばかりだ*から*」		141	“你的嘴还是那么损,不过笑谈归笑谈,你要真有那种股票是吃不了亏的。年年都要涨价哩。”		C	C
144	そこへ行くと苦沙弥などは憐れなものだ。株と云えば大根の兄弟分くらいに考えているんだ*から*」		142	不过说到这点,苦沙弥就太可怜啦,他一听说股票,顶多不过联想到大萝卜的兄弟辈而已。		C	C
145	実を云うと苦沙弥の方が汁粉の数を余計食ってる*から*曾呂崎より先へ死んで宜い訳なんだ		142	说实在的,苦沙弥喝的小豆粥比曾吕崎多得多,按理苦沙弥本应先死的哩		C	C
145	御負けに御事に必ず豆腐をなまで食わせるんだ*から*、冷たくて食われやせん」		142	“而且他弄的菜总是吃生豆腐,凉冰冰的,简直没法下咽。”		C	C
145	「アハハハそうそう坊主が仏様の頭を叩いては安眠の妨害になる*から*よしてくれて言ったつけ。		143	“哈哈……不错不错,和尚好像说过敲打死者的头会妨碍睡眠,别做那种事。”		C	C
146	——吾輩は美学を専攻するつもりだ*から*天地間の面白い出来事はなるべく写生しておいて将来の参考に供さなければならぬ、		143	我准备专门研究美学,◆所以◆对天地间一切有意思的事物都要用写生把它保存下来,好供将来参考。		A	A-36
146	僕もあんまりな不人情な男だと思った*から*泥だらけの手で君の写生帖を引き裂いてしまった」		143	我当时也认为你太不懂人情了,◆就◆用沾满污泥的手,将你的写生簿给撕了。		B	B-1
146	「それを君がすました顔で写生するんだ*から*苛い。		143	“最可恨的是,你却无动于衷,还给我写生呢。”		C	C
147	きつと書物なんか書く気遣はないと思った*から*賭をしたようなものの内心は少々恐ろしかった。僕に西洋料理なんか奢る金はないんだ*から*な。		144	我虽然认为他决不会写出书来◆才◆和他打了赌,可内心里仍不免犯嘀咕,因为我没有钱去请他吃西餐啊。		B	B-6
147	あの寺の境内に百日紅が咲いていた時分、この百日紅が散るまでに美学原論と云う著述をする*と云う*から*、駄目だ、到底出来る気遣はないと云ったのさ。		144	当时庙里百日红盛开的时候,他说在百日红凋谢之前,一定要写出一本《美学概论》的大著来。我说:‘不可能,你根本写不出来。’		C	C
147	そんなに疑うなら賭をしよう*と云う*から*僕は真面目に受けて何でも神田の西洋料理を奢りっこかなにかに極めた。		144	“…你这样不相信我,那打赌好啦。‘我信以为真,好像说好到神田的西餐馆去吃一顿。’		C	C
147	いよいよ百日紅が散って一輪の花もなくなっても当人平気である*から*、いよいよ西洋料理に有りついたなと思って契約履行を逼ると迷亭すまして取り合わない		144	后来百日红终于凋谢到一朵花也不剩了。可他本人不当回事。我想,这回西餐我是吃定了,便逼他履行清客语言,他却像没事一般,根本不予理会。		C	C
148	美学原論を著わそうとする意志は充分あったのだがその意志を君に発表した翌日から忘れてしまった。それだ*から*百日紅の散るまでに著書が出来なかったのは記憶の罪で意志の罪ではない。		145	我要写出《美学概论》的意志是很强烈的,但我的这种意志在向你发表的第二天,就忘得一干二净啦,◆所以◆说,在百日红凋谢之前没有写出书来,是记忆之罪,而非意志之罪。		A	A-36
148	「君はくるたびに珍報を齎らす男だ*から*油断が出来ん」		145	“你这个人,每次来都说是带来奇闻,◆所以◆决不能信以为真。”		A	A-36
148	寒月はあんな妙に見識張った男だ*から*博士論文なんて無意味な努力はやるまいと思っただら、		145	我本想像寒月那样很有一套见解的人◆总◆不会为博士论文去浪费劳力吧。(紧缩文)		B	B-15

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
148	あれでやっぱり色気がある*から*おかしじやないか。		145	谁说他心里还是浮华,你说可笑不可笑?		C	C
149	とにかく寒月の事だ*から*鼻の恐縮するようなものに違いない]		146	反正是寒月写的东西,肯定会*使*鼻子大吃一惊。		B	B-5
149	迷亭は少しも気が付かない*から*平気なものである。		146		迷亭根本不注意这点, *所以*仍然照说不误:	A	A-36
150	ねえ鈴木、君も実業家の末席を汚す一人だ*から*参考のために言って聞かせるがね。		147	我说,铃木,你也是个个居实业界末席的人, *所以*我要讲一讲供你参考。		A	A-36
150	君は十年前と容子が少しも変わっていない*から*えらい		147	你和十年前的劲头丝毫没变,真了不起!		C	C
150	しかるに不思議な事には学者の智識に対してのみは何等の褒美も与えたと云う記録がなかった*ので*、今日まで実は大に怪しんでいたところさ		147	然而奇怪的是,在记录中唯独对学者知识没有给过任何褒赏。直到今天,都是个令人费解的问题嘛。		C	C
152	それだ*から*寒月には、あんな釣り合わない女性は駄目だ。		149	*所以*我说,对于寒月,决不该找那样不般配的女性。		C	C
153	「君は何にも知らん*から*そうでもなからうなどと澄し返って、例になく言葉寡々に上品に控え込むが、		150	你根本不了解情况, *所以*无动于衷地说什么‘不见得如此吧’,显得少言寡语装出很高尚的样子。		A	A-36
153	「大変な見識だな、しかし懐剣をもって歩行だけはあぶない*から*真似ない方がいいよ。		151	好高的见识呀。不过怀里揣着匕首出门,那太危险了, *还是*不要学那样的好。		B	B-10
154	何を云うにも気をおかなくちゃならん*から*心配で窮屈で実に苦しいよ。		151	不管说什么总得留神,又操心又紧张,真是苦恼极了。		C	C
154	僕はちと用事がある*から*これで失敬する」		151	我还有点事儿,失陪啦。		C	C
154	しかしそれにしては刃物は剣呑だ*から*仲見世へ行っておもちゃの空気銃を買って来て背負ってあるのがよからう。愛嬌があつていい。		151	不然刀子毕竟是危险之物,最好你到庙会上去买把玩具汽枪背着走,那看起来会招人喜欢的。		C	C
154	「僕もいこう、僕はこれから日本橋の演芸矯風会に行かなくっちゃならん*から*、そこまでいっしょに行こう」		151	“我也走,我回头还要到日本桥的‘演艺矫风会’去,我陪你一起去吧。”		C	C
155		上は在天の神ジュピターより下は土中に鳴く蚯蚓、おけらに至るまでこの道にかけて浮身を棄すのが万物の習いである*から*、吾輩どもが腫うれしと、物騒な風流気を出すのも無理のない話である。	153		上至天神朱庇特,下至在土中鸣叫的蚯蚓、蜈蚣,所有的万物无不为此道而神昏颠倒, *因此*即使我们这些猫儿也朦胧地感到兴奋,自然而然地产生了会招致许多麻烦的风流念头。	A	A-37
155		三角主義の張本金田君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋慕したと云う噂である。それだ*から*千金の春宵を心も空に満天下の雌猫雄猫が狂い廻るのを煩惱の迷のと軽蔑する念は毛頭ないのであるが、	153		就连主张“三角主意”的金田君的千金——喜欢大谈阿部川饼的富子小姐,据说也爱慕过寒月君哪。 *正因为*如此,在下决不认为那满天下的雌猫雄猫不趁着千金一刻的春宵去睡大觉而到处乱转,是什么自找烦恼欲火中烧而	A	A-56
155		いかんせん誘われてもそんな心が出ない*から*仕方がない。	153		但在下虽受诱惑却产生不了那样的欲念,这 *又*有什么办法	B	B-4
157		これは自分が罪がないと自信しているのだ*から*無邪気で結構ではあるが、	155		他 *既然*自信自己无罪,自然就 *很*轻松自在,没什么可说的。	A	A-22
157		しかし事実は覚がなくても存在する事がある*から*困る。	155		不过,本人虽记不得,而事实毕竟存在,对这种人真是拿她没办法。	C	C
157		大方例の鼠だろう、鼠なら捕らん事に極めていい*から*勝手にあばれるが宜しい。	155		大概又是老鼠在作怪吧。如果是老鼠,反正是我决心不去捕捉的,随你去折腾吧。	C	C
157		なるほど寝ていてする芸だ*から*覚はないに違ない。	155		当然,这是她睡梦中的本事,肯定她是不会记得的。	C	C
158		主人の内の鼠は、主人の出る学校の生徒のごとく日中でも夜中でも乱暴狼藉の練修に余念なく、愕然なる主人の夢を驚破するのを天職のごとく心得ている連中だ*から*、かくのごとく遠慮する訳がない。	155		主人家的那些老鼠,都是一些像主人教书的那个学校里的学生一样,不管白天黑夜总是用尽心思去琢磨怎样捣乱,把惊破可怜的主人好梦作为他们天职的一群家伙, *所以*自然不这样客客气气的。	A	A-36
158		此度は仕方がない*から*にやーにやーと二返ばかり鳴いて起こそうとしたが、	156		万般无奈,这回我想暗暗的叫上两声来唤醒他。	C	C
159		もう我慢出来ん*から*行李の影から飛出そうと決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰土がついに眼前にあらわれた。	157		我也受不了了。当我正要柳条箱后面蹦出去的当儿,卧室的隔断被轻轻推开了,我恭候已久的这位梁上君子终于赫然出现在我的眼前。	C	C
160		しかるにこのパラドックスを道破した者は天地開闢以来吾輩のみであろうと考えると、自分ながら満更な猫でもない云う虚栄心も出る*から*、是非共ここにその理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ない云う事を、高慢なる人間諸君の脳裏に叩き込みたいと考える。	157		但是能道破这种似是而非的道理的,开天辟地以来却只有我一个。一想到这点,我便产生一种虚荣心:“不是在下自吹自擂,我也是个满了不起的猫儿嘛。 *因此*我想无论如何也得在这里讲一讲不要小看我们猫儿的理由,以便把它塞进高傲的各位人的头脑里。	A	A-42
160		到底人間社会において目撃し得ざる底の伎倆である*から*、これを全能的伎倆と云つても差支えないだろう。	158		这毕竟是在人的社会中无法找得到的一种深奥的伎俩 *而*当此无愧。	A	A-57
161		本人逆せ上がって、神に呑まれている*から*悟りようがない。	159		但 *由于*他们本身被神吓得晕头晕脑, *所以*总不开窍。	A	A-18
161		彼等人間の眼は平面の上に二つ並んでいるので左右を一時に見る事が出来ん*から*事物の平面だけしか視線内に這入らんのは気の毒な次第である。	158		他们这些人的两只眼睛都长在一个平面上,很难看清左右, *所以*进入他们视界中的只能是片面的事物,这正是人的可怜之处。	A	A-36

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
161		彼等人間の眼は平面の上に二つ並んでいる*ので*左右を一時に見る事が出来んから事物の半面だけしか視線内に導入らんのは気の毒な次第である。	158		他们这些人的两只眼睛都长在一个平面上，很难看清左右。	C	C
162		吾輩の眼前に悠然とあらわれた陰士の顔を見るとその顔が——平常神の製作についてその出来栄をあるいは無能の結果ではあるまいかと疑っていたのに、それを一時に打ち消すに足るほどな特徴を有していた*から*である。	160		这是◆因为◆平时我对神在制造人的问题上到底是伟大还是无能一直有怀疑，而当我看到那位悠然出现的梁上君子面孔的特征时，我的怀疑一下子就打消了。	A	A-1
162		本を忘却するのは人間にさえありがちの事である*から*猫には当然の事さと大目に見て貰いたい。	159		一说起话来就离题万里，这也是人常犯的毛病嘛，至于说到我们猫儿就更不足为奇了，所以务请读者海涵。	C	C
163		ああ云う才気のある、何でも早分りのする性質だ*から*この位の事は人から聞かんでもきつと分るであろう。	160		你看她是那样的才气横溢而且聪明，不必等人告诉她，这点子事儿她一定会了解的。	C	C
164		この細君は煮物に使う三盆を用箆筒へ入れるくらい場所の適不適と云う観念に乏しい女である*から*、細君にとれば、山の芋は愚か、沢庵が寢室に在っても平気かも知れん。	162		她根本不懂得什么东西应该放在哪里和不应该放在哪里，◆所以◆对她来说，不要说山药了，就是腌咸菜放在卧室里她也满不在乎的。	A	A-36
164		しかし滅多に声を立てると危険である*から*じっと休んでいる。	162		不过，不能随便放声大笑。为了避免危险，我◆只有◆拼命地忍着。	B	B-13
164		陰士はちょっと山の芋の箱を上げて見たがその重さが陰士の予期と合して大分目方が懸りそうな*ので*すこぶる満足の体である。	162		梁上君子抬了一下这箱山药，沉甸甸的重量恰合他的心意，他◆为◆这箱子的分量显得十分满意的样子。	C	C
166		主人夫婦が要領を得ない問答をしているものだから*少々*焦れたくなつたと見えて	163		主人夫妇偏偏作出不要要领的回答，这似乎◆使◆他感到不耐烦。	B	B-5
166		巡査はただ形式的に聞いたのである*から*、いつ這入ったところが一向痛痒を感じないのである。	163		警察只不过是形式上问问而已，其实小偷究竟是什么时候进去是无关痛痒的问题。	C	C
167	「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝たところが盗賊が、どこぞこの雨戸を外してどこそこに忍び込んで品物を何点盗んで行った*から*、右告訴候もみぎこくそにおよびそうろうなりという書面をお出しなさい。		164	「既然那样，你写一份书面报告，上边要写明：‘明治三十八年某月某日关好门户就寝时，盗贼撬开了哪个地方的防雨板，偷偷进入了哪个地方和哪个地方，偷走了哪些东西，谨具诉状如上’。	C	C	
167	「これから盗難告訴をかく*から*、盗られたものを一々云え。さあ云え」		164	现在由我写失盗诉状，都偷走了哪些东西，你说吧，你说！	C	C	
170	告訴はあなたが御自分でなさるんです*から*、私は書いていただかないでも困りません」		167	写诉状是你自己的事，我并没有非请你写不可呀。	C	C	
171	「わたしに言っても駄目だ*から*、あなたが先生にそうおっしゃい」		168	“我说他没用，你去和先生说说吧。”	C	C	
171	「どうです、喰べて見なすつたか、折れんように箱を挑らえて堅くつめて来た*から*、長いままでありましたらう」		168	“怎样，吃过了吗？我是特地做了个小木箱塞得紧紧的，免得弄折了，您看那山药够长的吧。”	C	C	
172		あまり煩わしくて話も何も出来ぬ*ので*「さあさあ御前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。今に御母あさまが好い御菓子を上げる*から*」と細君はようやく子供を追いやって	169		孩子们问来问去，吵得慌，使大人们无法谈话。◆于是◆，主人的妻子说：“算了，算了，你们都到院子里玩去，过一会儿我给你拿点心吃。”	A	A-38
172		「泥棒が這入って——そうして——泥棒が這入って——どんな顔をして這入ったの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答えてよいか分らん*ので*「恐い顔をして這入りました」と返事をして多々良君の方を見る。	169		“进来小偷，那么，进来小偷，他进来的时候是什么模样？”这回妹妹发问了。对这种奇妙的发问，主人的妻子也不知怎样回答才好。她应付说：“小偷进来的模样可吓人啦。”她说罢看了看多多良君。	C	C
173	「やだわ、虫が食うなんて、そりゃ齧で釣るところは女だ*から*少しは売げますさ」		170	“瞎说！谁长癣啦？这是◆因为◆我们女人梳发髻撒的，◆所以◆稍微秃一点。”	A	A-7	
173	「先生はどうしても教えて下さらない*から*、あなたに聞くんです」		170	“◆因为◆先生说什么也不肯告诉我，◆所以◆才问你哪。”	A	A-7	
175		いわんや同君はずでに書生ではない、卒業の日は浅きにも係わらず堂々たる一個の法学士で、六井物産会社の役員であるのだ*から*吾輩の驚愕もまた一と通りではない。	171		而且他早已不再是“书生”，虽然毕业的时日还浅，毕竟是一位堂堂正正的法学士，是六井公司的职员啊。我这一惊非同小可。	C	C
176	「先生は実業家は嫌だ*から*、そんな事を言たつて駄目よ」		173	“你可别说这样的话，你还不知道你的先生最讨厌实业家吗？”	C	C	
176		昨日までは綿入を二枚重ねていたのに今日は袷に半袖のシャツだけで、朝から運動もせず枯坐したぎりである*から*、不十分な血液はことごとく胃のために働いて手足の方へは少しも巡回して来ない。	173		昨天他还穿着两件棉衣呢，今天却只穿一件夹袍和一件半截袖的棉毛衫，清晨又未运动，一味干坐，他那不充分的血液完全供给了胃里，当然不会往手脚这些方面循环了。	C	C
176	着物をとられた*ので*寒くていかん」		173	我的衣服被偷了，冷得很。	C	C	

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
176		主人は猛烈なるこの一言を聞いて、うふと気味の悪い胃弱性の笑を洩らしたが、別段の返事もしない*ので*、多々良君も是非食いたとも云わなかったのは吾輩にとって望外の幸福である。	172		主人猛地听了这句话，只用鼻子发出一声笑声，并未再搭理。多多良君也没有进一步说非要吃不可，这总算是在下的望外之幸。	C	C
177		細君はちよつと分りかねたものだ*から*返事をしない。	173		主人的妻子听不懂，没有搭言。	C	C
178	「月給が二百五十円で盆暮に配当がつかます*から*、何でも平均四五百円になりますばい。」		175	「月薪二百五十元，另外七月十五和年末还有两次分红，总算起来，平均不下四五百元呢。」		C	C
178		多々良君は充分実業家の利益を吹聴してもう云う事が無くなったものだ*から*「奥さん、先生のところへ水島寒月と云う人が来ますか」	175		多多良君对实业家的好处已经鼓吹得相当充分，再无话好说。◆便◆向主人的妻子问道：“夫人，有个叫做水岛寒月的人来过先生这里吗？”	B	B-2
179	「博士になったら、だれとかの娘をやるとかやらんとか云うていました*から*、そんな馬鹿があらうか、		176	“据说如果得了博士，某人就会大肆宣扬把女儿嫁给他，真有这样的傻蛋吗？”		C	C
180		主人と多々良君が上野公園でどんな真似をして、芋坂で団子を幾皿食ったかその辺の逸事は探偵の必要もなし、また尾行する勇気もない*から*ずつと略してその間休養せんければならん。	177		主人和多多良君究竟再上野公园都干了些什么，在芋坂究竟吃了几碟糯米团子，这类轶事我既没有必要去秘密侦察，也没有勇气随其后，◆所以◆一切从略，我必须休息一下。	A	A-36
180		先刻から袷一枚であり寒い*ので*少し運動でもしたら暖かになるだろうと云う考から主人はこの先例のない動議を呈出したのである。	176		主人大概是◆因为◆一直穿着这件单薄的夹衣，冷得很，想到如果出去运动一下会暖和些，◆所以◆发出了这个从未提出的建议。	A	A-7
181		これらの凡眼は皆形を見て心を見ざる不具なる視覚を有して生れつた者で、一しかも彼の多々良三平君のごときは形を見て心を見ざる第一流の人物である*から*、この三平君が吾輩を目して乾屎 同等に心得るのもつともだが、	177		这些肉眼凡胎之辈，都是天生的一些只看外形不见内心的视觉残缺不全者。刚才的这位多多良三平君就是只看外形不看心灵的头号人物，◆所以◆这位三平君把我看成是“干屎粒”一类的人物，也就不足为怪。	A	A-36
181		ただ外見上は至極沈静端肅の態である*から*、天下の凡眼はこれらの知識巨匠をもって昏睡仮死の庸人と見做して無用の長物とか殺潰しとか入らざる誹謗の声を立てるのである。	177		只是从外表看上去，那体态极其沉静端庄而已。天下的凡俗之士，则把这些知识巨匠看作是昏睡假死的庸人，发出该有的诽谤，骂他们是饭袋，是无用的长物。	C	C
181		とかく物象にのみ使役せらるる俗人は、五感の刺激以外に何等の活動もない*ので*、他を評価するのでも形骸以外に渉らんのは厄介である。	177		总之，只受物象驱使的那些俗人，◆因为◆他们除了受五官刺激之外就再也没有任何活动，在他们评价别人时，决不涉及形骸以外之物，这是最难办的。	A	A-1
182		吾輩は日本の猫だ*から*無論日本鼻負である。	178		我是只日本猫儿，◆当然◆是偏向日本。	B	B-12
182		かくまでに元氣旺盛な吾輩の事である*から*鼠の一疋や二疋はとろうとする意志さえあれば、寝ていても訳なく捕れる。	179		从我这种勇猛劲儿来说，只要我愿意，去捉上一、两只老鼠，当然不在话下。	C	C
183		今まで捕らんのは、捕りたくない*から*の事さ。	179		过去我◆之所以◆没有捉老鼠，只不过是我不想捉它而已。	A	A-58
184		鼠と戦争をするのは覚悟の前だ*から*何足来ても恐くはないが、	180		和老鼠打仗的决心我是下定了，不管来上几只老鼠我都无所畏惧。	C	C
185		まさかあんな高い処から落ちてくる事もなからう*から*とこの方面だけは警戒を解く事にする。	181		我想这些老鼠总不至于从那么高的地方降下来吧，◆所以◆我决定解除这方面的警戒。	A	A-36
185		それでもまだ心配が取れぬ*から*、どう云うものかとだんだん考えて見るとようやく分った。	181		即使如此，我还是放心不下。这是怎么回事呢，我想来想去，终于明白了。	C	C
185		心配せんのは、心配する価値がない*から*ではない。	181		人们不担心，倒不是不值得担心，	C	C
187		始めは勇氣もあり敵愾心もあり悲壯と云う崇高な美感さえあったがついには面倒と馬鹿気ているのと眠いのと疲れた*ので*台所の真中へ坐ったなり動かない事になった。	184		最初，我还有勇气，有敌愾心，甚至还怀有悲壮的崇高美感。可是到了后来，我东奔西跑，感到自己太蠢，加之又困又乏，◆于是◆只好坐在厨房当中一动不动了。	A	A-38
188		しかし動かんでも八方睨みを極め込んでいれば敵は小人だ*から*大した事は出来ないのである。	184		尽管我不再动，但只要我狠狠地盯着前后左右，敌人都是些小人，量它们也不敢闹得太过份。	C	C
188		これではならぬと左の前足を抜き易える拍子に、爪を見事に懸け損じた*ので*吾輩は右の爪一本で棚からぶら下った	185		当我倒换左腿的时候，我的爪子一下子没有钩好，只剩下一只右前腿吊在那里。	C	C
189		月が西に傾いた*ので*、白い光りの帯は半切ほどに細くなった。	185		月已西斜，射进来银白色的光带已变得狭长了。	C	C
190		何しろこの毛衣の上から湯を使った日には乾かすのが容易な事でない*から*汗臭いの我慢してこの年になるまで洗湯の暖簾を潜った事はない。	186		您要知道，披着这身毛去洗热水澡，可不是那么容易就干得了的，◆所以◆我只好耐着浑身臭汗。我活这么久，还没光顾过一次公共澡堂。	A	A-36
190		折々は团扇でも使つて見ようと言う氣も起らぬではないが、とにかく握る事が出来ないのだ*から*仕方がない。	186		有时我也不是没有想过，弄把团扇来扇扇，无奈我的爪子拿不住扇子，◆也◆就只好打消了这个念头。	B	B-3

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
190		第一頭の毛などと云うものは自然に生えるものだから*、放っておく方がもっとも簡便で当人のためになるだろうと思うのに、	187		先说头发吧，它是自然生长的，本来最便当的办法就是不去管它，而且对本人也有好处；	C	C
191		丸い頭へ四角な枠をはめている*から*、植木屋を入れた杉垣根の写生としか受け取れない。	187		本来脑袋是圆的，却要硬要镶成一个方框框，只能让人联想花匠剪过的杉篱笆。	C	C
191		永らく人間社会の観察を怠った*から*、今日は久しぶりで彼等が酔興に醜態する様子を拝見しようかと考えて見たが、	188		我已经好久没有仔细观察人的社会啦，今天我得拜见拜见他么那些胡涂瞎扯，狗苟蝇营的勾当了。	C	C
191		このほか五分刈、三分刈、一分刈さえあると云う話だ*から*、しまいには頭の裏まで刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などと云う新奇な奴が流行するかも知れない。	187		此外还有什么五分剪的大平头、三分、一分剪的小平头种种剪法。弄到后来，说不定还会向脑袋里边剪，流行什么负一分的小平头，负三分的小平头的新奇剪法哩。	C	C
192		昼寝は吾輩に劣らぬくらいやるし、ことに暑中休暇後になってからは何一つ人間らしい仕事をせん*ので*、いくら観察をしても一向観察する張合がない。	188		午睡嘛，他也不比猫儿睡得少，尤其是自从学校放假以后，他没有做一件什么样子的事儿，不管我怎样观察他，也发现不了他的劲头。	C	C
192		細君は隣座敷で針箱の側へ突つ伏して好い心持ちに寝ている最中にワンワンと何だか鼓膜へ答えるほどの響がした*ので*はっと驚ろいて、	188		主人的妻子正在客厅的那间屋子里，躺在针线箱旁边睡大觉呢。这突然而来的声音把她的耳膜刺激的嗡嗡作响，她猛地惊醒。	C	C
193	なかなか半熟にならないから、下へおいて新聞を読んでいると客が来たもんだ*から*つい忘れてしまつて、		190	轻易熟不了呀。我下到屋子里，拿起报纸来读，又偏巧来了客人，就◆把这件事给忘了啦		B	B-1
193	「屋根の瓦があまり見事に焼けていました*から*、ただ置くのも勿体ないと思つてね、		190	“我看到屋顶的瓦烫得吓人，我想让它闲着也太可惜。”		C	C
193	なかなか半熟にならない*から*、下へおいて新聞を読んでいると客が来たもんだ*から*つい忘れてしまつて、		190	轻易熟不了呀。我下到屋子里，拿起报纸来读，又偏巧来了客人，就把这件事给忘了啦		C	C
193	「奥さんなんざ首の上へまだ載っけておくものがあるんだ*から*、坐っちゃいられないはずだ。」		189	“太太，你的脑袋上还多了一层沉重的发髻，恐怕连坐都坐不住。”		C	C
194	牛の尻尾を持ってぐいぐい引いて行つたもんだ*から*ハーキュリスが眼を覚まして牛やーい牛やーいと尋ねてあるいても分らないんです。		191	他是揪着牛尾巴倒着牵走的。赫拉克勒斯一觉醒来，就到处去找牛，结果没有找到。		C	C
194		しかし最前の倒行して逆施すで少々懲りている*から*、今度はただ「へえー」と云つたのみで問ひ返さなかつた。	190		不过，她接受刚才那句“倒行逆施”的教训，◆所以◆只是答应了一声：“唔！”就不再往下问了。	A	A-36
194		細君もそれには及びませんとも言い兼ねたもんだ*から*「ええ」と云つた。	191		主人的妻子又不好意思说“用不着”，◆只好◆又含糊地应了一声“唔”。	B	B-9
195	「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙るんです。今途中で御馳走を誂らえて来ました*から*、そいつを一つここでいただきますよ」		192	“茶泡饭、开水泡饭都不必了，我刚才在来的路上已经订好了一份饭菜，送到这儿来，我回头◆就◆在这儿吃。”		B	B-1
196	「せっかく見事な帽子をもし壊わしてもしちゃあ大変です*から*、もう好い加減になすつたら宜うござんしょう」		193	“好端端一顶帽子，如果弄坏可不值得了，我看您还是算了吧。”		C	C
196		ところへ主人が、いつになくあまりやかましい*ので*、寝つき掛つた眼をさかに扱かれたような心持で、ふらふらと書斎から出て来る。	192		就在这时，主人受不了这种从没有过的吵吵嚷嚷声音，好像做梦被惊破了似的，晃悠悠地从书斋里走了出来。	C	C
197	「ところが壊れない*から*妙でしょう」		194	“怪就怪在怎么弄也不会坏。”		C	C
197	「今一々説明します*から*聞いていらっしやい。」		194	“现在我就一样一样加以说明，你要仔细听。…”		C	C
197		「だから今度はあなたのような丈夫で綺麗なのを買つたら善かろうと思つた*から*と細君はパナマの値段を知らないものだから*「これになさいよ、ねえ、あなた」としきりに主人に勧告している。	194		“所以我想这回让他买顶和您一样的又好又结实的帽子。”主人的妻子根本不知道巴拿马草帽的价钱，◆所以◆一个劲地向丈夫提议：“你也买这种吧，好不好？”	A	A-36
198	また刃の裏には度盛がしてある*から*物指の代用も出来る。		195	剪刀的背上刻有纹路，可以代替尺子用。		C	C
199		真面目なような巫山戯たような動作だ*から*細君も応対に窮したと見えて「さあどうぞ」と軽く返事をしたがり拝見している。	196		他的这一动作，也不知出于诚心诚意的客气还是在开玩笑。主人的妻子似乎不知怎样对答才好“您请吧。”，然后看着迷亭怎样进餐。	C	C
200	喰い掛けたものだから*ちよつと失敬しますよ」		198	“我可正吃着饭哩，很对不起呀。”		C	C
200	「金田令嬢がお待ちかねだ*から*早々呈出しまえ」		198	“金田小姐等急啦，赶快送呈玉览吧。”		C	C
200		ところが茶碗の中には元からツユが八分目道入っている*から*迷亭の箸にかかった蕎麦の四半分も浸らない先に茶碗はツユで一杯になつてしまつた。	197		不过那碗里原装着八分满的佐料，还没等迷亭筷子上的荞麦面条浸到四分之一，碗里的佐料就已经满了	C	C
201	「罪です*から*なるべく早く出して安心させてやりたいのですが、		198	“不快点写完造成我的罪过，◆所以◆我也希望尽快拿出来，好让她放心。”		A	A-36
201	「そうさ問題が問題だ*から*、そう鼻の言う通りにもならないね。」		198	“是啊，问题不那么简单，哪里会照‘鼻子’所说的办呢？”		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
202	なに本を読みに来たんじゃない、今門前を通り掛ったらちょっと小用ようがしたくなった*から*拝借に立ち寄ったんだ		200	不是的,我不是来看书,方才我从门前走过,突然有点尿意,我是借用这里的厕所*才*进来的。		B	B-6
204	惜しい事に先生は永眠された*から*、実のところ話す振合もないんだが、		202	可惜小泉先生已经长眠了,◆所以◆我也就没人可讲了啦		A	A-36
204	「ところが日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がない*から*峠の真中にある一軒屋を敲いて、これこれかようかようしかじかの次第だから、どうか留めてくれと云うと、		202	可是,太阳已经西沉啦,又不认识路,又饥又渴,实在没办法,我◆就◆敲开岭上那家茶馆的门我说我是如此这般的一个人,请允许我借宿一宵。		B	B-1
204	一面倒だ*から*ほぼ十五六年前としておこう」		202	太麻烦了,◆就◆把它算是十五、六年前的事儿吧。		B	B-1
204	「そりゃ僕の艶聞などは、いくら有ってもみんな七十五日以上経過している*から*、君方の記憶には残っていないかも知れないが		201	不,我的风流事儿可多啦,不过早都过了七十五天,◆当然◆不会留在你们的记忆里,是不是?		B	B-12
204	さぞ御腹が御減りでしょうと云います*から*、何でも善いから早く食わせ給えと請求したんです。		203	对方问我一定很饿了吧,我说请快些给我弄点吃的吧,不管什么都可以。		C	C
204	「ところが日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がないから峠の真中にある一軒屋を敲いて、これこれかようかようしかじかの次第だ*から*、どうか留めてくれと云うと、		202	可是,太阳已经西沉啦,又不认识路,又饥又渴,实在没办法,我◆就◆敲开岭上那家茶馆的门我说我是如此这般的一个人,请允许我借宿一宵。		C	C
205	「その時分の僕は随分悪もの食いの隊長で、蝗、なめくじ、赤蛙などは食い厭きていたくらいなところだ*から*、蛇飯は乙だ。		203	那时候,我是有名的专吃怪东西的,什么蚂蚱啦,蜒蚰啦,癞蛤蟆啦,我都吃腻了。蛇饭倒是个新鲜玩意儿,		C	C
205	その穴から湯気がぶうぶう吹く*から*、旨い工夫をしたものだ、		203	蒸汽不断从那些孔中冒出来。我心里想,难得他们想得出来,		C	C
205	爺さんふと立って、どこかへ出て行ったがしばらくすると、大きな箆を小脇に抱い込んで帰って来た。何気なくこれを囲炉裏の傍へ置いた*から*、その中を覗いて見ると——いたね。		203	老头突然站起来,也不知到什么地方去了。又过了一會兒,抱着一个大铁笼子回来,随手就放在地炉的旁边。我往里一看,螻,真不少哪,		C	C
205	長い奴が、寒いもんだ*から*御互にとぐろの捲きくちをやって埋まっていたね」		204	老长的家伙,一条一条挤在一起,互相盘缠着哩。		C	C
205	さあこれからのがいよいよ失恋に取り掛るところだ*から*しつかりして聴きたまえ」		203	听着,下文可就是我失恋的过程了,请注意听啊。		C	C
205	「どうしてこれが失恋の大原因になるんだ*から*なかなか廃せませんや。		204	那怎么行呀,这正是造成我失恋的巨大原因,不能不讲啊。		C	C
206	「鍋の中が熱い*から*、苦しまぎれに這い出そうとするのさ。		204	这是◆因为◆锅里边极热,蛇疯狂地想外爬呀。		A	A-1
206	「そこで充分御饌も頂戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見るし、もう思いおく事はなないと考えていると、御休みなさいましと云う*ので*、旅の労れもある事だ*から*、仰に従って、ごろりと横になると、すまん訳だが前後を忘却して寝てしまった」		205	我当时饱餐了一顿,既忘了冷,又可以毫无顾忌地欣赏姑娘的月貌花容,我感到十分满足,当他们说声:“请安寝吧,“我一路劳乏,◆便◆速着吩咐,倒头便睡,也不顾得失礼,一觉睡到大天亮。		B	B-2
206	「もう少しで失恋になる*から*しばらく辛抱していらっしやい。		204	这就要讲到失恋了,请忍耐一下。		C	C
207	「それがさ、僕にも識別しにくかった*から*、しばらく拝見して、その葉缶がこちらを向く段になって驚ろいたね。		205	这点嘛,我当时也分辨不清,我死盯着地瞧了一会儿,那个秃头转过头来,我这一惊非同小可。		C	C
207	「僕も不思議の極内心少々怖くなった*から*、なお余所ながら容子を窺っている、と、		206	我也感到十分奇怪,内心里有点战战兢兢,从远处偷看着哩,		C	C
207	「くだらない失恋もあったもんだ。ねえ、寒月君、それだ*から*、失恋でも、こんなに陽気で元気がいいんだよ」		206	真有这种胡扯的失恋哪!寒月君。要很好听听迷亭讲的,就是失恋,也要像迷亭这样高高兴兴,这才是好样的。		C	C
207	「あの髪はどこで買ったのか、捨ったのかどう考えても未だに分らない*から*そこが神秘さ」		206	那个假发是从哪里买来的呢?还是拣来的?我想来想去,还是弄不清楚。这点,挺神秘的嘛。		C	C
207		迷亭の駄弁もこれで一段落を告げた*から*、もうやめるかと思いのほか、	207		迷亭胡扯一通,我本来以为可以告一段落,他再也没什么可讲的了。	C	C
208	結婚なんかは、いざと云う間際になって、飛んだところに傷口が隠れているのを見出す事がある者だ*から*。寒月君などもそんなに憧憬したりしよきようしたり独りでむずかしがらないで、篤と気を落ちつけて珠を磨るがいいよ」		207	结婚这种事儿,一旦到了真要实行的关键时刻,经常是会发现隐藏着,意想不到的缺陷的。◆所以◆寒月君可千万不要自己给自己找麻烦,又是幻想,又是神不守舍,那可不行,还是好好静下心来磨你的玻璃球为妙。		A	A-36
208	あの時あの葉缶を知らずに貰ったが最後生涯の目障りになるんだ*から*、よく考えないと喉呑だよ。		207	那时如果我没发现他的秃头,娶了她,那可就一直子看着都别扭,◆所以◆不慎重考虑,真是玄极啦。		A	A-36

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
208	もっともその時分には、あの宿屋に御夏さんと云う有名別嬪がいて老梅君の座敷へ出たのがちょうどその御夏さんなのだ*から*無理はないがね]		207	当然了, 那家旅馆里有个叫阿夏的姑娘非常漂亮, 而负责老梅君住的房间的, 又正是阿夏姑娘, ◆所以◆向他提出结婚, 也就不足为怪啦。		A	A-36
208	向うでそうさせないんだ*から*弱り切ります]		207	对方不允许我这样, ◆又◆有什么办法呢?		B	B-4
209	うーんうーんと唸ったが少しも利目がない*から*また御夏さんと呼んで今度は静岡に医者はあるまいかと聞いたら、		208	他呼呼地忍着, 一直不见好, ◆于是◆又把阿夏姑娘叫来, 问她在静岡是不是有大夫。		A	A-38
210	そうして二十年もいっしょになっているうちに寺参りよりほかに外へ出た事がないと云うんだ*から*情けないじゃないか。		209	而且他们结婚了二十年, 除了到庙上去给祖先扫墓之外, 就没一起出去过, 你们说可怜不可怜?		C	C
211	「そうですとも、出鱈目じゃない、ちゃんと証拠がある*から*仕方ありませんや。		209	“是那样的, 我决不胡说, 有确凿的证据为凭嘛。		C	C
211	「どうしてこれが二十世紀の今日と明治初年頃の女子の品性の比較について大なる参考になる材料だ*から*、そんなに容易くやめられるものか——		211	不, 这些材料, 对于二十世纪的今天和明治初年前后女子品性的比较, 是大有参考价值的, 这可不能轻易放弃不讲呀。		C	C
211	ええ前の奴は始終見ている*から*間違はありませんがね。		211	唔唔前头这筐里的, 俺一直用眼睛盯着, 不会有错。		C	C
212	「この頃の女は学校の行き帰りや、合奏会や、慈善会や、園遊会で、ちょいと買って頂戴な、あらおいや? などと自分で自分を売りにあるいています*から*、そんな八百屋のお余りを雇って、女の子はよしか、なんて下品な依託販売をやる必要はないですよ。		212	不过但在后边的这个嘛, ◆因为◆俺没长后眼, 说不定会出现什么漏子。		A	A-1
212	何しろ眼がないんです*から*、ことによるとひびが入ってるかも知れません。		212	那买的方面, 也不再有那样的土包子, 要敲敲脑壳, 询问品质是否可靠, ◆所以◆倒省了很多事哩。		A	A-36
212	買う方だって頭を蔽いて品物は確かかなんて聞くような野暮は一人もないんです*から*その辺は安心なものでさあ。		212	其实, 说真的, 这是文明的趋势, 鄙人认为, 这◆才◆是大为可喜的现象。		B	B-6
212	実際に云うとこれが文明の趨勢です*から*、私などは大に喜ばしい現象だと、		212	这些新生儿都由阿古诺黛丝接生, ◆所以◆她赚了许多钱。		A	A-36
213	それがみんな Agnodice の世話なんだ*から*大変儲かった。		213	她们穿着男人穿的窄袖衣服, 练单杠, 多么了不起!		C	C
213	筒袖を穿いて鉄棒へぶら下がる*から*感心だ。		212	有什么办法, 审美的感觉大体都是发源于希腊的嘛。		C	C
213	「どうも美な感じのするものは大抵希臘から源を発している*から*仕方ない。		213	想不到雅典的妇女竟然提出了联名状, 当时的行政官也被搞得张口结舌,		C	C
214	ところが亜典の女連が一同連署して嘆願に及んだ*から*、時の御奉行もそう木で鼻を括ったような挨拶も出来ず、		213	最近对旧剧、新剧议论得很厉害, 我要别开生面。我尝试着写了一出俳剧。		C	C
215	近頃は旧劇とか新劇とか大部やかましい*から*、僕も一つ新機軸を出して俳劇と云うのを作って見たのさ」		215			C	C
215		幸にして苦沙弥先生門下の猫児となって朝夕虎皮の前に侍べる*ので*先生は無数の迷亭、寒月乃至東風などと云う広い東京にさえあまり例のない一騎当千の豪傑連の举止動作を寝ながら拝見するのは吾輩にとって千載一遇の光栄である。	214		幸而我做了苦沙弥先生门下的一只猫儿, 朝夕侍奉于虎帐之下, 苦沙弥先生自不必说, 就是迷亭、寒月乃至东风各位先生, 即便寻遍东京, 也很难找到这些豪爽之士。现在使我有机会注视着拜见他们的举止, 这对我来说真是千载难逢的幸运。	C	C
216	「しかしあれは稽古のためだ*から*、ただ見ているのとは少し違うよ」		216	不过, 那是为了练习作画, 和只供人看可不同啊。		C	C
216	「根が俳句趣味からくるのだ*から*、あまり長たらしくって、毒悪なのはよくないと思って一幕物にしておいた」		215	基本是从俳句趣味着想的, 我想如果剧太长了, 或者太刺激了都不好, 所以写成了独幕剧。		C	C
217	着付けは陸軍の御用達見たようだけれども俳人だ*から*なるべく悠々として腹の中では句案に余念のない体であるかなくっちゃいけない。		216	他的这身穿戴, 虽然有点像陆军部的御用商人, 但因为◆是俳人, ◆所以◆必须尽可能走得从容不迫, 做出一副边走边在心里推敲着俳句创作的样子。		A	A-7
218	さあ自分が惚れた眼で鳥が枝の上で動きもしないで下を見つめているのを見たものだ*から*、ははあ、あいつも俺と同じく参ってるなと癩違いをしたのです。		217	这是他以自己着迷的目光来看待那只乌鸦在树枝上一动一动的向下俯视, ◆于是◆便产生了错觉, 认为‘这东西也和我一样神魂颠倒哪’。		A	A-38
219	「先生御分りにならんのはごもつとも、十年前の詩界と今日の詩界とは見違えるほど発達しております*から*。		220	先生, 您读不懂是很自然的。◆因为◆十年前的新诗歌和今天的新诗歌已大不相同, 进步可快啦。		A	A-1
219		主人はちょっと神秘的な顔をしてしばらく一頁を無言のまま眺めている*ので*、迷亭は横合から「何だい新体詩かね」と云いながら覗き込んで	219		主人脸上泛起神秘的色彩, 盯着第一页老半天一言不发。迷亭说道: “写的什么, 是新体诗吧?” 于是凑近去看。	C	C
220	全くインスピレーションで書く*ので*詩人はその他には何等の責任もないのです。		220	◆因为◆完全依靠灵感来写作, 除了这点之外, 诗人是不负任何责任的。		A	A-1
220	誰が読んでも朦朧として取り留めがつかない*ので*、当人に達って篇と主意のあるところを糺して見たのですが、		221	任何人读了都朦朧胧胧, 不知道作者要说什么。有人◆为此◆去找本人, 郑重地问他作品的用意何在,		A	A-42

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
220	この頃の詩は寝転んで読んで、 停車場で読んではどうてい 分りようがない*ので*、作っ た本人ですら質問を受けると返 答に窮する事がよくあります。		220	最近的诗,如果躺在床上读,或在 车站候车的时候读,是绝对读不 懂的。就是写诗的本人,如果受到 别人询问,也经常回答不出。		C	C
221	魂である*から*常にふらふら している」		222	◆正由于◆是‘魂’,◆所以◆总 是摇摆不定的。		A	A-59
221	「東風君の御作も拝見した*か ら*、今度は僕が短文を読んで 諸君の御批評を願おう」		221	东风,方才读了你的大作,这回由 我来读一读我的短文,请在座各 位批评。		C	C
222	この集中にも恋の詩が多いのは 全くああ云う異性の朋友からイ ンスピレーションを受ける*か ら*だろうと思う。		223	这个集中◆所以◆多半是恋爱 诗,我想完全是来自对这位异性 朋友的接触而产生的灵感。		A	A-36
222	それで僕はあの令嬢に対しては 切実に感謝の意を表しなければ ならん*から*この機を利用して、 わが集を捧げる事にしたの さ		223	所以我必须对那位小姐表示深切 的感谢,我利用这个机会,把这本 诗集献给了她。		C	C
222		さすがの明文もあまり短か過ぎ るので、主意がどこにあるのか 分りかねる*ので*、三人はまだ あとがある事と違って待って いる。	222		◆由于◆它太短了,又无法了解 它要说什么、◆结果◆听的三个 人还在等下文。	A	A-60
222		いくら待っていても、うんと も、すんとも、云わない*ので *、最後に寒月が「それぎり ですか」と聞くと主人は軽く「う ん」と答えた。	223		但等来等去,丝毫不见动静,最后 寒月问了一句:“就只是这些?”主 人回答了一声“嗯”。	C	C
223		吾輩も彼等の変化なき雑談を終 日聞かねばならぬ義務もない* から*、失敬して庭へ蟻螂を探 しに出た。	223		而我也没有义务整天听他们这种 毫无变化的闲谈、◆于是◆我只 好失陪,到院子里捉蟻螂去了。	A	A-38
223		もつとも吾輩は去年生れたばかり で、当年とって一歳だ*から* *人間がこんな病気に罹り出し た当時の有様は記憶に存してお らん、	224		我是去年生的,今年才一岁、◆当 然◆不能记住人开始患此病症的 情景。	B	B-12
224		——呼吸ではいかん、魚の事だ *から*潮を引き取ったと云わ なければならん	225		不,说“停止呼吸”不妥当、◆因为 ◆是鱼嘛,应该说是在水中咽 气——	A	A-1
226		——これはさぶぶるの興味のある 運動の一だが滅多にやるとひど い目に逢う*から*、高々月に 三度くらいしか試みない。	227		这虽是饶有兴味的运动,但经常 搞就会大触霉头、◆所以◆至多 每月搞上三次。	A	A-36
226		さて吾輩の運動はいかなる種類 の運動かと不審を抱く者がある かも知れん*から*一応説明し ようと思う	227		且慢!也许有人会产疑问,不知 道我要搞的是哪种运动、◆为 此◆我想略加说明。	A	A-42
226		次には金がない*から*買う訳 に行かない。	227		加上即使会用,我们也没有钱去 买。	C	C
227		ことに人間の相手がおらんと成 功しない*から*駄目。	227		而且这种运动假如没有人和我合 作,也无法进行、◆所以◆也不	A	A-36
227		もう吾輩の力量を知った*から* *手向いをする勇氣はない。た だ右往左往へ逃げ惑うのみであ る。	228		它已经领教了我的力量、◆所以 ◆再也不想反抗了,只是拼命逃 跑。	A	A-36
227		蟻螂でもなかなか 健気なもの で、相手の力量を知らんうち は抵抗するつもりでいる*から* 面白い。	228		蟻螂也是胆量很大的家伙,在没 有领教对手的力量之前,总想较 量一番,真是有意思啦。	C	C
227		振り上げた首は軟かい*から* ぐにやり横へ曲る。この時の蟻 螂君の表情がさぶぶるの興味を 添える。	228		它那高高抬起的、非常柔软的头 立刻毫无力气地向旁一歪,这时 的表情可好玩啦。	C	C
227		先方がいつまでもこの態度でい ては運動にならん*から*、あ まり長くなるとまたちよいと一 本参る。	228		对方摆出这个架势,我就无法进 行运动了。时间久了,我就又给它 一爪子。	C	C
227		しかし敵がおとなしく背面に前 進すると、こっちは気の毒だ* から*庭の立木を二三度飛鳥の ごとく廻ってくる。	228		但是,有的蟻螂很老实,一个劲往 后跑。这时我就可怜它了,我先在 院子里的树木中像飞鸟一般跑上 两、三圈。	C	C
228		今度は地面の上へ寝たがり動か ない*から*、こっちの手で 突っ付いて、その勢で飛び上が るところをまた抑えつける。	229		这次它躺在地面上一动不动了。 ◆于是◆我用脚碰碰它,当它想 跳起来时,我马上又将它按住。	A	A-38
228		しかし吾輩も右往左往へ追っか ける*から*、君はしまいに は苦しがつて羽根を振って一大活 躍を試みる事がある。	228		但是◆因为◆我也在拼命追赶, ◆于是◆蟻螂君有时在绝望之 际,便会抖动它的双翅,作最后的 垂死挣扎。	A	A-61
228		こうなると少々気の毒な感はある が運動のためだ*から*仕方 がない。	229		它到了这步田地,不免引起我的 一些同情,但为了运动、◆也◆就 管不得了。	B	B-3
228		君は惰性で急廻転が出来ない* から*やはりやむを得ず前進し てくる。	229		蟻螂君出于惰性,一时转身不得、 ◆只好◆仍然向前爬。	B	B-9
229		吾輩は四本の足を有している* から*大地に行く事においては あえて他の動物には劣るとは思 わない。	230		◆由于◆我有四条腿、◆所以◆ 我不认为自己在大地上行走会不 如其它动物。	A	A-18
229		元来が引力に逆らつての無理な 事業だ*から*出来なくても別 段の恥辱とは思わんけれども、	230		按理说,爬树是违背引力作用的 一种逞能的事、◆因此◆即使不 会爬,我也不认为是耻辱。	A	A-37
229		人間の自ら誇る点もまたかよう な点にあるのだ*から*、今即 答が出来ないならよく考えてお いたらよかるう。	230		人自负也就是在这点上、◆所以 ◆若是马上回答不出来,那么最 好请你们回头仔细考虑考虑。	A	A-36
229		幸に爪と云う利器がある*ので *、どうかこうか登りはするも の、はたで見るとは楽ではござ らん。	230		多亏我有爪子这个武器,总算勉 勉勉强可以爬上去,这事可决不 像旁观者想象的那样轻松。	C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
230		集合は陳腐だ*から*やはり集注にする。	231		但用集合又显得陈腐, ◆所以◆还是用集中——	A	A-36
230		下から一問ばかりのところを梧桐は注文通り二又になっている*から*、ここで一休息して葉裏から蟬の所在地を探偵する。	231		从地面往上六尺多高的地方树干正好分成两叉, 我◆总◆是在这里稍事休息, 侦察一下蝉所呆的地方。	B	B-15
230		吾輩は仕方がない*から*ただ声を知るべに行く。	231		我无奈◆只好◆向有叫声的地方走去。	B	B-9
230		それは余事だ*から*、そのくらいにしてまた本題に帰る。	231		这些都是闲话, 且言归正传吧。	C	C
230		しかもその葉は皆团扇くらないな大きさである*から*、彼等が生い重なると枝がまるで見えにくいくらい茂っている。	231		而且叶子有团扇那么大小, 这些叶子长在一起, 它的茂密程度到了几乎使你看不清树干的地步,	C	C
230		逃げるのは仕方がない*から*、どうか小便ばかりは垂れんように致したい。	230		你逃脱了自然好, 撒上了算倒霉。	C	C
230		どこをどう見廻わしても、耳をどう振っても蟬気がない*ので*、出直すのも面倒だからしばらく休息しよう、又の上に乗取って第二の機会を待ち合せていたら、	231		曾经有一次, 我爬到树上, 不管怎样四面环顾, 不断摆动我的耳朵, 丝毫也感觉不出有蝉。重新再来太麻烦了, ◆于是◆我决定暂时休息一下, 据守在树叉上等待新的机会。	C	C
231		どこをどう見廻わしても、耳をどう振っても蟬気がないので、出気がないので、出直すのも面倒だ*から*しばらく休息しよう、又の上に乗取って第二の機会を待ち合せていたら、	231		曾经有一次, 我爬到树上, 不管怎样四面环顾, 不断摆动我的耳朵, 丝毫也感觉不出有蝉。重新再来太麻烦了, ◆于是◆我决定暂时休息一下, 据守在树叉上等待新的机会。	A	A-38
231		人間のあさはかな見では、どうせ降りるのだ*から*、下向に駆け下りの方が楽だと思うだろう。	232		按人类的浅薄想法, 一定会认为◆既然◆要下来, ◆当然◆是头朝下跑下来比较容易。	A	A-62
232		吾輩は松の木の上から落ちるのはいやだ*から*、落ちるのを緩めて降りなければならぬ。	233		我当然不愿意从松树上掉下来, ◆所以◆必须将“摔下来”放慢变为“爬下来”。	A	A-36
232		君等は義経が 鶴越を落としたことだけを心得て、義経でさえ下を向いて下りるのだ*から*猫なんぞは無敵下向きでたくさんだと思ふだろう。	232		你们知道连源义经也是头朝下从“鹤越”山路的悬崖绝壁上跳下去的, ◆所以◆以为猫当然是头朝下下来的。	A	A-36
232		猫の爪はどっちへ向いて生えていると思う。みんな後ろへ折れている。それだ*から*鷹の爪のように物をかけて引き寄せる事は出来るが、逆に押し出す力はない。	233		你们认为猫爪是朝哪个方向长着呢? 所有的爪子都是向后弯曲的呀。这样, 它◆就◆像“消防钩”一样, 能够钩住东西, 往里拉过来, 但用它把东西往相反的方向推出去, 却不太管用了。	B	B-1
232		吾輩の爪は前申す通り皆後ろ向きである*から*、もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は悉く、落ちる勢に逆って利用出来る訳である。	233		正如刚才已经奉告各位的那样, 在下的爪自都是朝后长着的, 如果采用头朝上的姿势, 用爪子抓住树干, 那么, 这爪子的力度却可以逆用往下落的劲儿。	C	C
232		すると吾輩は元来地上の者である*から*、自然の傾向から云えば吾輩が長く松樹の巖に留まるを許さんに相違ない、	233		然而我原是地上的动物, 从自然的倾向来说, 肯定不允许长期留在树梢上。	C	C
233		これは推参な奴だ。人の運動の妨をする、ことにどの鳥だか籬もない分在で、人の癖とまるという法があるもんかと思つた*から*、通るんだおい除きたまえと声をかけた。	234		这是一群不清自来的家伙, 专来妨碍人家的运动! 尤其是它们来历不明, 连个户籍也没有, 居然随便飞到人家的院墙上, 真是岂有此理? 我想到这里, ◆便◆向它们喊道: “喂! 我要过去, 躲我不得已◆只好◆缓慢地向前走去。”	B	B-2
233		吾輩は仕方がない*から*、そろそろ歩き出した。	234		我不得已◆只好◆缓慢地向前走去。	B	B-9
233		ことに所々に根を焼いた丸太が立っている*から*、ちょっと休息に便宜がある。	234		特别是隔不太远的篱笆上就立有一根木桩子, 给我提供了稍事休息的便利。	C	C
233		先方は羽根のある身分である*から*、こんな所へはとまりつけている。	234		对方是有翅膀的东西, 能够继续停在这里。	C	C
233		今日は出来がよかった*ので*朝から昼までに三返やつて見たが、やるたびにうまくなる。	234		今天我的工夫做得比较好, 从清晨到中午, 已经做了三遍, 一遍比一遍做得巧妙。	C	C
234		名前はまだない*から*係わりようがなからうと云うなら体面に係わる。	235		如果说◆因为◆我至今还没有名字, 不会损及我的大名, 那么也会有损于我的体面。	A	A-1
234		面倒だ*から*、いっそさよう仕ろうか、	235		为了避免惹麻烦, 我想干脆◆就◆如此行动吧。	B	B-1
235		機を見るに敏なる吾輩はどうてい駄目と見て取つた*から*、奇麗さっぱりと椽側へ引き上げた。	236		善于见机行事的, 我已经认识到自己到底是无能为力, ◆于是◆便毫无留恋地回到了廊子里。	A	A-38
235		人間は愚なものである*から*、猫で声で——猫で声は人間の吾輩に対して出す声だ。	236		人是最愚蠢的, 当猫发出喵喵的娇声——照字面的意思是人抚摸猫时发出的那种声音。	C	C
235		諺にも烏合の衆と云う*から*三羽だって存外弱いかも知れない。	235		俗语说“乌合之众”嘛, 别看它们是三个, 说不定都是些意想不到的软骨头。	C	C
235		とにかく人間は愚なものである*から*撫でられ声で膝の傍へ寄って行くと、大抵の場合において彼もしくは彼女を愛するものと誤解して、	236		总之人是愚蠢的, 当我发出喵喵的娇声, 靠近他们的膝头时, 在一般情况下, 人总误以为我在爱他们。	C	C
235		しかるに近来吾輩の毛中のみと号する一種の寄生虫が繁殖した*ので*滅多に寄り添うと、必ず頸筋を持って向うへ抛り出される。	237		但是最近◆由于◆我的皮毛里繁殖了一种称为跳蚤的寄生虫, ◆所以◆我一贴近他们, 他们就会提起我的颈筋, 把我抛到旁边去。	A	A-18
236		——人間の取り扱が俄然豹変がした*ので*、いくら痒くても人力を利用する事は出来ん。	237		◆由于◆人对我的态度突然的剧变, 不管我怎样发痒, 再也不能依靠人力了。	A	A-15

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
237		どうせ人間の作ったものだから*碌なものでないには極まっているが	238		反正是人造出来的。◆总◆不会有像样的东西。	B	B-15
237		吾輩はただでさえこのくらいな器量だから*、これより色男になる必要はないようなものの、	238		我本来已经长得十分英俊，没有必要再去洗澡，当风流后生了。	C	C
237		主人がすまして這入るくらいのところだから*、よもや吾輩を断わる事もなからうけれども万一お気の毒様を食うような事があっては外聞がわるい。	238		我想连主人都大大方方进去，总不至于拒绝我进入吧。话虽如此，但如果真的吃了闭门羹，我的名声可就不好啦。	C	C
238		——長い事だから*これはトイフェルスドレック君に譲って、繻くだけはやめてやるが、	240		这样说来话就长啦。◆还是◆交给托伊费尔斯特德列克先生去讲，这里暂时免了	B	B-10
238		吾輩は二十世紀の猫だから*このくらいの教育はある。	239		在下是二十世纪的猫儿，这样的教育我还是受过的。	C	C
238		その向側で何かしきりに人間の声がする。いわゆる洗滌はこの声の発する辺に相違ないと断定した*から*、松薪と石炭の間に出来てる谷あいを通り抜けて左へ廻って、	239		而对面屋里好像有人声，我立即断定，所谓的澡堂肯定就在发出声音的那一带。我从松柴和煤堆的夹道儿当中穿过去，向左拐，	C	C
238		板の高さは地面を去る約一メートルだから*飛び上がるには御跳えの上等である。	239		这隔板离地面有一米高，对我跳上去再去合适也不过的了。	C	C
239		図案学校の事である*から*、裸体画、裸体像の模写、模型を買い込んで、	240		◆因为◆它是美术学院，◆当然◆要画裸体画，临摹裸体像。他们买来了裸体模型。	A	A-63
239		希臘人や、羅馬人は平常から裸体を見做れていたのだから*、これをもって風教上の利害の關係があるなどとは毫も思い及ばなかったのだろう	241		希腊人，罗马人，他们平时就看惯了裸体，◆所以◆他们丝毫不认为这会和风纪上有什么厉害关系。	A	A-36
239		日本でさえ裸で道中がなるものと云うくらいだから*独逸や英吉利で裸になつておれば死んでしまう。	241		就连日本，也不允许光着身子旅行啊，如果在德国、英国，光着身子就会冻死。	C	C
240		猫の事だから*西洋婦人の礼服を拝見した事はない。	241		◆因为◆我是猫儿，没有看见过西方妇女穿的礼服吗？	A	A-1
240		西洋人がやらない*から*、自分もやらないのだろう。	242		并不是做不到，而是西方人那样做。◆所以◆自己也就不做	A	A-36
240		ただ西洋人がきる*から*、着ると云うまでの事だろう。	242		只是◆因为◆洋人这样穿，◆所以◆她们才这样穿罢了。	A	A-7
240		死んでしまつてはつまらない*から*着物をきる。	241		人们怕死◆就◆得穿衣服。	B	B-1
240		美しい？ 美しくても構わん*から*、美しい獣と見做せばいいのである	241		您说什么美得很？美就是美，将它看作是很美的兽就是了。	C	C
240		それがなぜこんな下等な藝術師流に転化してきたかは面倒だから*述べない。	241		为什么现在她们的服装会变成这样下流，和马戏班子演员一样了昵？这理由说来话长，我不想在这里多说。	C	C
241		気が利かんでも仕方がないと云うなら勘弁する*から*、あまり日本人をえらい者と思つてはいけない。	242		如果说是◆因为◆不得已而干这种蠢事，当然可以原谅，不过，请不要认为日本人很了不起。	A	A-1
241		西洋人は強い*から*無理でも馬鹿気ていても真似なければやり切れないのだろう。	242		◆因为◆西方人势力强大，◆所以◆不管是硬去模仿，还是出于闹市，总之不跟着学就感到不舒	A	A-7
241		学問といえどもその通りだがこれは服装に關係がない事だから*以下略とする。	242		在做学问上，又何尝不是如此，不过这和服装无关，这里◆就◆不多讲了。	B	B-1
242		すべて考え出す時には骨の折れるものである*から*猿猴の發明に十年を費やしたつて車夫の智慧には出来過ぎると云わねばなるまい。	243		思考任何一件事物都是很费力气的，◆所以◆说花费十年时间发明蒸汽，对车夫说来，应该说是十分难得的。	A	A-36
242		化物でも全体が申し合せて化物になれば、いわゆる化物は消えてなくなる訳だから*構わんが、	242		如果全体怪物都一致同意做怪物，那么怪物这个称呼也就自然消失了，这◆当然◆是可以的。	B	B-12
243		みんなが化物だから*恥ずかしい事はないと安心してやつぱり駄目である。	244		◆因为◆大家都是怪物，谁也无需害臊了，因而觉得放心，实际上也还是不行。	A	A-1
243		化物のやる事には規律がない*から*秩序立った証明をするのに骨が折れる。	244		这些怪物们搞的事儿全无规律，◆所以◆想要条例分明地加以说明是相当费力的。	A	A-36
245	「そうよ、民さんなんざお腹が低いじゃねえ、頭が高けえんだ。それだから*どうも信用されねえんだね」		246	就是嘛，阿民这号人，不懂得谦恭和谒，总是眉毛扬得老高，◆所以◆大家才不信任他。	A	A-36	
247	外国は卑怯だから*ね、それであんなものが出来たんだ。		247	外国人没胆量，◆所以◆才造出枪来。	A	A-36	
248	それでその義経のむすこが大明を攻めたんだが大明じゃ困る*から、三代將軍へ使をよこして三千人の兵隊を借してくれと云うと、三代様がそいつを留めておいて帰さねえ。		248	后来源义经的儿子去攻打大明国，大明国方面受不了，◆于是◆派遣一个使者来见三代将军，提出要借三千兵马，三代将军把那个家伙留下来不放手回去。	A	A-38	
248	今日は少々御寒うございませ*から*、どうぞ御緩くり——		249	今天天气比较冷，请各位慢慢地洗。	C	C	
248		吾輩は突然この異な爺さんに逢つてちよつと驚ろいた*から*こつちの記述はそのまゝにして、しばらく爺さんを専門に觀察する事にした。	249		我突然碰上了这个稀奇的老头儿，未免有些吃惊，◆所以◆这边的记述暂且放一放，让我专门观察一下这个老头儿吧。	A	A-36
248		仕方がないものだから*たちまち機鋒を転じて、小供の親に向つた。	249		他不得已灵机一动，转向小孩的父亲说：	C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
249	「はいはい御寒う。あなた方は、御若い*から*、あまりお感じにならんかの」		250	今天真是够冷的啦，您还年轻，还不太觉冷吧		C	C
249		物は見ようでどうでもなるものだ*から*、この怒号をただ逆上の結果とばかり判断する必要はない。	250		事物是多种多样的，没有必要一定认为主人的狂叫是由于虚火上升。	C	C
249		しかし主人の怒号は書生の席そのものが不平なのではない、先刻からこの両人は少年に似合わず、いやに高慢ちきな、利いた風的事ばかり併べていた*ので*、始終それを聞かされた主人は、全くこの点に立腹したものと見える。	250		但是，主人的这番狂叫并不是对“书生”占据的位置不满，而是完全◆因为◆刚才这两个青年人毫无那种稳当劲儿，一味地讲了许多高傲自大，自作聪明的事儿，主人听了这些大动肝火。	A	A-1
249		これは尋常の答で、ただその地を去らぬ事を示しただけが主人の思い通りにならん*ので*、その態度と云い言語と云い、山賊として罵り返すべきほどの事でもないのは、いかに逆上の気味の主人でも分っているはずだ。	250		这是一般的回答，只表示他不想离开那个位置，不肯照主人的想法办。从“书生”的态度和语气来看，实在没有被值得骂为山贼的可能。按理说，不管主人怎样虚火上升，这点也是应该明白的。	C	C
250		吾輩もこの小僧を少々心憎く思っていた*から*、この時心中にはちよつと快哉を呼んだが、	251		我心里对这两个小青年早就不满了，这时◆也◆不由得喊了声“快哉！”	B	B-3
250		この湯槽に浮いているもの、この流しにごろごろしているものは文明の人間に必要な服装を脱ぎ棄てる化物の団体である*から*、無論常規常道をもって律する訳にはいかん。	251		这么多在浴池里浸泡着的人，这么多在水龙头前冲澡的人，都是脱掉了文明人所不可缺少的衣服的怪物集团，当然不能用常规来要求他们，	C	C
253		吾輩は少々物凄くなった*から*早々窓から飛び下りて家に帰る。	253		我感到实在有点渗得慌，◆便◆赶忙从窗子上跳下，回家去了。	B	B-2
253		これが了解出来れば、どうかこうか方法もあろうがただ撲って見ろだ*から*、撲つ細君も困るし、撲たれる吾輩も困る。	254		如果我猜得透，便能采取相应的对策，但是主人只是一味让主人打我，这不但◆使◆打我的主人的妻子很为难，就是挨打的我也很为难。	B	B-5
253		やはり何ともない*から*、じつとしていた。	254		还是一点也不疼，我仍然默不做声。	C	C
253		主人は二度まで思い通りにならん*ので*、少々焦気味で「おい、ちよつと鳴くようにぶつて見ろ」と云った。	254		主人两次未能如愿，多少带点不耐烦的口吻说：“喂，你要打得它叫唤！”	C	C
254		主人はかくのごとく愚物だ*から*厭になる。	254		主人就是这样一个蠢货，◆所以◆惹我讨厌。	A	A-36
254		殺せば死ぬに極まっている。それだ*から*打てば鳴くに極っていると速断をやったんだらう。	255		杀了人，人就会死去，◆所以◆他认为只要打我，我就会叫唤。	A	A-36
255		こう云う男だ*から*こんな奇問を細君に対して呈出するのも、主人に取っては朝食前の小事件かも知れないが、	256		◆因为◆他是这样的一个人，◆所以◆对妻子提出这类奇妙的问题不过是家常便饭，小事一桩罢了。	A	A-7
255		「そう」と細君は利口だ*から*、こんな馬鹿な問題には関係しない。	256		主人的妻子是个机灵的人，她不想多搭理主人的这种胡扯，只应了一声“是吗？”	C	C
255		細君はあまり突然な問*ので*、何にも云わない。	255		主人的妻子对他的突然发问，什么也没有回答。	C	C
256	「重要な問題だ*から*そう急には分らんさ」		256	这是一个重要的问题，一时哪里弄得明白。		C	C
257	「桂月は現今一流の批評家だ、それが飲めと云うのだ*から*いいに極っているさ」		258	桂月は現今最有名气的批评家，他劝我多喝酒，肯定是有好处的嘛。		C	C
257		二杯でも随分赤くなるところを倍飲んだのだ*から*顔が焼火箸のようにほてって、さも苦しうだ。	257		本来喝两盅脸就变得红扑扑的，如今多喝了一倍，脸立刻变成了大红萝卜，满脸红通通的，看上去很难受的样子。	C	C
258		名前に税はかからん*から*御互にえらそうな奴を勝手次第に付ける事として、	259		反正叫什么名字是毋需纳税的，◆所以◆彼此尽可取一个吓人的名字。	A	A-36
258		但し檜の枝は吹聴するごとく密生しておらんので、その間から群鶴館という、名前だけ立派な安下宿の安屋根が遠慮なく見える*から*、しかく先生を想像するにはよほど骨の折れるのは無論である。	259		不过，这扁柏的枝头并不像所吹嘘的那样茂密，所以从其间可以清楚地看到一家名叫“群鹤馆”的公寓屋顶，尽管这个公寓名称高雅得很，其实只不过是三、四流的公寓罢了。当然，去想象住在那座公寓的老兄们都是些什么人，是相当不容易的。	C	C
258		但し檜の枝は吹聴するごとく密生しておらん*ので*、その間から群鶴館という、名前だけ立派な安下宿の安屋根が遠慮なく見えるから、しかく先生を想像するにはよほど骨の折れるのは無論である。	259		不过，这扁柏的枝头并不像所吹嘘的那样茂密，◆所以◆从其间可以清楚地看到一家名叫“群鹤馆”的公寓屋顶，尽管这个公寓名称高雅得很，其实只不过是三、四流的公寓罢了。当然，去想象住在那座公寓的老兄们都是些什么人，是相当不容易的。	A	A-36
259		もう周囲一尺くらいにのびている*から*下駄屋さえ連れてくればいい値になるんだが、	260		这些桐树的树干直径已有一尺左右，如果把木履铺的老板领来，是会卖到好价钱的。	C	C
260		名前が落雲館だ*から*風流な君子ばかりかと思うと、	261		◆由于◆名称是落云馆，也许有人会认为这里的学生都是一些风流潇洒的君子。	A	A-15
260		吾輩は別に伝兵衛に恨もない*から*彼の悪口をこのくらいにして、	260		我和传兵卫并无宿怨，关于他的坏话，我◆就◆说到这里为止。	B	B-1
261		ところが教育のある君子の事だ*から*、こんな事でおとなしく聞く訳がない。	262		不过，这些有教养的君子，◆当然◆不会为这点事就老实听从的。	B	B-12

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
261		前申すごとく、ここへ引き越しの当時は、例の空地に垣がない*ので*、落雲館の君子は車馬の黒のごとく、のそのそと桐島に道入り込んで、話をすする、弁当を食う、筐の上に寝転ぶ—いろいろの事をやったものだ。	261		如前所述、在刚搬到这里来的时候，那块空地◆由于◆没有围墙，落云馆的那些君子们和车夫家的黑猫一样，悠悠荡荡地进入这片桐树林子里来闲聊，吃从家里带来的午饭，趴在矮竹从里滚来滚去，反正想干什么就干什么。	A	A-15
262		しかも君子の談話だ*から*一風違つて、おめえだの知らねえの云う。	262		而这些君子的谈话◆也◆与众不同，满口都是“你小子”、“去你妈的”之类的话。	B	B-3
262		表門をがらりとあける*から*御客かと思うと桐島の方で笑う声がある。	263		或者哗啦的推开门，家里人以为有客人来了呢，而在桐树林子那边，却发出一阵哄笑声。	C	C
262		吾輩のような猫ですら、時々は当家の令嬢にからかかって遊ぶくらいだ*から*、落雲館の君子が、気の利かない苦沙弥先生にからかうのは至極もつともなところで、	263		就连我这猫儿，也时常以捉弄主人家里的小姐们为乐趣哩。落云馆的君子们来捉弄这愚笨的主人是完全应该的。	C	C
262		いくら吠えても狂っても相手にせん*ので*、しまいに犬も愛想をつかしてやめる、	263		不管这小狗如何狂吠，如何向它发疯，它就是不予理睬，最后小狗自觉无趣，就不再闹腾了。	C	C
263		但し多少先方を怒らせるか、じらせるか、弱らせるかしなくては刺激にならん*から*、昔しからからかうと云う娯楽に耽るものは人の氣を知らない馬鹿大名のような退屈の多い者、もしくは自分のなぐさみ以外は考るに暇なきほど頭の発達が幼稚で、しかも活氣の使い道に窮する少年かに限っている。	264		不过，如果不能使对方多少有所发怒，或有所焦躁，或有所困惑，那么就不成为刺激。◆所以◆古时候那些热衷于捉弄人作为娱乐的人，不外乎是两种人，要么是从不考虑别人感情的蠢侯爷这类闲得慌的人，要么是除了自己寻找乐趣之外无暇考虑其它事情的，头脑还出于幼稚状态，而又不知道怎样消耗自己精力的少年。	A	A-36
264		あまり長くなる*から*略する事に致す。	265		说下去话就长啦。◆所以◆请允许我从略。	A	A-36
265		四つ目垣の穴を潜り得る事は、いかなる小僧といえどもとうてい出来る氣遣はない*から*乱入の虞は決してないと速定してしまつたのである。	266		◆因为◆他轻率地断定，任何瘦小的少年也决不可能这种方格的窟窿。◆从而◆不必担心会有人再闯进来。	A	A-64
265		しかしよく似ている*から*仕方がない、	265		然而他们太相似了。◆又◆有什么办法呢。	B	B-4
266		もし追い懸けられたら逃げるのに、少々ひまがある*から*、予め逃げる時間を勘定に入れて、	266		◆因为◆那样一旦被追赶，逃跑时就要多费时间。◆所以◆他们事先估计好逃跑所用的时间。	A	A-7
268		この戦争を記述する上において必要である*から*やむを得ない。	267		不过为了记述这次战争的需要，我◆又◆不得不使用它。	B	B-4
269		もつとも逆上は氣遣の異名で、氣遣にならないと家業が立ち行かんとなつては世間体が悪い*から*、彼等の仲間では逆上を呼ぶに逆上の名をもつてしない。	269		当然，虚火虚火上升也就是疯子的别称，既然他们不成为疯子就无法混饭吃，而在舆论上又未免太难听。◆所以◆在诗人当中，并不以虚火上升来称呼它。	A	A-36
269		巢鴨へ入院せずに済むのは単に臨時氣遣である*から*だ。	270		虚火上升毋需送入巢鸭的疯人院。◆因为◆它只是短期疯癫罢了。	A	A-1
270		聞くところによればユーゴーは快走船の上へ寝転んで文章の趣向を考えたそうだ*から*、船へ乗って青空を見つめていれば逆上受合である。	271		据我所知，雨果是躺在快艇上思索文章立意的。◆所以◆只要坐在船上双眼注视着碧空，保证一定会虚火上升。	A	A-36
270		しかし金がない*ので*ついに実行する事が出来なくて死んでしまつたのは氣の毒である。	270		可惜那人是个穷光蛋。◆所以◆始终未能付诸实施，就一命归天了。	A	A-36
271		m k	272		伊斯基拉斯也是一位作家。◆所以◆自然也是个秃头。	A	A-36
271		なぜ頭が禿げるかと云えば頭の營養不足で毛が生長するほど活氣がない*から*に相違ない。	272		为什么人们的头都会秃呢？无疑是因为◆营养不良而使头发失去了生活力的缘故。	A	A-1
271		いくらダムダムだつて落雲館の運動場から発射するのだ*から*、書齋に立て籠つてる主人に中る氣遣はない。	272		别看它是达姆达姆弹。◆由于◆它是从落云馆运动场发射出来的。◆所以◆不必担心它会击中整天埋伏在书斋里的主人。	A	A-18
271		逆上の説明はこのくらいで充分だろうと思う*から*、これよりいよいよ事件に取りかかる。	271		关于虚火上升的解释，我想这已足够了，下边◆就◆要谈事件的正题了。	B	B-1
272		海老の鬼殻焼はあるが亀の子の甲羅煮は今でさえないくらいだ*から*、当時は無論なかつたに極っている。	273		大虾有一种带皮烤的名菜，但是带壳儿炖乌龟至今还没有过，肯定当时也是没有过的。	C	C
273		生憎作家の頭の方が亀の甲より軟らかであつたものだ*から*、禿はめちやめちやに砕けて有名なるイスキラスはここに無惨の最後を遂げた。	273		不巧这个作家的头比起乌龟的壳来要软的多。◆结果◆秃头被打得粉碎，有名的伊斯基拉斯就这样悲惨地死了。	A	A-65
273		迷亭が来た*から*、迷亭に雁が食いたい、雁鍋へ行つて眺らえて来いと云うと、	274		这时迷亭也来了，我对迷亭说：“我想吃大雁，你到雁窝铺去，给我买一份来！”	C	C
273		蕪の香の物と、塩煎餅といつしよに召し上がりますと雁の味が致しますと例のごとく茶羅ッ餅を云う*から*、大きな口をあいて、うーと唸つて嚇つてやったら、	274		迷亭照例还是用那种胡乱开玩笑的口吻说：“您要是和腌芜菁、椒盐饼一齐吃，大雁就更有味道啦。”我长开大口，发出“唔”的一声来威吓他。	C	C
273		いきなり後架から飛び出して来て、吾輩の横腹をいやと云うほど蹴た*から*、おやと思ううち、	274		他猛地从茅房里跳出来，狠狠地踩了我的肚子一脚。我大为奇怪	C	C
273		吾輩は急にからだが大きくなつた*ので*、椽側一杯に寝そべつて、	274		我◆由于◆身体突然变大，在廊子里躺着，将廊子塞得满满的。	A	A-15

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
274		吾輩は虎から急に猫と取縮したのだ*から*何となく極りが悪くもあり、おかしくもあったが、	274		我刚刚从梦中的老虎变回到猫儿上来，自己◆也◆觉得怪滑稽的，有些不好意思。	B	B-3
275	私も人間である*から*時には大きな声をして歌などうたって見たくなる事がある。		276	我也是人，有时◆也◆想大声唱一唱。		B	B-3
276	こう云う訳だ*から*諸君もなるべく公德を守って、いやしくも人の妨害になると思う事は決してやってはならぬのである。……」		276	在这种情况下，我总是控制自己。希望诸君也尽量遵守公德，只要认为有可能妨碍别人的事，就坚决不要做……”		C	C
277		濡れ手拭を頂いて、炬燵にあたらなくとも、樹下石上を宿としなくとも大丈夫だろうと鑑定した*から*、にやにやと笑ったのである。	277		◆由于◆他断定以后再也不用拿湿毛巾顶在头上，两脚伸进被炉里去，也不用担心要在树下石上露宿了，◆所以◆他才微微一笑。	A	A-18
278		米国は突飛な事ばかり考え出す国柄である*から*、砲隊と間違えてもしかるべき、	278		美国这个国家是个专门琢磨出新奇事儿的国家，◆所以◆把球当成炮弹来用，也就不足为怪了。	A	A-36
279		ダムダム弾は近來諸所で製造するが随分高価なものである*から*、いかに戦争でもそう充分な供給を仰ぐ訳に行かん。	279		近来到处都在制造达姆达姆弹，但价格还是很贵的。虽说战争炮手也不会无限地得到炮弹，	C	C
282		目的が遊戯にあるのではない、戦争に存するのだ*から*、わざとダムダム弾を主人の邸内に降らせる。	280		目的已经不是游戏，而是在于战争。◆所以◆他们故意把炮弹打进主人的院子里。	A	A-36
282		奥歯で嚙潰した癩癩玉が炎となつて鼻の穴から抜ける*ので*、小鼻が、いちじるしく怒つて見える	282		那股怒气看上去就像是用白肉咬响了炸炮，火焰从鼻孔中喷射出来似的，◆因此◆鼻翼扇动得十分厉害。	A	A-37
284	で運動は教育上必要なものであります*から*、どうもこれを禁ずる訳には参りかねるので、		285	不过，从教育上说，运动是必要的，鄙人◆也◆很难加以禁止。		B	B-3
284	——広い学校の事です*から*どうも世話ばかりやけて仕方がないです。		285	无奈学校太大，竟给我找事儿，真没办法。		C	C
284		下女は「へえ」と答えが、あまり庭前の光景が妙なのと、使の趣が判然しないのと、さっきからの事件の発展が馬鹿馬鹿しい*ので*、立ちもせず、坐りもせずになやにや笑っている。	283		厨娘虽然应了一声“嗯”，但是◆由于◆院子里这番奇异的景象和捉摸不透打发她的真意，加上方才事件发生得太奇怪，◆所以◆她站又不是坐又不是，只是嘻嘻地笑着。	A	A-18
285	ではこの生徒はあなたに御引き渡し申します*から*お連れ帰りを願います。		285	那么，这些学生我就交还给您啦，请您带回。		C	C
285		瑣談織話と思つてうっかりと読んでいたものが忽然豹変して容易ならざる法語となるんだ*から*、決して寝ころんだり、足を出して五行ごとに一度に読むのだなど云う無礼を演じてはいけません。	286		即使原先将它当做闲言碎语、漫不经心读过的人，再读一遍，就会立即改变原来的看法，感到这是有道德的高僧们做出的极其重大的垂训，◆因此◆决不可以采取那种非礼的态度，即不是卧读，就是伸腿舒脚，一目五行地读。	A	A-37
285		吾輩はすでに小事件を叙し了り、今また大事件を述べ了った*から*、これより大事件の後に起る余瀾を描き出だして、全篇の結びを付けるつもりである。	286		我在前边已叙述了一件小事件，现在又讲述了大事件。现在我想将产生于大事件之后的余波描述一番，作为这一件事整个过程的结束。	C	C
286		柳宗元は韓退之の文を読むごとに蓄微の水で手を清めたと云うくらいだ*から*、吾輩の文に対してもせめて自腹で雑誌を買って来て、友人の御余りを借りて間に合やすと云う不始末だけはなさない事に致したい。	286		据说柳宗元每读韩退之的文章时，总是用蓄微水来净手的，◆所以◆对我的文章，请你们自己掏腰包买来读，千万不要做那种借友人读剩下的来穷对付那种不光彩的行为。	A	A-36
286		大事件のあった翌日、吾輩はちよつと散歩がしたくなつた*から*表へ出た。	286		发生大事件的第二天，我产生了散步的雅兴，◆便◆逛街去了。	B	B-2
287	——とか何とか、いろいろ小生意気な事を云う*から*、そんなら実業家の腕前を見せてやろう、と思つてね。		288	说的全是这种傲慢不逊的话！◆所以◆我想，你不服气就让你尝尝实业家的厉害。		A	A-36
287	昔からああ云う癖のある男で、つまり自分の損になる事に気が付かないんです*から*度し難いです」		288	他这人一向就是这个怪脾气，根本不懂得算自己是否会吃亏，◆所以◆难调理。		A	A-36
287	「どうも損得と云う観念の乏しい奴です*から*無暗に瘦我慢を張るんでしよう。		288	真是个缺乏厉害观念的家伙，打肿脸拼命充胖子。		C	C
287		近來は金田の邸内も珍らしくなくなつた*から*、滅多にあちらの方角へは足が向かなかつたが、	286		近来，金田公馆对我来说已不新鲜，◆所以◆我轻易不往那个方向溜达。	A	A-36
287		金田君は探偵さえ付けて主人の動静を窺がうくらいの程度の良心を有している男だ*から*、吾輩が偶然君の談話を拝聴したつて怒るる氣遣はあるまい。	286		金田君是个不惜雇密探来窥测主人动静的，好心眼儿的家伙，◆所以◆即便我偶然拜听了这位老兄的谈话，也不用担心他会发怒。	A	A-36
287		鈴木にも久々だ*から*余所ながら拝顔の榮を得ておこう。	286		我也好久没有看见铃木了，这次可让我从侧面一睹其风采了。	C	C
291	「来ないようにするつたって、来る*から*仕方がないさ」		291	让他们不要来？他们要来◆又◆有什么办法？”		B	B-4
291	「ちよつとボールが這りました*から*、取らして下さい」		290	球飞到您这儿来了，请允许我去拿。		C	C
291	「ちよつとボールが這りました*から*取らして下さい」		290	对不起，球进到您家里来了啦，请让我们取一下。		C	C
292	今ちよつとボールが飛びました*から*、裏口へ廻つて、取つてもいいですか」		290	球又飞进来了，我可以绕到屋后去取吗？		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
293		鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思った*から*、それじゃ失敬と来たまえと帰って行く。	292		鈴木君认为大体上已达到了访问的目的。◆于是◆说了声“失陪！有工夫到我那儿坐坐！”便回去了。	A	A-38
293		こう思った*から*平生かかりつけの甘木先生を迎えて診察を受けて見ようと云う量見を起したのである。	293		他明白了这点。◆于是◆产生了一个念头：请一向熟悉的甘木大夫给诊断一下。	A	A-38
294		甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚の長者だ*から*、別段激した様子もなく、「利かん事もないです」と穏かに答えた。	293		甘木先生对主人的问话，虽感到吃惊，但他毕竟是位温厚的长者。◆也◆没有怎样不痛快，只是稳稳当地回答说：“不会不管用”	B	B-3
295		なぜ哲学者と云うと、何も迷亭のように自分で振り散らす*から*ではない、ただ主人と対話する時の様子を拝見しているといかにも哲学者らしく思われるからである。	295		为什么说他是哲学家呢？这并不是◆因为◆他像迷亭那样进行自我吹嘘，只是因为当我看着他他与主人对话时的那种神态，不能不使我感到他像个哲学家。	A	A-1
295		吾輩は今までこんな事を見た事がない*から*心ひそかに喜んでその結果を座敷の隅から拝見する。	294		我过去从未见过这种事儿，心里十分兴奋，于是在客厅的角落里恭恭敬敬地瞧着。	C	C
296	ただありがたい事に人を羨む気も起らん*から*、それだけいいね]		296	可喜の、我不羡慕别人，这就◆行了嘛。		B	B-1
296	しかし食うている*から*大丈夫。		296	不过，还有饭吃，倒◆也◆没问题，算不了什么。		B	B-3
296	しかし奥行きがない*から*落ちつきがなくて駄目だ。		296	不过，比较浅薄，不够沉稳，那怎么行？		C	C
296		なぜ哲学者と云うと、何も迷亭のように自分で振り散らす*から*ではない、ただ主人と対話する時の様子を拝見しているといかにも哲学者らしく思われる*から*である。	295		为什么说他是哲学家呢？这并不是因为他像迷亭那样进行自我吹嘘，只是◆因为◆当我看着他他与主人对话时的那种神态，不能不使我感到他像个哲学家。	A	A-1
297	人間はいろいろだ*から*、そう自分のように人にもなれと勧めたって、なれるものではない。		296	人是各种各样的，你就是要别人都和自己一样，也还是不会和自己一样的		C	C
298	向に槍があるだろう。あれが目障りになる*から*取り払う。		298	比如对面有棵柏树，嫌它妨碍视野，◆于是◆斫伐掉。		A	A-38
298	寡人政治がいかん*から*、代議政体にする。		298	寡头政治不好，◆于是◆改为代议政治。		A	A-38
299	代議政体がいかん*から*、また何かにしたくなる。		298	认为代议政治不行，◆于是◆又想搞出什么新鲜的东西来。		A	A-38
302		いくら功德になっても訓戒になっても、きたない者はやっばりきたないものだ*から*、物心がついて以来と云うもの主人は大にあばたについて心配し出して、あらゆる手段を尽してこの醜態を揉潰そうとした。	303		不管他的麻脸如何具有功德，如何可以作为教诲的教材，肮脏毕竟还是肮脏。◆所以◆主人自从懂得人事之后，就对这麻子开始操起心来，想尽一切办法要抹掉这个丑态。	A	A-36
302		その頃は小供の事で今のように色気もなにもなかったものだから*、痒い痒いと云いながら無暗に顔中引き掻いたのだそう。	303		当时主人还是个孩子，不像现在这样知道什么是俊俏，只是一味地叫嚷“痒！痒！”，还拼命地往脸上抓。	C	C
303		あんな偏屈な男はどうてい猫の忠告などを聴く気遣はない*から*、まあ勝手にさせたらよかろうと五六日は近寄りもせず暮した。	304		不过像他那种乖僻的人，肯定是不听从我这猫儿的忠告。◆所以◆我决定还是随他去吧。这样，有五、六天我都没有搭理他。	A	A-36
304		本人に聞いて見ない事だ*から*頼とわからない。	304		我没有问本人，◆所以◆我毫不知情。	A	A-36
305		あえて他人に害を及ぼすほどの事でない*から*、誰も何とも云わない。	305		不过◆由于◆这件事并不会于人有害，◆所以◆谁也没有提过意见。	A	A-18
305		この鏡ととくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はない*から*である。	305		我◆只所以◆特别说明是这面镜子，◆因为◆主人家除了这面镜子之外，就再也没有别的镜子了。	A	A-66
305		なろう事なら顔まで毛を生やして、こっちのあばたも内済にしたいくらいどころだ*から*、ただで生える毛を銭を出して刈り込ませて、私は頭蓋骨の上まで天然痘にやられましたよと吹聴する必要はあるまい。	306		假如真的可能，甚至希望脸上也长出毛发把整个脸上的麻子也都遮掉才好呢。◆所以◆完全没有必要把不花钱长出来的头发那钱去让人剪掉，并且宣扬：“看！连我的脑瓜上都害过天花。”	A	A-36
307		御三が聞いたらさぞ怒るだろう*から*、御三はこのくらいにしてまた主人の方に帰るが、	308		阿三听了这话，真不知她会恼火到什么样子呢。◆所以◆关于阿三就讲到这里，还是接着讲我的主人吧。	A	A-36
307		和尚からからと笑いながらそうか、それじゃやめよ、いくら書物を読んでも道はわからぬのもそんなものじゃと罵ったと云う*から*、主人もそんな事を聞き 唾って風呂場から鏡でも持って来て、したり顔に振り廻しているのかも知れない。	306		和尚一边哈哈大笑，一边责骂道：“哦，你说得对，那我就磨了，不过，那种读破万卷书，却不懂得我佛门之道的人，恐怕也和我用瓦罐磨镜子一样。”说不定主人也多少听过这个故事，所以才洗澡间把镜子拿来，很得意地摆弄它。	C	C
307		その骨格通りにふくれ上がるのだ*から*、まるで水気になやんでいる六角時計のようなものだ。	308		她的胖脸是按她的骨格膨大起来的，简直就像个经历过水浸了的六角挂钟一般。	C	C
310		いくら仕てやりたくても、貰いたくても、出来ない相談である。それだ*から*古来の豪傑はみんな自力で豪傑になった。	309		不管他怎样想代你做，你怎样想请他代你做，都是徒劳的。◆所以◆古来的豪杰都是用自己的力量成为豪杰。	A	A-36
310		して見ると彼の眼は彼の心の象徴で、彼の心は天保銭のごとく穴があいている*から*、彼の眼もまた天保銭と同じく、大きな割合に通用しないに違ない。	311		这样看来，他的眼神是他心的象征，他的心像天保铜钱那样中间有孔，◆所以◆他的眼睛也和天保铜钱一样，尽管个儿大，却不通用。	A	A-36

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
310		彼の眼玉がかように晦渋濁濁の悲境に彷徨しているのは、とりも直さず彼の頭脳が不透明の実質から構成されていて、その作用が暗鬱溟濛の極に達している*から*。	311		他的眼神◆之所以◆这样彷徨于晦涩溟濛的悲境之中，完全◆是因为◆他的头脑实际上不透明而形成的，其作用达于暗淡溟濛之极。	A	A-44
314		熱心は成効の度に応じて鼓舞せられるものである*から*、吾が髯の前途有望なりと見てとって主人は朝な夕な、手がすいておれば必ず髯に向けて鞭撻を加える。	311		真挚地对待事物，随着渐见成效，当然要受到鼓舞，主人看出自己的胡子前途大有可为，于是也不论早晚晨昏，只要一闲着，就一定要整治胡子。	C	C
315		どこの雑誌へ出しても投書になる価値は充分あるのだ*から*、頭脳の不透明をもって鳴る主人は必ず寸断寸断に引き裂いてしまおうと思のほか、打ち返し打ち返し読み直している。	315		我想这种东西不管向哪家杂志投稿，都保证不会被采用的，◆所以◆我认为头脑不透明的主人肯定会把它撕得一条一条扔掉，然而满不是这么回事，他翻过来掉过去，读了又读。	A	A-36
315		主人がこの手紙に敬服したのも意義が明瞭である*から*ではない。	316		主人◆所以◆敬服这封信，也不◆是因为◆读懂了其中的意思。	A	A-43
315		だから主人がこの文章を尊敬する唯一の理由は、道家で道德経を尊敬し、儒家で易経を尊敬し、禪家で臨済録を尊敬すると一般で全く分らん*から*である。	316		因此，主人◆之所以◆尊敬这篇文章的唯一理由，正和道家尊敬《道德经》、儒家尊敬《易经》、禅家尊敬《临济录》没有什么两样，都◆是因为◆完全读不懂。	A	A-44
316		但し全然分らんでは気がすまん*から*勝手な註釈をつけてわかった顔だけはする	316		不过，完全读不懂也不太服气，◆于是◆胡乱做些注释总算做出个懂的样子。	A	A-38
317		ことに見ず知らずの年長者が頑と構えているのだ*から*上座どころではない。挨拶さえ確には出来ない。	318		尤其是像这样初次见面的一个年长者顽固地坐着不动，不但谈不上上座与下座，而且连寒暄也无法进行。	C	C
318		主人は交際の狭い、無口な人間である上に、こんな古風な爺さんとはほとんど出会った事がないのだ*から*、最初から多少場うての気味で辟易していたところへ、滔々と浴びせかけられたのだから、朝鮮仁参も飴ん棒の状袋もすっかり忘れてしまったてた苦しまぎれに妙な返事をする。	319		主人交际面窄，又是一个笨嘴拙舌的人，几乎从未遇上过这样古风的老者，◆所以◆从一开始就觉得多少有些不自在，不知怎样应付才好，在加上老者这一套滔滔不绝的寒暄，使得他早已把朝鲜人参和红红的棒状糖忘得干干净净，只剩下手足失措、怪腔怪调的回答了。	A	A-36
318		主人は交際の狭い、無口な人間である上に、こんな古風な爺さんとはほとんど出会った事がないのだから、最初から多少場うての気味で辟易していたところへ、滔々と浴びせかけられたのだ*から*、朝鮮仁参も飴ん棒の状袋もすっかり忘れてしまったてた苦しまぎれに妙な返事をする。	319		主人交际面窄，又是一个笨嘴拙舌的人，几乎从未遇上过这样古风的老者，所以从一开始就觉得多少有些不自在，不知怎样应付才好，在加上老者这一套滔滔不绝的寒暄，使得他早已把朝鲜人参和红红的棒状糖忘得干干净净，只剩下手足失措、怪腔怪调的回答了。	B	B-14
318		「私も……私も……ちよつと何がうはずでありましたところ……何分よろしく」と云い終って頭を少々豊から上げて見ると老人は未だに平伏している*ので*、はつと恐縮してまた頭をびたりと着けた。	319		“我也是……我也是……我本应去看您……务请关照。”主人说完了稍稍抬起头来看，老者还在那里俯身低头哩。他赶快又惶恐地把额头紧贴到铺席上。	C	C
320	苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の総会がある*ので*わざわざ静岡から出て来てね、		320	苦沙弥君！我这个伯父啊，◆因为◆红十字总会这次开会，◆才◆特地从静岡来东京的。	A	A-2	
321	現に寒月がそう云った*から*仕方ないです」		322	寒月君◆既然◆这样说，那是不会错的。	A	A-21	
321	この甲割が鉄だもの*から*、磁力の器械が狂って大騒ぎさ」		322	◆因为◆这“砍盔”是铁的，◆结果◆使得带磁力的仪器都失灵了，可热闹了。	A	A-67	
321	苦沙弥君、今日帰りにちょうどいい機会だ*から*大学を通り抜けるついでに理科へ寄って、		322	苦沙弥君！今天我们回来的时候，正好机会难得，◆就◆顺路到大理学院去了一次。	B	B-1	
321	性のいい鉄だ*から*決してそんな處れはない」		322	是品质极好的铁，放心好了，是决不会发生那种事儿的。	C	C	
321	「兜を割る*ので*、——敵の目がくらむ所を撃ちとったものでがす。		321	它是用来砍盔的，当敌人头晕目眩的时候，可以用它来砍死敌人。	C	C	
322	昔はそれと違って侍は皆命懸けの商賈だ*から*、いざとう時に狼狽せぬように心の修業を致したもので、		322	过去不是这样，武士们从事豁出性命的职业，◆所以◆要进行心的修炼，以便生死关头毫不慌张。	A	A-36	
323	客があっても取次に出ないくらい心を置き去りにしているんだ*から*大丈夫ですよ」		323	门外来了客人，都不到门口去看看，已经做到“放心”的地步了。◆所以◆准没有问题。	A	A-36	
323	「そう、粗忽だ*から*修業をせんといかないと云うのよ、		323	像是有句“忙中自有闲”的成语，◆所以◆我说你不修养，不锻炼不行。	A	A-36	
323	伯父さんは自分が楽なからだだもんだ*から*、人も遊んでると思っていらっしゃるんでしょ」		323	伯父您是闲人，◆所以◆认为别人也都闲得无事可干吧。	A	A-36	
324	今日はこれからすい原へ行く約束がある*から*、わしはこれでお免を蒙ろう」		324	今天我和齋原先生有约，我◆就◆告辞了。	B	B-1	
325	「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は剣呑だ*から*念を推して見る。		326	你听过独仙所讲的理论吗？	C	C	

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
325		今主人が鹿爪らしく述べ立てている議論は全くこの八木独仙君の受売なのである*から*、知らんと思った迷亭がこの先生の名を聞不容髪の際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの仮鼻を挫いた訳になる。	326		现在主人煞有介事地发表的一通见解，完全是从独仙君那里贩卖来的，他原以为不知就里的迷亭，突然间提到这老兄的名字，也正是在暗中对主人的鹦鹉学舌给了当头一棒。	C	C
326	「まあそんな量負がある*から*独仙もあれで立ち行くんだね。」		326	唉，正是有人吹捧他，◆所以◆独仙的那一套才行得通。		A	A-36
326	それから仕方がない*から*台所へ行つて紙片へ飯粒を貼つてごまかしてやったあね。」		327	后来，实在无法，我◆只好◆到厨房去，住纸片上抹几个饭粒，把他糊弄过去了。		B	B-9
326	いつまで立つても同じ事を繰り返してやめない*から*、僕が君もう寝ようじゃないかと云うと、		327	他总是喋喋不休地重复他的调调。我说：‘得了，咱们该睡觉了。’		C	C
326	仕方がない*から*君は眠くなくなろうけれども、僕の方は大変眠い*から*、どうか寝てくれたまえ		327	不得已，我说：‘你可能不困，不过我困得不得了，还是请你睡吧。’		C	C
326	「真理はそう変るものじゃない*から*、変らないところがたのもしいかも知れない。」		326	真理不是那么容易变的嘛。它之不变，也许更令人信服。		C	C
326	仕方がないから君は眠くなくなろうけれども、僕の方は大変眠い*から*、どうか寝てくれたまえ		327	不得已，我说：‘你可能不困，不过我困得不得了，还是请你睡吧。’		C	C
326	「これは舶来の膏薬で、近来独逸の名医が発明した*ので*、印度人などの毒蛇に噛まれた時に用いると即効があるんだ*から*、これさえ貼っておけば大丈夫だと云ってね。」		327	我说，这是进口的膏药，是最近德国医生发明的，印度人被毒蛇咬伤，一贴这种膏药，会立见奇效，你只要贴上，准保不会发生问题。		C	C
326	「これは舶来の膏薬で、近来独逸の名医が発明した*ので*、印度人などの毒蛇に噛まれた時に用いると即効がある*から*、これさえ貼っておけば大丈夫だと云ってね。」		327	我说，这是进口的膏药，是最近德国医生发明的，印度人被毒蛇咬伤，一贴这种膏药，会立见奇效，你只要贴上，准保不会发生问题。		C	C
327	「実はその時大に感心してしまった*から*、僕も大に奮発して修養をやろうと思つてるところなんだ。」		327	说实在的，我很佩服他的说法，◆所以◆我现在也正在准备加把劲修养。		A	A-36
327	「……すると独仙君はああ云う好人物だ*から*、全くだと思つて安心してぐうぐう寝てしまったのさ。」		327	独仙君真是个好好人，他信以为真，终于呼呼地睡着了呗。		C	C
327	一体君は人の言う事を何でもかでも正直に受ける*から*いけなない。		328	说起来你这个人的毛病是不管别人说什么立刻当真。		C	C
328	それに先生時々せき込むと間違えて電光影裏を逆さまに春風影裏に電光をきくと云う*から*面白い。		329	而且这位老兄时常一急起来就颠三倒四，把‘电光影里的新春风’说成‘春风影里斩电光’，多有趣！		C	C
328	ところが和尚泰然として平気だと云う*から*、よく聞き合せて見るとから豊なんだね。」		329	据说那个老和尚却泰然不为所动，等我仔细一询问，原来他是个丝毫也听不见声音的聋子。		C	C
328	ややともすると人を誘い出す*から*悪い。		329	糟糕的是，他动不动就来劝人。		C	C
328	あれが十年前からの御箱なんだ*から*おかしいよ。」		328	那是他从十年前以前就用来吓唬人的，真可笑！		C	C
329	もともと汽車の方で留つてくれた*から*一命だけはとりめたが、		329	当然喽，◆由于◆火车急刹车，他总算拣了一条命。		A	A-15
329	死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎になった原因は僧堂で麦飯や万年漬を食つたせいだ*から*、つまるところは間接に独仙が殺したようなものさ。」		329	死因虽然是腹膜炎，但是造成他得了腹膜炎的原因，却是◆因为◆他在僧堂中每天吃的都是大妻饭和老咸菜，◆所以◆归根到底等于独仙间接害了他。		A	A-7
330	あの食意地と禪功主のわる意地が併発したのだ*から*助からない。		330	他的那张馋嘴和禅和尚的怪癖一起发作，◆当然◆受不了。		B	B-12
330	それで何でも世人が迷つてる*から*ぜひ救つてやりたいと云うので		331	他说世人都陷进迷途，一定要把世人拯救出来，		C	C
331	毎回必ず食物の事がかいてある*から*奇妙だ。		331	每次信里总要提到一些吃的，你说怪不怪？		C	C
332		主人の尻の重いに反して迷亭はまたすこぶる気軽な男である*から*、御三の取次に出るのも待たず、通れと云いながら隔ての中の間を二た足ばかりに飛び越えて玄關に躍り出した。	332		主人是轻易不肯站起来的，相反，迷亭却是个喜爱活动的人，他不等厨娘到门口去接待客人就嘴里说着“请进”，便三步并作两步跑到门口去了。	C	C
332		最後に狂人の作にこれほど感服する以上は自分も多少神経に異状がありはせぬかとの疑念もある*ので*、腹腹と、慚愧と、心配の合併した状態で何だか落ち付かない顔付をして控えている	332		最后，他不能不怀疑自己既然对一个疯子的作品如此感铭，那么是不是自己的神经也多少有些异常呢。◆由于◆这种心里状态，又是生气，又是惭愧，又是担心自己的神经状态，这些交混在一起，使他坐在那里显出一种神不守舍的	A	A-15
333		もともと手錠をはめているのだ*から*、出そうと云つても出る気遣はない。	333		◆因为◆他戴着手铐呢，◆就◆是想伸出手来也不可能办到。	A	A-4
333		人のうちへ這入つた以上は書生同様取次を務める*から*はなはだ便利である。	332		但是他一旦进来，便像“书生”一般去接待客人，倒是很顶用的。	C	C
333		泥棒の方が虎藏君より男振りがいい*ので*、こっちが刑事だと早合点をしたのだらう。	333		这大概是◆因为◆窃贼要比那位刑警模样儿长得帅得多，◆所以◆主人立即把他错认成是刑警	A	A-7
334	それでね、下げ渡したら請書が入る*から*、印形を忘れずに持つておいでなさい。		334	还有嘛，在归还失主时，需要写份认领证，请不要忘了带图章。		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
334		手が出せないので、門をしめる事が出来ない*から*開け放しのまま行ってしまった。	334		由于他胳膊拿不出来,不可能把门带上,只好开着门走了。	B	B-9
334		主人のおやじはその昔場末の名主であった*から*、上の者にびよこびよこ頭を下げて暮した習慣が、因果となつてかように子に酬ったのかも知れない。	333		主人的父亲在过去是小街道上的一名里正,一辈子对上边磕头如捣蒜。这一习惯也作为因果,传到了他儿子的身上。	C	C
334		手が出せない*ので*、門をしめる事が出来ないから開け放しのまま行ってしまった。	334		◆由于◆他胳膊拿不出来,不可能把门带上,只好开着门走了。	A	A-15
335	「刑事だ*から*あんななりをするんじゃないか」		335	◆正因为◆是刑警,◆才◆穿那身衣服哩。		A	A-48
335	君は巡査だけに鄭寧なんだ*から*困る」		334	糟糕的是你只知道对刑警讲礼帽啊。		C	C
335	「刑事だ*から*そのくらいの事はあるかも知れんさ」		336	刑警也可能采取那种态度嘛。		C	C
336	「行くとも、九時までに来いと云う*から*、八時から出て行く」		336	当然去,让我九点前就到的嘛,我八点◆就◆出门。		B	B-1
338	非凡は気狂の異名である*から*、まずこれも同類にしておいて構わない。		339	非凡就是疯子的别名,◆所以◆也可以将他归入疯子一类。		A	A-36
338	「いいとも僕の学校は月給だ*から*、差し引かれる気遣はない、大丈夫だ」		336	当然没关系,我们学校是按月计工资,用不着扣钱,没关系。		C	C
339	気狂を標準にして自分をそっちへ引きつけて解釈する*から*こんな結論が出るのである。		338	是以疯子为基准,把自己往上硬凑,加以解释的,◆所以◆才得出这样的结论。		A	A-36
341	その中で多少理窟がわかって、分別のある奴はかえって邪魔になる*から*、瘋癲院というものを作って、ここへ押し込めて出られないようにするのはないかしらん。		339	很可能在其中有多少懂点道理,明辨是非的人,反而会变得碍眼,◆于是◆才造了疯人院,把他圈到里边去让他再也无法出来的吧。		A	A-38
341		現在連れ添う細君ですら、あまり珍重しておらんようだ*から*、その他は推して知るべしと云つても大した間違はなからう。	342		从眼前来说,就连和他白头偕老的妻子,似乎也不太尊重他,如果说其他人可想而知,这个说法是不会有的。	C	C
342		一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところでない*から*、知らん顔をしていれば差し支えない様なもの、	343		说起来,打扫的目的是在于运动呢还是在于游戏,◆由于◆我不担负打扫的任务,与我无关,◆所以◆我只要不闻不问就行了。	A	A-18
342		何が無意義であるかと云うと、この細君は単に掃除のために掃除をしている*から*である。	343		为什么说它毫无意义呢?◆因为◆这位主人的妻子只是为打扫而打扫。	A	A-1
342		本人において存外な考え違をして、全く年廻りのせいで細君に好かれぬのだなどと理窟をつけていると、迷の種である*から*、自覚の一助にもなるうかと親切心からちよつと申し添えるまでである。	342		主人却完全想歪了,硬是找个理由,认为妻子不喜欢自己完全是由于赶上流年的缘故,他的这种想法成了他烦恼的根源。我出于热情心,为了帮助他自觉,才顺便向您讲出来的。	C	C
342		告朔のき羊と云う故事もある事だ*から*、これでもやらんよりはましかも知れない。	343		曾经有个故事叫“告朔饗羊”嘛,这说明搞点打扫总比不打扫好,	C	C
343		もう飯も汁も出来ているのだ*から*食わせてもよさそうなものだと思った。	344		我想饭和汤◆既然◆都已做好,◆就◆满可以给我吃嘛。	A	A-22
343		吾輩は主人と違って、元来が早起の方だ*から*、この時すでに空腹になって参った。	343		和主人不同,我总要早起,此时我已经饿得受不了。	C	C
343		生れついてのお多角だ*から*人情に疎いのはとうから承知の上だが、	344		她生来就是犷悍脾气,不懂人情,这点我是早已领教过的,	C	C
343		こんな時に遠慮するのはつまらない話だ、よしんば自分の望通りにならなかったって元々で損は行かないのだ*から*、思い切って朝飯の催促をしてやろう。	344		在这种时候,客气是毫无意义的,即使不能如愿以偿,反正也没什么亏可吃,不如我干脆催一下我的早饭。	C	C
344		夜中なぞでも、いくらこっちが用がある*から*開けてくれろと云つても決して開けてくれた事がない。	344		在深夜里,不管我怎样要撒尿,请她给我开门,她从来没有给我开过。	C	C
344		そこが、ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに恋のふみと云うくらいだ*から*、たいいてい事ならやる気になる。	345		这就和平常所说的“挨了饿才想到祈神”、“人贫则志短”、“一见人家姑娘就想写情书”一样,遇上这种情况,还是要向她求一求的。	C	C
344		仕方がない*から*悄然と茶の間の方へ引きかえそうとして	345		出于无奈,当我悄然地想要回到起居间、	C	C
345	「坊やちゃん、元禄が濡れる*から*御よしなさい、ね」		346	小东西,别扯啦,把元禄都弄湿了。		C	C
345		地震がゆるたひにおもちろいわと云う子だ*から*このくらいの事はあつても驚ろくに足らん。	345		这小东西每次地震都要嚷嚷“有缺(趣)哇,有缺(趣)哇”,◆所以◆干这种事也就不足为怪了。	A	A-36
345		さすがに長女は長女だけに、姉をもつて自ら任じている*から*、うがいた茶碗をからからかんと抛出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾をとりにかかると。	345		那个最大的女孩毕竟不愧是最大的,以姐姐自居,看到这种情况,◆便◆丢下漱口杯,说道:“小东西,那是抹布呀。”说着便去夺抹布。	B	B-2
345		顔を洗うと云つたところで、上の二人が幼稚園の生徒で、三番目は姉の尻についてさへ行かれないくらい小さいのだ*から*、正式に顔が洗えて、器用に御化粧が出来るはずがない。	345		虽说洗脸,上边两个较大的,是刚上幼儿园的女孩,第三个很小,小到跟在姐姐们的后边都走不好路,◆当然◆她们不可能一本正经地洗脸,更不会正正经经地使用化妆品了。	B	B-12

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
345		坊やちゃんもなかなか自信家だ*から*容易に姉の云う事なんか聞きそうにしない。	345		小东西也是个十足的自信家, 不想听姐姐的话。	C	C
345		雑巾はこの時姉の手と、坊やちゃんの手で左右に引っ張られる*から*、水を含んだ真中からばたばた雫が垂れて、容赦なく坊やの足にかかる、足だけなら我慢するが膝のあたりがしたたか濡れる。	346		抹布现在在姐姐和小东西两人的手里扯来扯去, 中间饱含着的水, 便咝咝咝的全滴落到小东西的脚上, 滴到脚上还不算, 连膝盖上都弄湿了。	C	C
345		元禄で思い出した*から*ついでに喋舌ってしまうが、	346		提到“元禄”, 我顺便说上几句。	C	C
346		第一に突っ込んだ指をもって鼻の頭をキューと撫でた*から*、堅に一本白い筋が通って、鼻のありかがいささか分明になってきた。	347		首先, 她用伸进瓶里的手指, 狠狠地往自己的鼻子上抹, ◆便◆立刻出现了一条竖白道儿, 使鼻子的位置, 显得格外分明起来。	B	B-2
346		或る時などは「わたしゃ薬店の子じゃないわ」と云う*から*、よくよく聞き糺して見ると裏店と薬店を混同していたりする。	346		有一次, 她还说过:“我不是‘薬店’里的孩子呀”, 经过仔细一问, 才知道她是把“里店”和“薬店”弄湿了。	C	C
346		元禄が冷たくは大変だ*から*、御三が台所から飛び出して来て、雑巾を取上げて着物を拭いてやる。	347		元禄又湿又凉, 如何得了, 厨娘啊三赶快从厨房跑过来, 拿掉小东西手里的抹布, 给她擦拭衣服。	C	C
346		次に塗りつけた指を転じて頬の上を摩擦した*から*、そこへもってきて、これまた白いかたまりが出来上った。	347		然后又回过手把蘸有白粉的手指在两颊上捺来捺去, 这样一来, 立刻在两颊上出现了白乎乎的一大块。	C	C
347		覚めている*から*、細君の襲撃にそなうため、あらかじめ夜具の中に首もろとも立て籠ったのである。	347		◆因为◆是醒着, 为防止妻子的袭击, 才预先把头 and 身子一起龟缩在被子里。	A	A-1
347		しかし第一回の声は敷居の上で、少くとも一間の間隔があった*から*、まず安心と腹のうちで思っていると、	347		而且妻子第一次来唤他时的声音是从门口传过来的, 至少还相隔六尺远, ◆所以◆他觉得可以放心。	A	A-36
347		のみならず第二の「まだなんですか、あなた」が距離においても音量においても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなかまで聞えた*から*、こいつは駄目だと覚悟をして、小さな声でうんと返事をした。	347		这还罢了, “你该起来了”这第二声的声音无论从距离上说, 还是从音量上说, 他在被子里都感觉到比上次要加倍的增大。他知道在这样不行了, 只得“嗯”地答应了一声。	C	C
348		妻君はいつでもこの手を食って、起きるかと思つて安心していると、また寝込まれつけている*から*、油断は出来ないと「さあ起きなさい」とせめ立てる。	349		主人的妻子知道决不能上主人这个当, 稍一放心, 他又会睡着, ◆于是◆又催他说:“喂! 起来吧。”	A	A-38
349		ただいま関係がない*から*、だんだん成し崩しに紹介致す事にする。	349		这与当前没什么关系, ◆所以◆, 以后再我一点一点地介绍给您吧。	A	A-36
349		昨日は鏡の手前もある事だ*から*、おとなしく独乙皇帝陛下の真似をして整列したのであるが、	349		昨天是◆因为◆面对着镜子, ◆所以◆这些胡子学着德皇陛下德样子, 老老实实地排列在那里。	A	A-7
351		下の方の戸棚は、布団の裾とすれすれの距離にある*から*、起き直った主人が眼をあきさえすれば、天然自然ここに視線がむくように出来ている。	350		下层的壁橱和被褥底下紧挨着, 只要主人一坐起来睁眼一看, 他的视线就会自然而然对准这里。	C	C
351		探偵と云うものには高等な教育を受けたものがない*から*事実を挙げるためには何でもする。	351		密探这种人, 都没受过高等教育, 为了获得事实, 什么都干得出来。	C	C
352		伊藤博文でさえ逆か立ちをするくらいだ*から*、大分県が宙返りをするのは当然である。	352		连伊藤博文都倒立着, 大分县翻个筋斗也是理所当然的喽。	C	C
353		この代物は櫛か桜か桐か元来不明瞭な上に、ほとんど布巾をかけた事がないのだ*から*陰気で引き立たざる事夥しい。	352		但主人这件怪里怪气的玩意儿, 是橡木做的还是櫻木做的, 或者是桐木做的呢, 不仅身份证明, 而且几乎从来未用抹布揩拭过, ◆因此◆看去, 给人一种黑黢黢的。	A	A-37
353		坊ばは当年とって三歳である*から*、細君が気を利かして、食事のときには、三歳然たる小形の箸と茶碗をあてがうのだが、坊ばは決して承知しない。	354		这“小不点儿”今年三岁, 主人的妻子想了个妙着, 特地给她准备了一套适合三岁小孩用的小筷子和小饭碗, 但“小不点”却不服气, 她一定要抢夺姐姐们的筷子和饭碗, 硬要使用她用起来不方便的。	C	C
354		使いこなせない者をむやみに使おうとするのだ*から*勢暴威を逞しくせざるを得ない。	354		她硬使用使用不好的东西, ◆所以◆就不得不耍威风。	A	A-36
354		その因って来るところはかくのごとく深いのだ*から*、決して教育や薫陶で癒せる者ではないと、早くあきらめてしまおうがいい。	354		其由来既如此而且深, 决不是教育啦、熏陶啦所能改正过来的, 所以还是别做这种虚妄的指望为妙。	C	C
354		急に襲撃を受けた*ので*三十度ばかり傾いた。	354		受到了这突然的袭击, 立刻倾斜了三十度。	C	C
355		もともと小さ過ぎるのだ*から*、一杯にもった積りでも、あんたとあけると三口ほどで食べてしまう。	355		但◆因为◆这东西太小, 尽管她已经认为盛得满碗, 但狠狠地往嘴里一送, 也不过三口两口就吃光了。	A	A-1
356		坊ばは固より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだ*から*、早速箸を抛り出して、手攫みにしてむしゃむしゃ食ってしまった。	356		“小不点”很早就喜欢吃白薯了, 当地最喜欢的白薯突然出现在眼前时, 她立刻丢下筷子, 用手抓起来, 全塞到嘴里吃个精光。	C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
376	「いらないと云う*から*選せと云うのに苛い事があるものか」		374	明明你说用不着,◆所以◆我才叫你还回来,有哪点过份啊。		A	A-36
376	「お前などは百も二百も生きる気だ*から*、そんな呑のん気な事を云うのだが」		374	像你这样总以为能活上一百岁二百岁,◆当然◆可以随便乱说,		B	B-12
376	「そんなら選すがいい。ちようどとん子が欲しがってる*から*、あれをこっちへ廻してやろう。今日持って来たか」		374	既然不想要,还回来好啦,正好俊子想要一把,◆就◆给她吧。今天带来了吗?		B	B-1
377	「驚ろいたな。没分曉で強情なんだ*から*仕方ない。」		375	真叫人吃惊,不讲道理,又顽固,真拿你没办法。		C	C
377	「よくってよ、どうせ無教育なんです*から*、何とでもおっしやいい。」		375	没关系,反正我没受教育,你愿意怎么说就怎么说吧。		C	C
378		平生は大方の人が大方の人である*から*、見ても聞いても張合のないくらい平凡である。	376		在平时,平庸的人不管到何时也还是平庸的,◆所以◆我所能见到和听到的,无非是一些平庸的人和平庸的事,毫无活力可言。	A	A-36
378		幸にして主人のように吾輩の毛をややともすると逆さに撫でたがる旋毛曲りの特家がおった*から*、かかる狂言も拝見が出来たのであろう。	376		幸亏有主人这种喜欢摩挲我们猫儿皮毛的,特别执拗的怪人,◆才◆使得得以拜见这出好戏。	B	B-6
379		青坊主に刈ってさえ、ああ大きく見えるのだ*から*、主人の目ように長く延ばしたら定めし人目を惹く事だろう。	377		他的头发剪得那么短,头还显得如此之大,如果像主人那样也留个长长的分头,那就更加惹人注目啦。	C	C
379		とこをを生れ得て恭謙の君子、盛徳の長者であるかのごとく構えるのだ*から*、当人の苦しいにかかわらず傍から見ると大分おかしいのである。	377		但他现在却装得好像谦君子或盛德长者一般,尽管受罪得很,但在旁人看来十分滑稽可笑。	C	C
380		塵積って山をなすと云う*から*、微々たる一生徒も多勢が聚合すると侮るべからざる団体となつて、排斥運動やストライキをしでかすかも知れない。	377		常言说:“积尘则成山”,微不足道的一些学生一旦成群结伙,就会成为不可侮的团体,也许会搞出排斥运动或罢课来的。	C	C
380		実を云うと、正式に坐った事は祖父さんの法事の時のほかに生れてから減多にない*ので*、先つきからすでにしびれが切れかかって少々足の先は困難を訴えているのである。	378		老实说,他正式坐在坐墊上去的这种事儿,除了为他祖父举办丧事的时间以外,还从来没有过呢。◆所以◆,跪坐得发麻的两腿已经在诉苦。	A	A-36
381		実はこの大頭は入学の当時から、主人の眼についているんだ*から*、決して忘れるどころではない。	379		其实,这个大头从入学那天起就引起了主人的注意,◆所以◆是决不会忘记的。	A	A-36
381		主人一人に対してすら痛み入っている上へ、妙齢の女性が学校で覚え立ての小笠原流で、乙に気取った手つきをして茶碗を突きつけたのだ*から*、坊主は大に苦悶の体に見える。	378		但如今主人对坐就已经很难受了,又遇上这么一个妙龄女郎用她在学校里新学来的小笠原流,摆出一种特别的手势将茶碗端给他,◆使得◆这位光头老兄更加如芒刺在背,坐立不安。	B	B-14
381		ことに先刻の無念にはらはらと流した一滴の紅涙のあとだ*から*、このにやにやがさらに目立って見えた。	379		尤其这是雪江姑娘刚才还因不痛快而流过一滴红泪之后,她这么嘻嘻一笑就更惹人注目了。	C	C
382		元来不人望な主人の事だ*から*、学校の生徒などは正月だろうが暮だろうがほとんど寄りついた事がない。	380		本来主人在校的声望是不怎么好的,◆所以◆学校里的学生,无论是过年还是过节,几乎没有有人登门过。	A	A-36
382		仕方がない*から*主人からとうとう表向に聞き出した。	380		迫不得已主人◆只好◆从正面问他:	B	B-9
383	「何がって、はなはだ困るもんです*から*、来たんです」		381	什么事?这事非常不好收场,◆所以◆我才来的。		A	A-36
383		先方は依然として俯向になつてゐる*から*、何事とも鑑定が出来ない。	381		对方仍然低垂着头,主人无法判断到底是怎么回事。	C	C
385	「あすこの娘がハイカラで生意気だ*から*艶書を送ったんです」		382	那家的女儿专赶时髦,又自高自大,◆所以◆才给她送情书的。		A	A-36
386	「ただみんながあいつは生意気で威張ってるて云う*から*、からかってやったんです」		383	只是大家那家伙太傲慢啦,◆所以◆就捉弄了她。		A	A-36
386	「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、それに母さんが継母です*から*、もし退校にでもなろうもんなら、僕あ困っちゃうんです」		383	老师,我家老爷子是个火爆性子,加上又是个继母,如果如果受到退学的处分我就糟啦。		C	C
387		吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せをして、その鉢合せが波動を乙なところに伝える*から*ではない。	384		当此之际,我◆之所以◆对武右衛門君、主人、主人的妻子以及雪江姑娘感到很有意思,并不只是◆因为◆外部事件发生冲突,这种冲突所产生的震动传到了奇妙的地方。	A	A-66
387		その時は吾輩もこんなはずらを書くのは気の毒だ*から*すぶさまやめてしまつつもりである。	384		到了那时,我◆就◆会立刻停下笔来,如果在写这类笑话就会感到过意不去了。	B	B-1
388		拙だ*から*珍重されない。	385		◆由于◆他笨拙,◆所以◆不被人重视,	A	A-18
388		吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せをして、その鉢合せが波動を乙なところに伝えるからではない。実はその鉢合せの反響が人間の心に個々別々の音色を起す*から*である。	384		当此之际,我◆之所以◆对武右衛門君、主人、主人的妻子以及雪江姑娘感到很有意思,并不只是因为外部事件发生冲突,这种冲突所产生的震动传到了奇妙的地方。而◆是因为◆这种冲突的反映在人们的心中,唤起了各种不同的心态。	A	A-44

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
389		珍重されない*から*、内部の冷淡を存外隠すところもなく発表している。	385		◆由于◆不被重视, ◆所以◆他可以將内心的冷淡毫不隱瞞地发表出来。	A	A-18
389		人が失礼をした時に怒るのを気が小さいと先方では名づけるそうだから*、そう云われるのがいやならおとなしくするがよろしい。	386		对方会说他一遇不礼貌就生气, 说明他气量狭小, 如果不愿意别人这样说, 那就最好老师一些。	C	C
391		別に分別の出所もない*から*監督と名のつく先生のところへ出向いたら、どうか助けてくれるだろうと思って、いやな人の家へ大きな頭を下げにまかり越したのである。	386		他◆由于◆苦悶之极, 又没有人替他想出好办法, ◆于是◆想到假如到班主任老师那里去, 也许会得到帮助。这样, 他来到自己平素讨厌的老师家里, 低头进行恳求。	A	A-68
392		例のごとく鼠色の、尻につぎの中つたずばんを穿いているが、これは時代のため、もしくは尻の重いために破れたのではない、本人の弁解によると近頃自転車の稽古を始めて局部に比較的多くの摩擦を与える*から*である。	388		他穿着经常穿的那条灰色的裤子, 臀部打着补丁。据本人辩解, 这不是由于时间穿得太久, 也不是因为臀部的重量磨破的, ◆是因为◆最近他开始练习骑自行车, 局部过分摩擦的缘故。	A	A-69
395	あの鳴き声は昼でも理科大学へ聞えるくらいなんです*から*、深夜闇寂として、四望人なく、鬼気肌に逼って、魍魎鼻を衝く際に……」		389	那种吼叫声, 连白天在大学的理学院中都能听到, 更何况深夜闐然, 四顾无人, 鬼气逼人, 魍魎刺鼻之际, 那就更……		C	C
396	「貰うかも知れない*から*構わないんです。		393	◆正因为◆说不定娶不娶, ◆所以◆没有关系。		A	A-46
396	「全く頭が大き過ぎます*から*そんな余計な質問をするのでしよう。		391	的确是脑壳太大啦, ◆所以◆才提到这种无聊的问题吧。		A	A-36
396	「それがさ。冗談にしたんだよ。あの娘がハイカラで生意気だから*、からかってやるうって、三人が共同して……」		392	他干的这事儿嘛, 是为了开玩笑。他说那个姑娘太时髦了, 又自大, ◆所以◆要捉弄他一下。三个人合伙就……		A	A-36
397	「それならそれでいいとして、当人があとになって、急に良心に責められて、恐ろしくなったものだ*から*、大に恐縮して僕のうちへ相談に来たんだ」		393	若是那样还好, 刚才来的这个学生, 事后突然受良心的责备, 越想越害怕, ◆所以◆才低声下气地到我这儿商量来了。		A	A-36
398	「何、これが時代思潮です、先生はあまり昔風だ*から*、何でもむずかしく解釈なさるんです」		393	不, 这就是时代思潮嘛。先生您过于刻板啦, 什么事都看得很严重。		C	C
398	実は二三日中にちょっと帰国しなければならぬ事が出来ました*から*、当分どこへも御伴は出来ませんから、今日は是非いっしょに散歩をしようと思って来たんです」		394	我还没向您说呢, 我在两三天内, 有事必须回老家去一趟, 在相当一段时间哩, 我不能陪您去散步了, 我想今天一定得陪您出去走走, 所以我才来的。		C	C
398	実は二三日中にちょっと帰国しなければならぬ事が出来ましたから、当分どこへも御伴は出来ません*から*、今日は是非いっしょに散歩をしようと思って来たんです」		394	我还没向您说呢, 我在两三天内, 有事必须回老家去一趟, 在相当一段时间哩, 我不能陪您去散步了, 我想今天一定得陪您出去走走, 所以我才来的。		C	C
399	「さあ行きましょう。今日は私が晚餐を奢りますから、——それから運動をして上野へ行くときちょうど好い制限です」としきりに促がすものだ*から*、主人もその気になって、いっしょに出掛けて行った。		394	“咱们走吧, 今天我请您吃晚饭。现在溜达到上野, 正是时候。”寒月君不断催促主人, 主人也终于露出去的意思, 两个人便一块出门而去。		C	C
400		吾輩は世間が狭い*から*碁盤と云うものは近来になって始めて拝見したのだが、	396		作为猫儿我见识不广, 棋盤这种东西是直到最近才开始拜见的。	C	C
401	「禪坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、本因坊の流儀じゃ、あるんだ*から*仕方がないさ」		397	禪和尚的棋也许没这个着法, 不过, 我这可是本因坊的棋术哩, ◆又◆有什么办法呢。		B	B-4
401		盤の広さには限りがあって、横縦の目盛りは一手ごとに埋って行くのだ*から*、いかに呑気でも、いかに禪機があっても、苦しくなるのは当り前である。	397		但棋盤的空间毕竟是有限的, 横竖的通道, 每一个子儿填满了一处, 不管他们是如何地不慌不忙、如何地富于禅机, 下到最后当然越来越难以动弹了。	C	C
403	「実は四日ばかり前に国から帰って来たのですが、いろいろ用事があって、方々馳け回っていたものです*から*、ついで上がれなかったのです」		398	这次, 我回老家去了四五天, 回来后, 为处理各种杂事, 又到处跑了一跑, ◆所以◆也没有马上来看您。		A	A-36
404	「入れる所がなかった*から*、ヴァイオリンといっしょに袋のなかへ入れて、船へ乗ったら、その晩にやられました」		400	我没有地方装, ◆就◆把它和提琴放在一个袋子里, 上船以后, 当晚就被咬啦。		B	B-1
404	「なに鼠だ*から*、どこに住んでもそそっかしいのでしよう」		400	哪里, 老鼠总是老鼠嘛, 住在哪里也不免粗心吧。		C	C
405	剣呑だ*から*夜るは寝床の中へ入れて寝ました」		400	◆为此◆我夜里把它放在被窝里才能安心睡觉。		A	A-42
405	「ヴァイオリンは大き過ぎる*から*抱いて寝る訳には行かないんですが……」		400	提琴个儿太大啦, 是无法抱着的……		C	C
406	——寒月君、君のヴァイオリンはあんまり安い*から*鼠が馬鹿にして囃るんだよ、		401	寒月君, 你的那把小提琴价钱太便宜啦, ◆所以◆老鼠瞧不起它, 咬了它一口。		A	A-36
406	人間の古物でも金田某のごときものは今だに流行しているくらいだ*から*、ヴァイオリンに至っては古いほどがいいのさ。		402	像金田这种旧货还在走俏呢, 至于提琴, 那更是越旧越好。		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
406	「勝ちたくても、負けたくても、相手が釜中の章魚同然手も足も出せないのだ*から*、僕も無聊でやむを得ずヴァイオリンの御仲間を仕るのさ」		401	不管想赢想输,反正对方早就和釜中的章鱼一样,他的手脚早就休想动弹啦。		C	C
407	「仕方がない*から*、ここへ一目入れて目にしておこう」		402	没办法,下这里一子儿做‘眼’吧。		C	C
408	「同じ芸術だ*から*詩歌の趣味のあるものはやはり音楽の趣味でも上達が早いだろうと、ひそかに恃むところがあるんだが、どうだろう」		403	我想都是属于艺术领域的嘛。我暗自相信对诗歌有兴趣的人,也许在音乐方面也会学得快些吧。你认为怎样?		C	C
409	ことに私のおった学校は田舎の田舎で麻裏草履さえないと云うくらい質朴な所でした*から*、学校の生徒でヴァイオリンなどを弾くものは勿論一人もありません……		403	尤其是我所在的学校,简直是个乡村学校,学生非常朴实,连挂上麻布里子的草鞋都没有人穿。学校里的学生自然没有一个学生会拉提琴。		C	C
409	不思議に思っ、聞いて見たら、灰吹きなどは裏の敷へ行って切つて来れば誰にでも出来る*から*、売る必要はないと澄まして答えたそう。		404	他感到奇怪,一打听,人们若无其事地告诉他说,‘烟灰筒这玩意儿,只要到后山竹林里去,谁都能砍一个来,根本不需要买嘛。’		C	C
410	一代の才人ウェルテル君がヴァイオリンを習い出した逸話を聞かなくっちゃ、先祖へ済まない*から*失敬する」		405	如果不听当时的才子维特君学拉提琴的逸话,那么就要对不住祖先的。对不起,你代劳吧。		C	C
410	「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがまた非常に頑固なので、少しでも柔弱なものがおつては、他県の生徒に外聞がわるいと云って、むやみに制裁を嚴重にしました*から*、ずいぶん厄介でした」		405	这地方已经是够要命的了,而从我家老家的同学们又非常守旧,稍微有个弱点的人,他们就说,这会在其它县来的同学面前抬不起头来,因此经常狠狠地搞制裁,真是难办极了。		C	C
410	男だ*から*あれで済むが女があれじゃさぞかし困るだろう」		405	要是男的,那没什么,可是女的也那样,真不好办嘛。		C	C
410	「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがまた非常に頑固な*ので*、少しでも柔弱なものがおつては、他県の生徒に外聞がわるいと云って、むやみに制裁を嚴重にしました*から*、ずいぶん厄介でした」		405	这地方已经是够要命的了,而从我家老家的同学们又非常守旧,稍微有个弱点的人,他们就说,这会在其它县来的同学面前抬不起头来,因此经常狠狠地搞制裁,真是难办极了。		C	C
411	夫婦の愛はその一つを代表するものだ*から*、人間は是非結婚をして、この幸福を完うしなければ天意に背く訳だと思ふんだ。		407	夫妻之爱就体现着其中之一。◆因此◆人无论如何也得结婚,以实现这种幸福,否则的话,我认为就是违背天意。		A	A-37
411	「だって一國中ことごとく黒いのだ*から*仕方がありません」		405	不过,你想,全县都是这么黑,◆又◆有什么办法。		B	B-4
412	「ともかくも我々未婚の青年は芸術の靈氣にふれて向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分からないです*から*、まず手始めにヴァイオリンでも習おうと思つて寒月君にさっきから経験譚をきいているのです」		407	不管怎么说,我们这些未婚青年,必须接触艺术的灵气,开拓出一条向上的道路,否则,就无法了解人生的意义。◆所以◆,我想先从学提琴入手,方才我正向寒月君询问学琴的经验呢。		A	A-36
412		東風君は禪宗のぜの字も知らない男だ*から*頓と感心したようすもなく	407		东风君是一个连禅宗的“禪”字都不晓得的人。◆所以◆看不出有一星半点的感动的样子。	A	A-36
413	「へえ、そうかも知れませんが、やはり芸術は人間の渴仰の極致を表わしたものだと思ひます*から*、どうしてもこれを捨てる訳には参りません」		408	嘿,也许是这样,不过,我认为艺术是表现渴仰人生最高理想的,无论如何也不应该抛弃。		C	C
413	で今話す通りの次第だ*から*僕もヴァイオリンの稽古をはじめるまでには大分苦心をしたよ金も前から用意して溜めた*から*差支えないのですが、		408	对啦,方才我已讲过一些周围的情况啦,在那样情况下,我在学提琴之前就很伤了一番脑筋。		C	C
413	「狭い土地だ*から*、買つておればすぐ見つかります」		408	钱嘛,我早已积攒了足够的,这方面也没有问题,		C	C
414	女学校の生徒は課業として毎日ヴァイオリンを稽古しなければならぬのです*から*、あるはずです。		408	就那样大的一块地域,我一买立刻就会被人发现。		C	C
415	国のものは揃つて泊りがけに温泉に行きました*から*、一人もいません。		410	女学生们上音乐课每天都得学提琴,◆所以◆有卖的。		A	A-36
415	だから店でもあまり重きをおいていない*ので*、二三挺いっしょに店頭へ吊るしておくのです。		410	同学中的同乡中们都到温泉去了,而且住在那里,一个也不在。		C	C
416	仕方がない*から*頭からもぐり込んで、眼を眠って待つて見ましたが、		409	所以店里也不太重视,只是两三把提琴一起堆在店头。		C	C
417	「先生はどうも性急だ*から*、話がしにくくて困ります」		410	无可奈何我◆又◆蒙上了头,闭上了眼。		B	B-4
417	「仕方がない*から*、床を出て障子をあげて 椽側へ出て、洗柿の甘干しを一つ取つて食いました」		411	迷亭先生,您太性急,◆使◆我无法讲下去啦,真难办啊!		B	B-5
418	どうしても日が暮れてくれないものだ*から*困るのさ」		410	我无奈◆只好◆从被子里爬出来,打开纸隔扇门,走到廊子里,把晒好的柿饼摘下一个吃了。		B	B-9
418	「そうだろう、芸術家は本来多情多恨だ*から*、泣いた事には同情するが、		413	太阳总不落山,我◆也◆没办法。		B	B-3
418	「そう日が暮れなくちゃ聞く方も困る*から*やめよう」		412	那当然。艺术家本来是多情多恨的嘛,阁下哭了我当然同情		C	C
418			413	太阳总是这样不落山,听得人也受不了,不要讲了吧。		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
418		東風君は人がいい*から*、どこまでも真面目で滑稽な挨拶をしている。	418		东风君为人老实、◆所以◆回答了这样一句又认真又可笑的话。	A	A-36
418	「ところがそう行かない*ので*、私が最後の甘干しを食べて、もうよからうと首を出して見ると、相変らず烈しい秋の日が六尺の障子へ一面にあたって……」		418	您哪里知道，还是不行。我吃完最后一个柿饼，认为这回天总可黑了，伸出头一看，仍然是火辣辣的秋天太阳照满了六尺宽的纸拉门……		C	C
418	「いよいよ夜に入った*ので*、まず安心とほっと一息ついて鞍懸村の下宿を出ました。」		418	终于捱到了天黑，我◆总算◆长长出了一口气，放下了心，于是我从住着的马鞍村动身。		C	C
418		「それは好都合だ」と独仙君が澄まして述べられた*ので*一同は思わずどっと噴き出した。	418		“这样就圆满解决了嘛。”经独仙君一本正经地这么一说，大家都哄堂大笑起来。	C	C
420	私は性来 騒々しい所が嫌です*から*、わざと便利な市内を避けて、人迹稀な寒村の百姓家にしばらく蝸牛の庵を結んでいたので……」		420	诸位知道我生来就讨厌闹哄哄的地方，◆所以◆我没有住在交通便利的市内，而是有意找这样一个个人迹稀少的寒村，在一个农民家里，暂时设下我的蜗居。		A	A-36
420	「またかかんか、君のかんかんは一度や二度で済まないんだ*から* 難渋するよ」		420	怎么又是明晃晃的？你这个‘明晃晃’不会来一两遍就完，◆又◆要没完没了啦。		B	B-4
420	「楽器のある店は金善即ち金子善兵衛方です*から*、まだなかなかです」		420	出售乐器的铺子名叫‘金善’，就是金子善兵卫开的，还离得远呢。		C	C
421	まだ買えないんです*から* 仕方ありません」		421	◆因为◆还不能买嘛，又有什么办法。		A	A-1
421	「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のかんかんです*から*、別段御心配には及びません。……」		421	不，这回的‘明晃晃’只是一遍就完，请务必放心。		C	C
422	「東風君、僕はその時こう思ったね。とうていこりや宵の口は駄目だ、と云って真夜中に来れば金善は寝てしまう*から*なお駄目だ。」		422	东风君，我那时是这样想的：‘要买，这天刚黑的时候是绝对不行的。’可话又得说回来，如果深夜再来，那么‘金善’就会关门，也不行。		C	C
422	「ただの人なら千が千でも構いませんがね、学校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持って徘徊しているんだ*から*容易に手を合せませんよ。」		422	如果只是一般无关的人，就是一千人两千人当然也没关系，可是学校里的学生挽着袖子，拿着粗大的手杖正在左右徘徊，哪能随便去买呀。		C	C
423	仕方がない*から* 相当の時間がくるまで市中を散歩する事にした。		423	我万不得已，决定在这段相当长的时间里在市内散步。		C	C
424	天に比較したのは先生の冗談だ*から* 気に掛けずに話を進行したまえ」		424	迷亭先生将你的比做狗只是开个玩笑罢了，你不用放在心上，往下讲吧。		C	C
425	夜寒の頃です*から*、さすが目貫の両替町もほとんど人通りが絶えて、向からくる下駄の音さえ淋しい心持ちです。		425	◆由于◆秋天的，白天这主要街道的钱庄街，到了这时几乎行人绝迹，就连偶尔从对面传来的木屐声，也给人一种凄凉的感觉。		A	A-15
425	みんな丈夫に念を入れて拵らえてございますと云います*から*、蝦蟇口のなかから五円札と銀貨を二十銭出して用意の大風呂敷を出してワイオリンを包みました。		425	‘嘿，没有一个有毛病的，都极结实，都是极用心造得的。’◆于是◆我从钱包里取出五元一张的纸币和一个两毛钱的银角子，我用事先准备好的一大块包袱把琴包了起来。		A	A-38
426	「根気はどこにかく、ここでやめちや仏作って魂入れずと一般です*から*、もう少し話します」		426	耐性不耐性姑且不管，如果只说到这里，那就等于造了佛像不开光一样，◆所以◆我还要讲下去。		A	A-36
426	顔は頭巾でかくしてある*から* 分る気遣はないのですけれども何だか気がせいと一刻も早く往来へ出たくて堪りません。		426	虽然我带头巾遮住了大半脸，不用担心他们会记得我是谁，不过我还是急得不得了，恨不得早点回到大街上去。		C	C
428	僕の所へは大分人が遊びにくる*から* 滅多な所へぶらさげたり、立て懸けたりするとすぐ露見してしまう。		428	有很多人常到我这里来玩，◆所以◆如果随手挂起来或立在哪里，就会马上被人看见。		A	A-36
429	ちょうど木権垣を一重隔てて南隣りは沈殿組の頭領が下宿しているんだ*から* 剣呑だね」		429	恰好的我的南邻只隔着一道木権篱笆，住着一位‘沉淀帮’的首领，◆所以◆就更加危险啦。		A	A-36
429	論より証拠音が出るんだ*から*、小督の局も全くこれでしくじったんだからね。		429	凡事空口无凭，现在的问题是要发出声来。小督入宫也完全是因为这个吃了大亏嘛。		C	C
430	まあ相宿だ*から* 呉服屋だろうが、古着屋だろうが構う事はないが		430	噢，◆既然◆住在一起，管他是开绸缎店的还是开布店的，我才不管呢。		A	A-21
430	ところが人の味淋だと思って一生懸命に飲んだものだ*から*、さあ大変、顔中真赤にはれ上ってね。		430	不过，他觉得这是别人的甜酒，便拼命地喝，◆结果◆可不得了，整个脸都变成大红萝卜啦。		A	A-65
430	「おや本を讀んでる*から* 大丈夫かと思ったら、やはり聞いてるね。」		430	啊呀，我想你正在看书，说你一下也不会有什么，谁想你还是在听着呢。		C	C
431	「衣装道具なら見せびらかすのだが、煙草だ*から* 呑みびらかすのさ」		431	如果是衣服、家具就要说成炫耀，他这是吸烟，◆所以◆就是吸烟呗。		A	A-36
431	そこで煙草を切らしたのだ*から* 御難だね。		431	这样我的香烟全吸光了可◆就◆难办啦。		B	B-1
431	「奴さん手拭をぶらさげて湯に出掛けた*から*、呑むならここだと思って一心不乱立てつづけに呑んで、ああ愉快だと思いう間もなく、障子がからりとあいたから、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」		431	那家伙拎着毛巾去洗澡，我想这回正是偷他的烟来吸的绝佳时机，于是我接二连三地吸了起来，还在想：‘真过瘾哪。’就在这个时候，纸障子哗啦地拉开了，我吃惊地回头一看，原来是香烟的主人来了。		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
432	「奴さん手拭をぶらさげて湯に出掛けたから、呑むならここだと思って一心不乱立つづけに呑んで、ああ愉快だと思ふ間もなく、障子がかりりとあいた*から*、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」		425	那家伙拎着毛巾去洗澡,我想这回正是偷他的烟来吸的绝好时机,于是我接二连三地吸了起来,还在想:‘真过瘾哪。’就在这时,纸障子哗啦地拉开了,我吃惊地回头一看,原来是香烟的主人来了。		C	C
432	ちょうどいい時です*から*聞いて下さい。		426	正好是关键的地方,您来听听吧。		C	C
433	寒月君のは、きいきいびいびい近所合壁へ聞えるのだから*大に困ってるどころだ」		427	倒是寒月君拉起提琴,吱吱嘎嘎,一墙之隔的邻居都听得见◆才◆是真糟糕呢。		B	B-6
433	「君は無絃の素琴を弾する連中だから*困らない方なんだが、		427	君是专弹无弦素琴的,不应该有什么糟糕。		C	C
434	あくる日は天長節だ*から*、朝からうちにおいて、つづらの蓋をとって見たり、かがせて見たり一日そわそわして暮らしてしまいました		427	第二天正好是天长节,从早晨起我一直呆在家里,一会儿打开葛笼的盖儿,一会儿又关上,一整天就这样心神不宁地过去了。		C	C
434		寒月君はねばけてあんな珍語を弄するのだからと鑑定した*から*、わざと相手にならないで話頭を進めた	427		寒月君想这是独仙睡糊涂了说出的胡话,◆所以◆有意不去理睬,把话头继续下去。	A	A-36
436	山のなかだ*から*、人の住んでる所は樟脳を採る小屋が一軒あるばかり、池の近辺は星でもあり心持のいい場所じゃない。		429	◆因为◆是在深山里,只有一间采取樟脑的小屋,在池子这一带,就是白天,也是个怪人的地方哩。		A	A-1
436	幸い工兵が演習のため道を切り開いてくれた*から*、登るのに骨は折れない。		429	多亏工兵们在演习时开有山道,◆所以◆向上爬还不费劲儿。		A	A-36
436	平生なら臆病な僕的事だから*、恐しくってたまらないところだけれども、		429	我本来十分胆怯,要是平时我准会怕得不得了。		C	C
436	ただヴァイオリンが弾きたいばかりで胸が一杯になってるんだ*から*妙なものさ。		429	我心中只有一个念头,那就是要拉琴,你说怪不怪?		C	C
436	こんな寒い晩に登ったのは始めてなんだ*から*、岩の上へ坐って少し落ち着くと、あたりの淋しさが次第次第に腹の底へ沁み渡る。		429	我是第一次在这冷嗖嗖的夜晚爬上来的,坐在巨岩上稍微宁静下来之后,四周凄凉的气氛一点一点地浸透我整个身心。		C	C
438	こう云う場合に人の心を乱すものはただ怖いと云う感じばかりだから*、この感じさえ引き抜くと、余るところは皎々冽々たる空靈の気だけになる。		430	在这种场合,使人不安的只是恐慌的感觉,◆所以◆只要排除这种感觉,剩下的就只有皎皎冽冽的空灵之气啦。		A	A-36
438	迷亭君は誰かサンドラ・ペロニの講釈でも聞くかと思のほか、何にも質問が出ない*ので*「サンドラ・ペロニが月下に堅琴を弾いて、以イタリア風の歌を森の中でうたつてるところは、君の庚申山へヴァイオリンをかかえて上るところと同曲にして異巧なるものだね。		432	他说着,心想总会有人要他解释一下威洛尼的故事吧,结果出乎意料,没有人向他提问,他◆只好◆自己解释下去:“桑德拉·威洛尼在月下弹着竖琴,在森林里唱着意大利式的歌,这和你挟着小提琴到庚申山上去,很有异曲同工之妙哩。		B	B-9
438	惜しい事に向うは月中の嫦娥を驚かし、君は古沼の怪狸におどろかされた*ので*、際どいところで滑稽と崇高の大差を来たした。さぞ遺憾だろう」		432	可惜的是,他弹琴惊动了月里嫦娥,而你却惊动了个池中的老狐狸,在极端紧要的关节上,出现了滑稽与崇高的巨大差异,未免太遗憾了吧。		C	C
439	「全体山の上でヴァイオリンを弾こうなんて、ハイカラをやる*から*、おどかさるんだ」		432	跑到山上去弹琴,这是赶时髦,◆所以◆才被下跑回来的。		A	A-36
441	要するに鉢合せをしないでむすむところをわざわざ鉢合せするんだ*から*余計な事さ。		434	双方◆既然◆碰不到一起,还硬要他们碰在一起,那是白费力气的。		A	A-21
441	珠ももうあきました*から*、実はよそうかと思ってるんです」		432	磨球我已经磨厌了,老实说,我想干脆不干就算了呢。		C	C
442	私の方でくれとも、貰いたいとも、先方へ申し込んだ事はありません*から*、黙ってれば沢山です。		434	对我来说,我既未说过请他把女儿嫁给我,也未说过我愿意娶她,更未向对方求过婚,我满可以一声不响。		C	C
443	あんな烏金で身代をつかった向横丁の長範なんかは業つく張りの、慾張り屋だから、*い*くつになっても失せる気遣はないぜ。		435	不过那个靠放‘乌鸭债’起家的、对面胡同里的长范,却是个黑心肠的、贪得无厌的人,到多咱也死不了哩。		C	C
444	泥棒も捕まるか、見つかるかと云う心配が念頭を離れる事がない*から*、勢自覚心が強くなるざるを得ない。		437	窃贼也总在担心自己会不会被发现,不会被抓住,◆所以◆也势必非有个强烈的自觉心不可。		A	A-36
444	寝でもおれ、覚めてもおれ、このおれに至るところにつまづわっている*から*、人間の行為言動が人工的にこせつくばかり、自分で窮屈になるばかり、世の中が苦しくなるばかり、ちょうど見合をする若い男女の心持ちで朝から晩までくさなければならぬ。		437	睡梦中想的是我,醒来想的还是我,这个我到处不离身,◆结果◆人的言行只能是小里小气,只能把自己束缚的紧紧的,只能感觉人世是痛苦的。正和青年男女相亲时的心情一样,从早到晚心神不宁。		A	A-65
444	そうしてこの自覚心なるものは文明が進むにしたがって一日一日と鋭敏になって行く*から*、しまいは一挙手一投足も自然天然とは出来ないようになる。		437	而这种自觉心,随着文明的发展,一天比一天变得敏锐,◆从而◆到了最后,连举手投足都变得不能按自然行事。		A	A-70
444	「探偵でない*から*、正直でいいと云うのだよ。		437	我是说你不是密探,你好就好在人很正直呀。		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
444	探偵は人の目を掠めて自分だけうまい事をしようと云う商売だ*から*、勢自覚心が強くならなくては出来ん。		437	密探干的不是不让人发觉,偷偷摸摸尽量给自己找便宜的勾当,自然非有强烈的自覚心不可。		C	C
445	今の人はどうしたら己れの利になるか、損になるかと寝てでも考えつづけど*から*、勢探偵泥棒と同じく自覚心が強くならざるを得ない。		437	现今的人,睡觉也好醒来也好,总在盘算怎样对自己有利,自覚心和密探、窃贼一样强烈		C	C
445	今の人は己れを忘れるなど教える*から*まるで違う。		438	现在的人教人不要忘了自己,这完全不同。		C	C
446	「喧嘩も昔しの喧嘩は暴力で圧迫するのだ*から*かえって罪はなかったが、		239	以吵架来说吧,以往是以暴力相見,压制对方的◆所以◆反而显得单纯。		A	A-36
446	近頃じゃなかなか巧妙になってる*から*なおお自覚心が増してくるんだね」		239	最近的吵架是非常巧妙的,这◆就◆更要求自覚心啦。		B	B-1
447	今の喧嘩は正にペーコンの格言通りに出来上ってる*から*不思議だ。		239	现在的吵架,恰好符合培根的格言,你说这多么奇怪。		C	C
447	「娘は——娘は見た事がない*から*何とも云えないが		240	他的女儿嘛,我没有见过,不太好说,		C	C
449	死ぬのが厭だ*から*苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よかろうと心配するのである。		442	这并不是◆因为◆怕死◆而◆犯嘀咕,而是考虑怎样死才最好。		A	A-53
449	「まあさ。議論だ*から*、だまって聞かがいい。		241	哎,你先别急,这是讨论,你先听着好啦。		C	C
449	「まあさ。議論だ*から*、だまって聞いている。		241	哎,这是讨论嘛,你老实听着怎么样。		C	C
450	ただたいいのものは智慧が足りない*から*自然のままに放擲しておくうちに、世間がいじめ殺してくれる。		442	不过一般人不够聪明,总是听其自然,置之不管,这样一来二去的结果就是被社会捉弄死了。		C	C
450	しかして己れの好むところはこれを人に施こして可なる訳だ*から*、自殺を一步展開して他殺にしてもよろしい。		443	但是,根据己之所欲可施于人的原则,将自杀推进一步,搞成他杀也未尝不可。		C	C
451	もっとも昔と違って今日は開明の時節である*から*槍、薙刀もしくは飛道具の類を用いるような卑怯な振舞をしてはなりません。		443	当然,和过去不同,现在是开明的时代,◆所以◆不可用枪或飞镖之类的东西,		A	A-36
451	「なぜって今の人間は生命が大事だ*から*警察で保護するんだが、		443	为什么呀?如今人的生命是宝贵的,◆所以◆警察才加以保护,		A	A-36
451	ことに表の窮措大珍野苦沙弥氏のごときものは生きてござるのが大分苦痛のように見受けらるる*から*、一刻も早く殺して進ぜるのが諸君の義務である。		443	尤其是像住在学校前边的那个穷措大苦沙弥那号人,他活着看上去也似乎很痛苦,诸君的义务就是尽快地将他杀掉。		C	C
451	その時分の国民は生きてるのが苦痛だ*から*、巡査が慈悲のために打ち殺してくれるのさ。		443	到那时的老百姓,活着就是痛苦,警察慈悲为怀,所以就把你揍死呗。		C	C
451	もっとも少し気の利いたものは大概自殺してしまう*から*、巡査に打殺されるような奴はよくよく意気地なしか、自殺の能力のない白痴もしくは不具者に限るのさ。		443	当然,稍微机灵一些的人大都已经自杀,警察揍死的那些家伙,不外是磨磨蹭蹭的怕死鬼和那些没有自杀能力的白痴及残废者呗。		C	C
452	真理に徹底しないものは、とかく眼前の現象世界に束縛せられて泡沫の夢幻を永久の事実と認定したがるものだ*から*、少し飛び離れた事を云うと、すぐ冗談にしてしまう」		444	不能彻底识别真理的人,很容易被眼前的各种现象束缚住,动不动就将泡沫一般的梦幻当成永久的真实,◆所以◆如果有人稍微讲点离奇的话,立刻当成玩笑。		A	A-36
452	すると女などは羨望なものだ*から*、そら鐘が鳴ったと云うので、めいめい河岸へあつまって半褌袴、半股引の服装でざぶりがぶり水の中へ飛び込んだ。		445	女人们是见识短浅的,她们一听到钟声响了,便都赶到河边,穿着短内衣或裤衩,噢噢通通都跳进水里,		C	C
453	上等品だ*から*みんな高価にきまってる。		445	◆因为◆◆是高级品,价钱当然都很贵。		A	A-1
453	「それでさ、人間はただ眼前の習慣に迷わされて、根本の原理を忘れるものだ*から*気を付けなないと駄目だと云う事さ」		445	后来嘛,后来得出个教训:人只是受眼前习惯的摆布,就会忘掉根本原理,◆所以◆必须多加小心呗。		A	A-36
453	六百元では手元に持ち合せがない*から*、残念だがまあ見合せよう」		445	不过手头拿不出六百元,◆所以◆◆虽然觉得遗憾,还是算了吧。		A	A-36
455	「そら、そう云う人が現にここにいる*から*たしかなものだ。		447	眼前不就有一位吗?这确实是真的。		C	C
455	「たとえばですね、今苦沙弥君が迷亭君が、君が無断で結婚したのが穏当でない*から*、金田とか云う人に謝罪しろと忠告したら君どうです。		447	比如说吧,刚才苦沙弥君与迷亭君认为你未告诉人就结婚,不够妥当。假如他们劝你要向金田那个人道歉,你会怎样呢?		C	C
456	まあわからずやの張本、高金からすがねの長範先生くらいのものだ*から*、黙って御手際を拝見していればいいが		448	这号人可以说是没分晓的张本人,是放阎王帐的长范先生。◆所以◆对于这号人只要静静地观察他们施展的手段就够了。		A	A-36
456	弱くなるのは誰もありがたくない*から*、人から一毫も犯されまいと、強い点をあくまで固守すると同時に、せめて半毛でも人を侵してやろうと、弱いところは無理にも抜けたくなる。		449	个人变得强大,当然会使人高兴,但变得软弱,谁也不甘心情愿,◆所以◆一方面固守着不许别人侵犯我一根毫毛,同时又想哪怕能侵犯别人的半根毫毛也好,硬是要加强自己原本软弱的地方。		A	A-36
456	だから今の世は昔しと違って、御上の御威光だ*から*出来ないのだと云う新現象のあらわれる時代です、		448	所以现在与过去不同,是个◆正因为◆是上边的命令,◆所以◆难于办到的新现象的时代。		A	A-46

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
456	個人が平等に強くなった*から*、個人が平等に弱くなった訳になる。		448	个人都对等地强大起来,个人◆也◆都对等地变得软弱。		B	B-4
457	苦しい*から*色々な方法で個人と個人との間に余裕を求め		449	◆由于◆太痛苦,◆所以◆用各种方法寻找个人与个人之间的余裕。		A	A-18
457	主張すべき個性もなく、あっても主張しない*から*、あれで済むのだが		449	没有可主张的个性,纵然也没有人去主张,◆所以◆就那样在一起活下去。		A	A-36
457	文明の民はたとい親子の間でもお互に我儘を張れるだけ張らなければ損になる*から*勢い両者の安全を保持するためには別居しなければならない		449	但是文明人可不是这样,即便是在父母与子女之间,彼此也要尽量使对方听从自己,否则要吃亏,◆所以◆为了维持双方的安全,势必要分居。		A	A-36
457	欧洲は文明が進んでいる*から*日本より早くこの制度が行われている。		449	欧洲的文明是走在前面的,◆所以◆比起日本来,早就实行这一制度。		A	A-36
457	親類はとくに離れ、親子今日に離れて、やっとな我儘しているようなものの個性の発展と、発展につれてこれに対する尊敬の念は無制限にのびて行く*から*、まだ離れなくては楽が出来ない。		449	亲属早已疏远,父母和子女正在分开。勉强被抑制着的个性的发展和伴随个性发展对它产生的尊重之念将要无限制地增加下去,◆所以◆如果还不分开,便会感到不自在。		A	A-36
457	しかし親子兄弟の離れたる今日、もう離れるものはない訳だ*から*、最後の方案として夫婦が分れる事になる。		450	但是,在父子兄弟之间已经分开的今天,已经没有可分开的人啦,◆于是◆作出最后的方案,自然是夫妻分开。		A	A-38
457	今の人の考ではいっしょにいる*から*夫婦だと思ってる。それが大きき了見違いさ。		450	现在人的想法,总认为在一起生活◆才◆是夫妻,这是极端错误的想法嘛。		B	B-6
458	水と油が双方から働きかけるのだ*から*家のなかは大地震のように上がったり下がったりする。		450	油和水两方总是要支配对方的,◆于是◆家庭中便像闹大地震一样,不断颤动个没完。		A	A-38
458	その妻が女学校で行灯袴を穿いて牢乎たる個性を鍛え上げて、束髪姿で乗り込んでくるんだ*から*、とても夫の思う通りになる訳がない。		450	现在的妻子,是在女学校里穿着灯笼裤锻炼其牢固的个性,梳着西洋式的发髻嫁过来的,◆当然◆不会按照丈夫的希望行事。		B	B-12
458	「明治の御代に生れて幸さ。僕などは未来記を作るだけあって、頭脳が時勢より一二歩ずつ前へ出ている*から*ちやんと今から独身でいるんだよ。」		451	这都是生在明治圣代的幸运啊。比如我吧,正因为能想出来未来记,所以我的头脑要超出时势一两步,并从现在起过着独身生活。		C	C
459	芸術が繁昌するのは芸術家と享受者の間に個性の一致がある*から*だろう。		452	艺术◆所以◆能够繁荣,◆是因为◆艺术家与享受者之间存在着共同的个性。		A	A-43
459	いやしくも人間の意義を完らしめんためには、いかなる価を払うとも構わない*から*この個性を保持すると同時に発達せしめなければならない。		451	既然为了使人类的意义得道完成,就应该不惜牺牲任何代价来保持这个个性,同时还应该使之发展。		C	C
459	今哲学者が云った通りちやんと滅してしまふ*から*仕方がないと、あきらめるさ。		452	不过正像现今的哲学家所说的,毫无办法,它们事实上已经灭亡,只好认了呗。		C	C
460	人々個々のおの特別の個性をもってる*から*、人の作った詩文などは一向面白くないのさ。		452	而是◆因为◆每个人都有自己的个性,对别人写的诗文丝毫不感兴趣。		A	A-1
460	幸いに明治の今日に生れた*から*、天下が挙って愛読するのだろうが…		452	幸而你生在明治的今天,◆所以◆举世还在爱读你的诗哪……		A	A-36
460	あんな作品はあんな個性のある人でなければ読んで面白くないんだ*から*仕方がない。		452	◆因为◆那种作品,如果不是具有那样个性的人,读起来肯定不会感到有趣,这又有什么办法呢。		A	A-1
461	昔は孔子がたった一人だった*から*、孔子も幅を利かしたのだが、		453	古时候只有一个孔子,◆所以◆孔子吃得开,		A	A-36
461	個性の発展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく滅多に寝返りも打てない*から*、大将少しやけになってあんな乱暴をかき散らしたのだね。		453	他睡伏在个性发展的十九世纪,连对邻人都不能毫无顾虑地随便转侧翻身,◆于是◆这位老兄有些自暴自弃地乱写一通。		A	A-38
461	不平だ*から*超人などを書物の上だけで振り廻すのさ。		453	◆因为◆不满,◆所以◆只能在书上做文章。		A	A-7
461	それもそのはずさ昔は一人えらい人があれば天下翕然としてその旗下にあつまるのだ*から*、愉快なものさ。		453	这也没什么奇怪嘛,◆因为◆在古代只要有了不起的人物出现,天下人就会集聚到他的伞下,这是令人非常愉快的。		A	A-1
461	愉快な事実があって、この愉快な事実を紙に写しかえたのだ*から*、苦味はないはずだ。		453	◆由于◆事实上的愉快,将这种愉快的事实写到纸上,自然不会有痛苦的味道。		A	A-15
462	参考のためだ*から*、おれが面白い物を読んで聞かせる。		454	为了供各位参考,我给大家念一段有趣的文章。		C	C
464	「いろいろな女の悪口があるが、その内には是非君の妻さいも這入る訳だ*から*聞くがいい」		454	书里边说了女人种种坏话。不过,也一定包括你妻子在内,你◆就◆听着吧。		B	B-1
464	「まだ四五ページある*から*、ついでに聞いたらどうだ」		456	还剩下四、五页,我一起都念给你听好不好?		C	C
464	「先生胃病は近來いいですか、こうやって、うちにばかりいなさる*から*、いかんたい」		457	先生,近来胃病好些了吗?这样整天坐在屋里咋行?		C	C
464	十六世紀のナッソ君の説です*から*御安心なさい」		457	是十六世纪一位名叫南希的人的说法,请你放心。		C	C
465	どうしてもあんな所にいると、傍が傍だ*から*、おのずから、そうなってしまうです」		457	看来,在那种地方工作,耳濡目染,自然就会变成这样子的。		C	C
466	あなたが博士にならんものだ*から*、私が貰う事にしました」		458	您的博士终于没有当成吗?◆因为◆您不当博士,◆所以◆就由我来当啦。		A	A-7

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
468	しかし先方では非貰うてくれ貰うてくれと云う*から*、とうとう貰う事に極めました、先生。		459	不过对方非让我娶她不可, 先生, 您看我有什么办法, ◆只好◆决定娶她啦。		B	B-9
472		先達てカーテル・ムルと云う見ず知らずの同族が突然大気を揚げた*ので*、ちょっと吃驚した。	463		想不到就在前一阵子, 出现了一个与我从未谋过面、名叫“摩尔”的同族, 它在那里大出风头, ◆使◆我着实吃了一惊。	B	B-5
473		眼をあいていると飲みにくい*から*、しっかり眠って、またびちゃびちゃ始めた。	465		我知道睁着眼睛是难喝下去的, ◆于是◆我紧闭着眼睛, 又喝了一回啤酒。	A	A-38
473		苦しい*から*爪でもって矢鱈掻いたが、	466		我不知如何是好, 只是用爪子乱抓一通。	C	C
474		無理を通そうとする*から*苦しいのだ。	467		◆由于◆我硬要做这种办不到的事儿, ◆所以◆颇受痛苦。	A	A-18
474		もぐれば苦しい*から*、すぐがりがりをやる。	466		一钻进水里就憋得十分难受, ◆于是◆又挠起缸来。	A	A-38
474		仕方がない*から*後足で飛び上っておいて、前足で掻いたら、がりと音がしてわずかに手応があった。	466		没办法, 我翘起后面的两条腿, 再用前腿去划水, 总算有点奏效, 水哗啦啦地发出响声, 头也总算浮出水面。	C	C
	「いえ、こないだうちから国へ帰省していたもんです*から*、暫時中止の姿です。		432	不, 我最近回了故乡一趟, ◆所以◆暂时中止了,		A	A-36
		であるとすれば、これから私の品性を侮辱するような事を自分でお目にかけます*から*、何とか云っちゃいやよと断わるのと一般である。	386		既然是这样, 这不就等于说:“现在我自己要做出侮辱自己品性的事给你们瞧了, 但是, 就是不准你们说三道四。”	C	C
		落ちるのを遅くすると降りる*ので*、降りるのを早くすると落ちる事になる。	233		将“掉下来”放慢, 就会变成“爬下来”。将“爬下来”加快, 就会变成“掉下来”。	C	C